

日本現代物理学の父 仁科芳雄博士と 我が国加速器科学の創始

仁科芳雄博士（1890年12月6日生～1951年1月10日没）
仁科研究室（1931年創設）

仁科記念財団 常務理事

（1955年創立）

仁科加速器研究センター 特別顧問

（2006年創設）

矢野 安重

（1948年6月生）

創立百周年記念
理研の歴史
講演会
科学の源流と
理研精神 vol. 6

理論と実験の大いなるパイオニア

YOSHIO NISHINA

日本現代物理学の父 仁科芳雄博士と
我が国 加速器科学の創始

2016年
10月12日(水)
15:30 - 17:20

場所
筑波 バイオリソース棟 1 階 森脇和郎ホール（メイン会場）
和光 大河内記念ホール
仙台 テラヘルツ光研究棟 1 階セミナー室
横浜 中央研究棟展示室 兼 セミナー室 C210, C212
大阪 A 棟 3 階大会議室
神戸 1 CDB A 棟 7 階セミナー室
神戸 2 計算機棟 R511
播磨 物理学研究棟 小会議室
各事業所へ TV 会議中継、各 PC へのストリーミング配信を予定
配信 URL: <http://live.intra.riken.jp/20161012>
問合せ先 創立百周年記念事業推進室 since_1917@riken.jp

理 研
百 年

RIKEN CENTENNIAL
Since 1917

「ラボ」列島

「日本の現代物理学の父」と呼ばれる仁科芳雄（1890～1951）の名を冠した「仁科加速器研究センター」が今春、埼玉県和光市の理学研究所に設立された。これまでの加速器実験グループを軸に、原子核

「物質創成」謎に迫る

・素粒子関連の研究チームを、理論研究から産業応用までほとんど統合した。総勢約900人、常

理研・仁科加速器研究センター

勤の研究員だけで234人の大所帯となった。最大の目玉は、約550億円かけて建設中の「人類の公共財」として

国際共用にする。

ほとんどない。

仁科は、37年に国内初（世界2番目）のサイクロトロンを理研で建造した科学者。敗戦後の混乱期には理研の復興に尽くした。理研はその後もサイクロトロンを開発し、「超伝導」は9台目だ。著名な科学者の名がつく研究機関は、日本には

朝日新聞
2006年5月

仁科記念財團設立發起人會役員

會 長 吉 田 茂

副會長 龜 山 直 人

副會長 一 萬 田 尙 登

起 案 委 員

龜 山 直 人 茅 誠 司 菊 池 正 士

木村健二郎 瀨 藤 象 二 武 見 太 郎

朝永振一郎 藤 岡 由 夫 湯 川 秀 樹

我 妻 榮

仁科記念賞の授与「

ノーベル物理学賞他を授与された仁科記念賞受賞者一覧

年度	受賞者	日本学士院賞	恩賜賞	文化功労者	文化勲章	ノーベル賞
1955	西島 和彦	1964		1993	2003	
1966	三井 進午	1967				
1957	久保 亮五		1969	1973	1973	
1959	江崎 玲於奈	1965		1974	1974	1973
1963	林 忠四郎	1971	1971	1982	1986	
1966	小田 稔	1977	1977	1986	1993	
1968	近藤 淳	1973	1973	2003	2020	
1970	西川 哲治			1989		
1975	山崎 敏光	1987	1987	2009		
1978	有馬 朗人	1993		2004	2010	
1979	小林 誠	1985		2001	2008	2008
1979	益川 敏英	1985		2001	2008	2008
1979	守谷 亨	1989				
1981	杉本 大一郎	1995				
1982	安藤 恒也	1983				
1983	外村 彰	1991		2002		
1984	江口 徹	2009	2009			
1984	川路 紳治	2007				
1985	飯島 澄男	2002	2002	2003	2009	
1985	田中 靖郎	1993	1993	2010		
1987	小柴 昌俊	1989		1988	1997	2002
1987	戸塚 洋二			2004	2004	
1987	海部 宣男	1998				
1989	野本 憲一	1995				
1990	佐藤 勝彦	2010		2014		
1990	十倉 好紀	2013	2013	2020		
1996	中井 直正	2008				

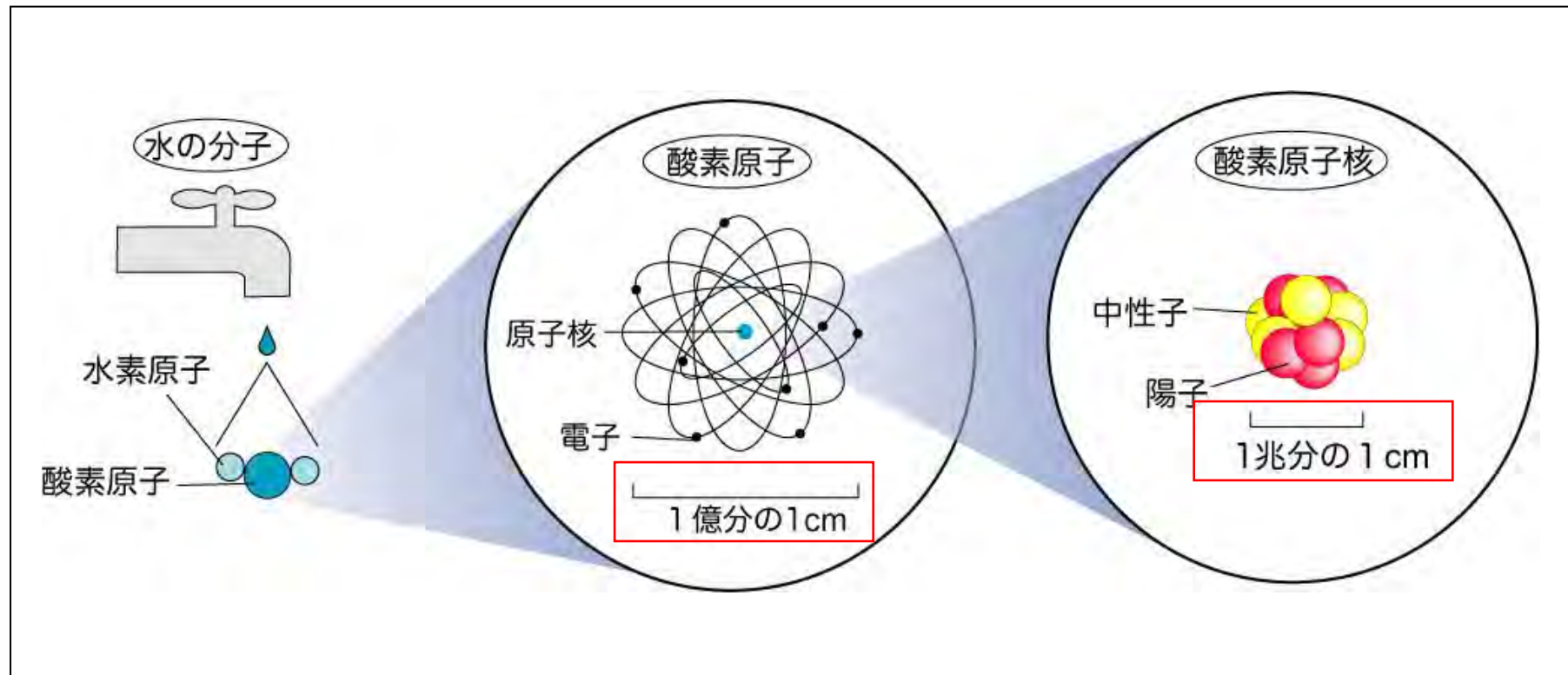
1996	中村 修二			2014	2014	2014
1999	梶田 隆章	2012		2015	2015	2015
2001	高崎 史彦	2017				
2003	鈴木 厚人	2006				
2005	森田 浩介	2016				
2012	細野 秀雄	2015				
2013	香取 秀俊	2015				

理化学研究所（埼玉県和光）
仁科加速器科学研究センター

RIビームファクトリー
(RIBF)
世界に冠絶する
重イオンビーム強度

RIビームファクトリー (RIBF)：元素変換研究のメッカ
放射性同位元素 (RI) をビームとして発生・利用する重イオン加速器施設

日常目にするものは、**光**と、**何個かの陽子と中性子からなる原子核**と
陽子と同数の電子の衣（電子雲）をまとった**原子の集合体**でできている。



原子に**原子核**があることがわかったのは1911年。
(**ラザフォード**、**人類最初の連金術師**：1908年ノーベル化学賞)

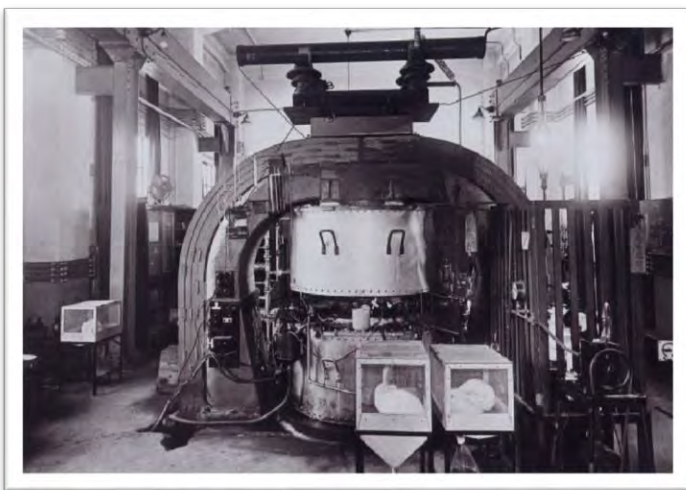
原子核が**陽子と中性子**でできていることがわかったのは1932年。
(**チャドウィック**：1935年ノーベル物理学賞)

元素(核)変換 (錬金術)

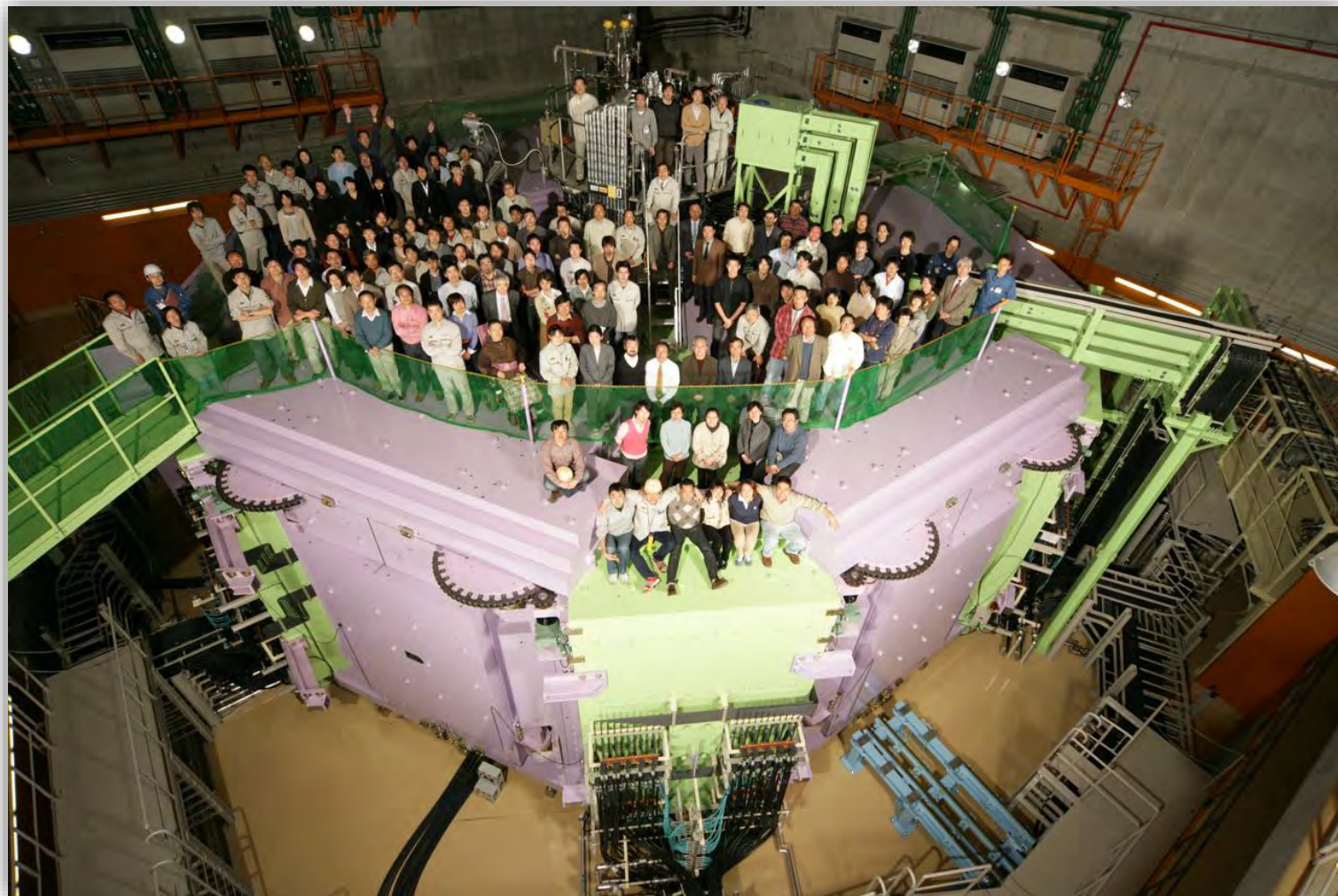
- 新同位元素・新元素の発見
- 元素の起源解明
- 原発からの放射性ゴミの有用化
- がん診断治療用放射性同位元素の製造

細胞核変換

- 重粒子線がん治療
- 植物の突然変異体作成

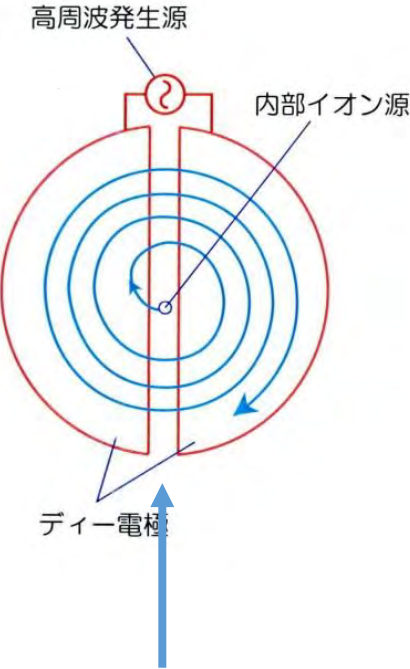
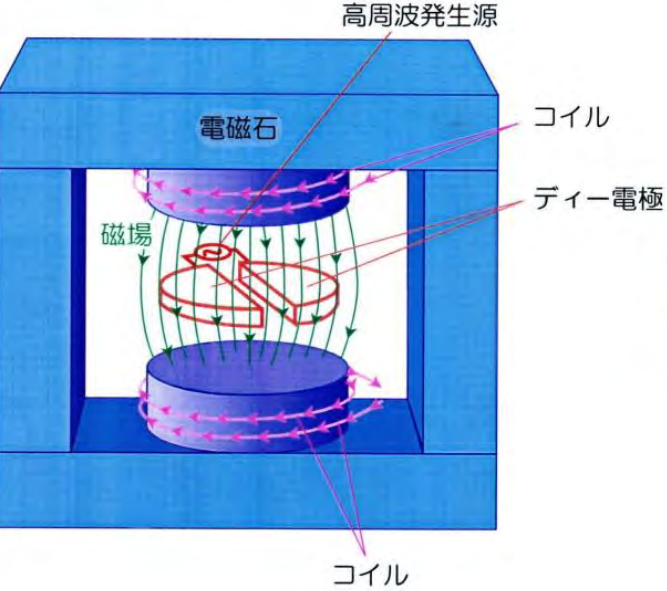


仁科先生の小サイクロトロン
(理研第1号)
日本初、世界で2番目のサイクロトロン

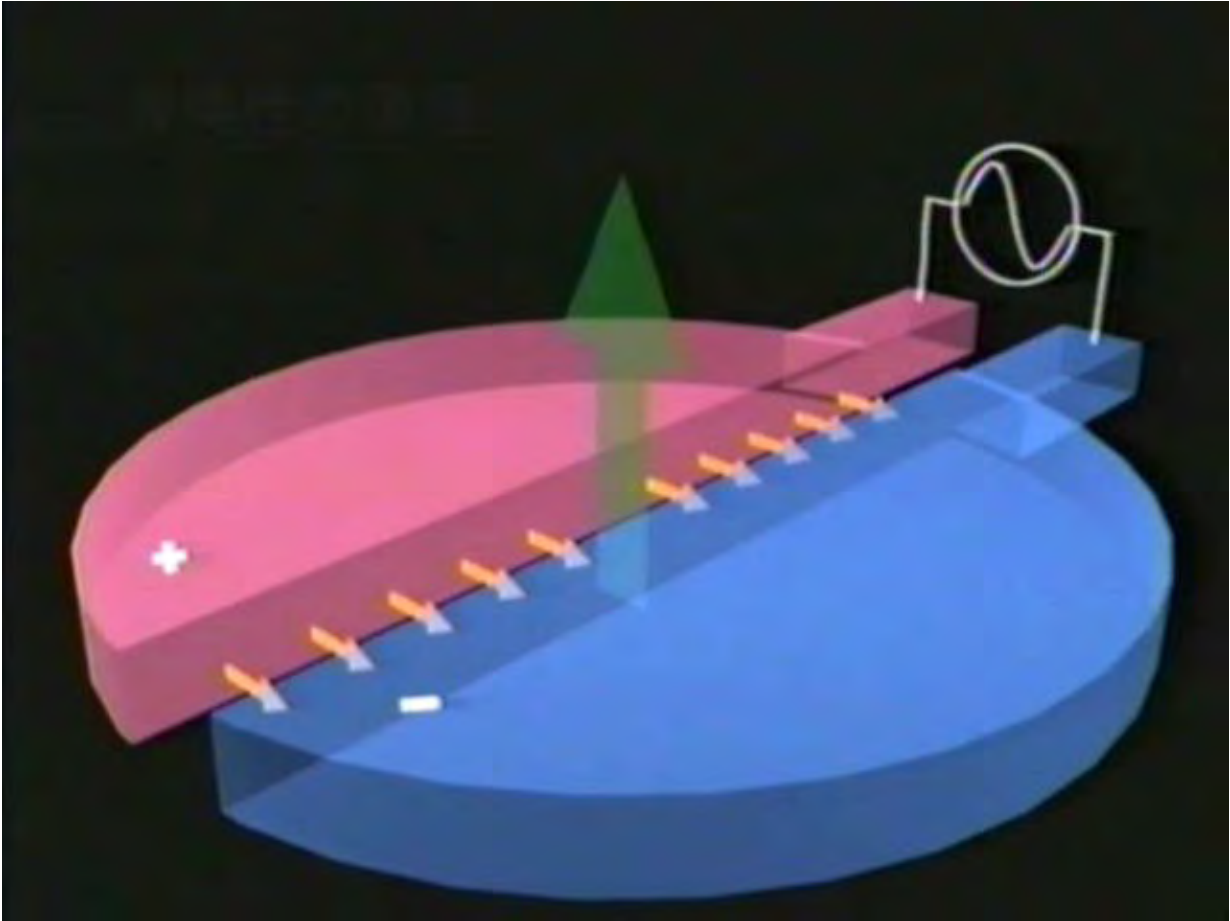


理研第9号サイクロトロン
世界最大、世界初の超伝導サイクロトロン
世界に冠絶する元素変換力

サイクロトロン



小さい加速電圧で
何回も加速する





仁科芳雄



木村健二郎

「U-237の発見」

93番新元素の発見を論文で示唆

Nishina et al., *Phys. Rev.* **57**, 1182 (1940)

“Induced β -Activity of Uranium by Fast Neutrons”

$^{238}\text{U}(n,2n)^{237}\text{U} \rightarrow \beta^- + ^{237}_{93}\text{U}$ (210万年 α 崩壊)

同年、マクミランとエイベルソンが

93番元素の発見を報告し、後にNpと命名

McMillan and Abelson, *Phys. Rev.* **57**, 1185 (1940)

$^{238}\text{U}(n,\gamma)^{239}\text{U} \rightarrow ^{239}\text{Np} \rightarrow$

This activity was induced appreciably only by fast neutrons obtained by bombarding lithium with 3-Mev. deuterons from our cyclotron. The experimental procedure was as follows.

A few grams of uranium oxide, U_3O_8 , carefully purified and freed from its disintegration products were exposed to fast neutrons for more than fifty hours. After the exposure, a uranium fraction (U_3O_8) was separated and purified from all possible elements produced by fission as well as from its own disintegration products. The most care was given to

radioactive family $4n+1$.

The sign of the β -rays was shown to be negative and consequently we suspected the production of a radioactive element of atomic number 93, the chemical properties of which are probably homologous to rhenium. From the decay curve it is clear that its period must be very long,

decay curve it is clear that its period must be very long, if it exists. To search for such an element, the irradiated uranium oxide, which was freed from fission products as well as its own disintegration products as above mentioned, was left for about 7 days, and was then dissolved in nitric acid. The solution, after an addition of perhenic acid, was treated with ammonium sulphide and then acidified with sulphuric acid. The precipitated rhenium sulphide, after the removal of contaminated sulphur by carbon bisulphide, was examined for β - and α -activities. Neither of them could be found within the error of our experiments. We may thus conclude, as in the case of 23-minute uranium,¹ that the 6.5-day uranium decays also into a very long-lived 93 element. The detailed accounts of the experiments will be given elsewhere.

The above investigations were carried out as a part of the work of the Atomic Nucleus Sub-Committee of the Japan Society for the Promotion of Scientific Research. We acknowledge the assistances given by our laboratory colleagues in connection with the irradiation of samples and by Messrs. N. Saito and N. Matuura regarding the chemical separations.

Y. NISHINA
T. YASAKI
H. EZOE

Nuclear Research Laboratory,
Institute of Physical and Chemical Research,

K. KIMURA
M. IKAWA

Chemical Institute,
Faculty of Science,
Imperial University of Tokyo,
Tokyo, Japan,
May 3, 1940.

Induced β -Activity of Uranium by Fast Neutrons

In the course of experiments on the fission of uranium by fast neutrons,¹ besides fission products the uranium fraction showed a β -activity with a period 6.5 days.

¹ Y. Nishina, T. Yasaki, H. Ezoe, K. Kimura and M. Ikawa, *Nature* **144**, 547 (1939); *Nature*, in press (1940).

² Y. Nishina, T. Yasaki, K. Kimura and M. Ikawa, *Nature* **142**, 874 (1938).

³ E. Segrè, *Phys. Rev.* **55**, 1104 (1939).

時は流れて、「ニホニウム」の発見



森田グループ総勢約30名
物理学者と化学者の連合軍

中性子によるショウジョウバエの突然変異

*Sex-linked Mutations of Drosophila melanogaster
Induced by Neutron Radiations
from a Cyclotron.*

By Yoshio NISHINA and Daigoro MORIWAKI.

(Received August 31, 1939.)

INTRODUCTION.

Only a few experiments with neutrons in the field of genetics have been reported. The first was that of Whiting (1) who obtained dominant lethals in *Habrobracon* with the aid of the University of California. Next, Nagai and Locher (2) were producing mutations in *Drosophila melanogaster* with neutrons from beryllium (485 g) irradiated by γ -rays of radium. They obtained a mutation rate of 1 in 98, or 44 lethals in 100. On the other hand, Timoféeff-Ressovsky and his co-workers (3) have been studying the same problem with neutrons produced by a lithium target with fast deuterons, and have reached the following conclusions:

1. Through neutron irradiation, increase in the mutation frequency is obtained, which is statistically well established.
2. The induced mutation frequency increases proportionally with the doses.
3. Action of neutron radiations per unit doses (per pair of ions inside tissues) for producing mutations is weaker than that of X- or γ -rays.

Snell⁽⁴⁾ studied the appearance of sterility and of heredity changes

- (1) P. W. WHITING: *Science*, 84 (1936), 68.
(2) M. A. NAGAI and G. L. LOCHER: *Nature*, 140 (1937), 111; *Genetics*, 23 (1938), 197.
(3) N. W. TIMOFÉEFF-RESSOVSKY: *Forschung u. Fortschr.*, 14 (1938), 165; N. W. TIMOFÉEFF-RESSOVSKY und K. G. ZIMMER: *Naturwiss.*, 26 (1938), 326; N. W. TIMOFÉEFF-RESSOVSKY, K. G. ZIMMER, und F. A. HEYN: *Naturwiss.*, 26 (1938), 108; K. G. ZIMMER und N. W. TIMOFÉEFF-RESSOVSKY: *Strahlenther.*, 63 (1938), 528.
(4) G. D. SNELL: *Proc. Nat. Acad. Sci.*, 25 (1939), 11.

We shall next deal with the dependence of the mutation frequencies on the stages of growth of the treated males. Generally speaking, the mutation rates in cases NI and NIV, both of which are in the same conditions regarding the stage of growth (adults), exceed that either of NII (pupae) or of NIII (larvae), although the dose is not the same for each case. From these results, it may

Sex-linked Mutations of Drosophila melanogaster Induced by Neutron Radiations from a Cyclotron.

By Yoshio NISHINA and Daigoro MORIWAKI.

(Received August 31, 1939.)

- (6) H. J. MULLER: *Ann. Entomol. Soc. Amer.*, 39 (1946), 246.
(7) W. G. MOOR: *Genetics*, 19 (1934), 209.

H. J. Muller 1946年ノーベル賞：
X線照射による突然変異体発生の発見

理研
パテント情報
1997年4月

重イオンビームを用いた 突然変異体植物の作出方法

対談出席者

吉田茂男 植物機能研究室
主任研究員
矢野安重 サイクロトロン研究室
主任研究員
阿部知子 植物機能研究室
研究員

重イオンビームを子房中の受精卵に照射することによって、形態レベルでの異常発現率が、従来の薬剤処理や放射線照射といった方法より、一桁以上も高いという画期的な植物の突然変異体の作成法が開発されている。

■あらゆる突然変異体が出現する

吉田 この方法の原理は、サイクロトロンで生成された窒素イオンやネオンイオンなどの重イオンのビームを、受粉後の植物子房に照射し、突然変異を起こさせるといふものです。

従来アルキル化剤(メタンスルホン酸エチル:EMS)を使う薬剤処理や、ガンマ線やエックス線を照射する方法よりも、致死的な変異が起こりにくく、数多く生き残る。しか



吉田主任研究員

も、生き残ったものの種をとって発芽させると、形態異常の発現率は既存の方法よりぐんと高い。

重イオンビームの照射はほんの一瞬で、ガンマ線のように一カ月も試料植物をフィールドにさらしておく、あるいは薬剤のようにその浸透時間やその後の薬剤除去の手間を考える必要もありません。実験プロセスの効率化が、時間的にも仕事量の面でもはかれます。

実験のポイントは、重イオンの核種、線量、受精後いつ照射するかというタイミングの三つを、試料に応じていかに制御するかにあります。今までの実験でこのポイントについてもだいたいの目安がついています。



重イオン照射によって誘導されたアルビノ変異株と正常株

阿部 主にBY-4とXanthi(キサンチ)という2種のタバコを実験材料としていますが、形態レベルでの様々な異常がでてきました。葉の色もアルビノ、薄緑、斑入りといったクロフィル欠損や、濃緑色ものが現れました。一方、EMS処理時

には、薄緑のものは出ても、アルビノは全く発現しませんでした。

葉の形にしても、細葉や巻葉、切れ込みのあるもの、側芽が過剰発達したものなどバリエーションに富みます。花も色は薄桃色から濃桃色まで、その大きさや花弁の枚数も様々です。個体全体としても、小型化、矮性、雄性不稔個体などが多数ありました。

特にXanthiの感受性は高く、照射後発芽した個体の10〜20%に形態異常が発現しています。

吉田 機能面でも面白いものが見つかっています。その一つに、クロロフィル合成を阻害する除草剤に対して抵抗性をもつものがあります。葉の表面にこの除草剤をつけると、そこが普通は白くなりますが、この変異体の場合は全く変化がない。

また、塩濃度2%でも生育する変異体も見つかっています。海水が3.3〜3.8%程度なのでかなり高濃度です。

とにかく、何か指標を決めてスクリーニングすると必ず出てくるといった感じです。スクリーニングの時期も、半生存率の当たりで行なうのが最も効率がいい、ということ



阿部研究員



正常株と形態変異株

が明らかになりました。

重イオンビーム照射の場合、ビームが直接受精卵の遺伝子に作用するのではなく、たとえていうなら、大きな建物の中に髪の毛数本分くらいのビームが入ってきて、その衝撃波によって、大きく遺伝子が欠損する、あるいは大きく組み換わるのではないかと今のところ考えています。このような大変異であるからこそ形態異常にまで繋がると...

■それは満開の桜の下で始まった

吉田 重イオンビームとの出会いは理研の花見にあります。

そもそも私たちの研究室では、植物の遺伝子がそれぞれどんな機能をもっているかを追究するために、突然変異体をつくって異常と遺伝子との関係を探っていました。アルキル化剤を使って実験を行ない、特に薬剤処理のタイミングについて詳しく調べていました。変異が起こりやすく、しかもそれが個体全体に遺伝形質として固定されるにはいつがよいか、ということです。その結果、受精後まもない卵割の進んでいない時がよいことが実験的に明らかになりました。

しかし、薬剤は浸透時間や薬剤除去の手間を要し、特定の組織を狙うことも難しいと、コントロールの面で難点が多い。他にいい方法はない

ものかと考えている時に、理研の花見で、サイクロトロン研究室の矢野さんと蕎麦をかたむけながら談笑する機会に巡りあったのです。



矢野主任研究員

矢野 吉田さんとは飲み友達で、互いに仕事の話はしなかったのですが、3年前のあの時は桜の花を眺めながら、これに重イオンビームを当てたらどうなるか、といった話になった。

仁科芳雄博士以来、理研にはサイクロトロンを原子核研究だけでなく、あらゆる分野に役立てるという伝統があり、どの位の線量だと突然変異体が生じやすいかなどの実験がマウスなどを使って行なわれ、データの蓄積がありました。そしてあの夜、植物とサイクロトロンが結びついたというわけです。



サイクロトロン生物照射室での実験の様子 写真の奥側から重粒子線が花の子房部分へ浴びせられる

吉田 理研のサイクロトロンの重イオンビームはエネルギーが高いので、大気中に打ち出せることを知りました。これなら生きたままの植物体を使え、私たちが調べてきた受精後のちょうどいいタイミングに合わせて目標箇所に正確に当てることができると...

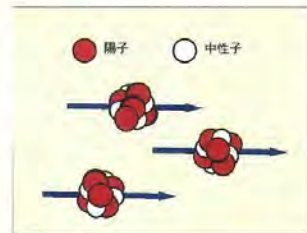
その年の9月から実験を始めましたが、結果はすばらしいものでした。

■10ミクロン径を狙い撃つ

阿部 今後は、形態や機能の異常がどのような遺伝子の欠損や組み換えで起こるのか、を追究していきたいですね。そこで、突然変異体のゲノム解析を始めているのですが、これは非常に手間ひまのかかる仕事です。

吉田 これについては、検出器や計算機の専門家などと共同研究を組み、検出や読み取りを迅速、簡便に行なうシステムの開発に乗りだしたところです。

重イオンビーム照射そのものに



重イオンビームとは?

原子からいくつかの電子をはずし、電荷を帯びさせた粒子をイオンと呼ぶ。特にヘリウムより重い元素のイオンを「重イオン」といい、物質中を通過する際に与えるエネルギーが他の放射線に比べて非常に大きい。リングサイクロトロンは重イオンを高エネルギービームとして発生する。

「放射性廃棄物の処理方法」が「21世紀発明賞」を受賞
 ー公益社団法人発明協会平成30年度全国発明表彰ー



本発明の目的と特長



従来の技術課題と本発明の技術

日本のノーベル物理学賞の系譜



長岡半太郎

理研主任研究員



西川正治



仁科芳雄



坂田昌一



湯川秀樹(49) 朝永振一郎(65)

仁科研究室



益川敏英



小林 誠
(08)



南部陽一郎

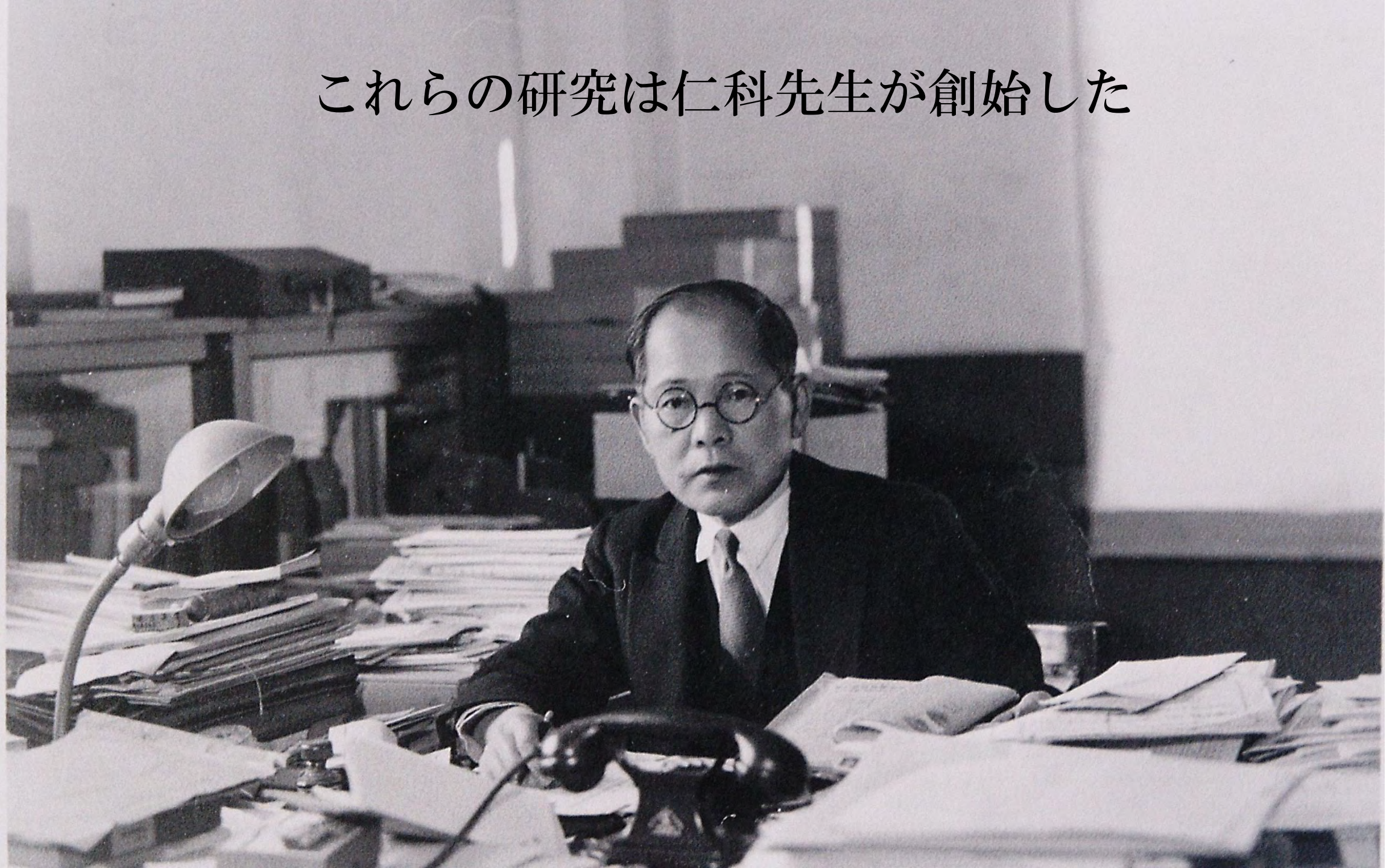


小柴昌俊(02)



梶田隆章(16)

これらの研究は仁科先生が創始した



仁科芳雄
博士の
執務室







理研第2号サイクロトロン (1939)

生誕120周年

理論物理学 の始祖

宇宙線研究

元素変換研究

加速器

アイソトープ科学
(放射線生物・医学)

原子力研究開発

土門拳 文化人写真集「風貌」



文京グリーンコート

1954年

六義園





六義園

日本アイソトープ協会

仁科記念財団

案内版

日本アイソトープ協会、仁科記念財団に当時のまま保存されている仁科芳雄の執務室、「ここに理化学研究所ありき」の案内板

～ 理化学研究所ここにありき ～

理化学研究所(理研)は、大正6年(1917年)財団法人として創立された。理研は歴史上に偉大な足跡を残し、今もなお日本の近代科学の推進役を果たしている。

世界初の原子模型を発表した長岡半太郎博士、KS鋼を発明した本多光太郎博士、世界初のビタミンB₁抽出に成功した鈴木梅太郎博士、日本初のサイクロトロン建設をした仁科芳雄博士など、数多くの著名な研究者たちがここに参集した。

また、ノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士、朝永振一郎博士など多くの優れた研究者を輩出した。まさに、科学者たちの自由な楽園と呼ぶにふさわしい環境だった。

理研は昭和23年(1948年)に改組され、仁科博士を初代社長とする株式会社科学研究所が設立された。この理研の流れを汲む科学研究所が科研製薬の前身である。



高峰譲吉（安政元年加賀藩典医の子として生まれる。明治12年工部大学校（後の東京帝国大学工学部）応用化学科の第1回卒業生。イギリスに留学、帰国後、農商務省に勤める。明治27年（1894年）タカジスターゼ抽出に成功、1900年アドレナリンの分離精製に成功。財を築きニューヨークに大邸宅を構え日米交流に尽力した。1854-1922年）

高峰譲吉 大化学者
タカジスターゼ
アドレナリン

築地精養軒

理化学研究所の創設
1917年3月20日

日本の産業振興のための
総合純正応用科学研究所

渋沢栄一（埼玉県深谷の豪農の子。長じて幕臣となり、幕府の使節団の一員として1867年パリ万国博覧会に出席し、1年間在欧。この間に明治新政府が発足、帰国後は新政府に仕官。その後、独立して明治財界の大立者となり、日本に資本主義制度を築くリーダーとなった。「財なき財閥」といわれ、政財界に大きな影響力を持った。1840-1931年）

渋沢栄一 大財界人
資本主義制度を築く



池田菊苗（きくなえ）（元治元年加賀藩士の家に生まれ、後に薩摩藩池田家の養子となる。化学者、東京帝国大学教授。理化学研究所の創立に参画、のち主任研究員。1908年（明治41年）にグルタミン酸塩からうま味の「究極的存在」であるグルタミン酸ナトリウム塩を得る方法を発明し、同年特許を取得。明治末期に「味の素」として発売された。1864-1936年）

池田菊苗 化学部長
味の素



長岡半太郎（慶應元年九州・大村藩士の家に生まれる。明治17年東京帝国大学理学部に入学、卒業後ドイツに留学。帰国後、東京帝国大学教授となったが、次第に原子物理学への関心を高め、明治36年（1903年）に原子の土星模型を提唱した。「雷親父」といわれたが、多数の優秀な門下生を育てた。また、理研創立時から理研での研究振興に尽力し、後に大阪帝国大学創立にかかわり、初代学長となった。我国の物理学発展の大先達である。1865-1950年）

長岡半太郎 化学部長
原子模型
仁科博士の師匠
湯川博士ノーベル賞推薦



大河内正敏（上総・大多喜藩主の子として東京に生まれる。東京帝国大学明治36年卒業の銀時計組。工学者（専門：弾道学）、実業家、1911年東京帝国大学教授、1915年貴族院議員。理化学研究所第3代所長（1921-1946年）として理研発展を主導した。第二次世界大戦後、戦犯の疑いで巣鴨の拘留所に収監されたが、翌年疑いが晴れて釈放された。1878-1952年）

大河内正敏 第3代所長
主任研究員制度
理研コンツエルン創始
田中角栄の師匠

1890年12月6日、岡山県里庄村（現・里庄町）に生まれる。岡山中、第六高等学校をへて、1918年東京帝大電氣工学科卒。理化学研究所・東大大学院で長岡半太郎に師事し、1921年から28年まで英、独、デンマークに留学。デンマークのボーア、ヘベシーら著名な物理学者の指導を受けた。米国で著名物理学者と会って帰国

1931年、理化学研究所の主任研究員になり仁科研究室開設。日本に素粒子原子核物理学、核化学、放射線生物などが定着させ、後にノーベル賞を受賞する湯川秀樹、朝永振一郎両氏ら多くの学者を育てた。

太平洋戦争中は、軍の要請を受けて原爆研究に傾注。この研究はニシナの頭文字をとって「二号研究」と言われた。日本は当時、欧米の科学雑誌も届かない状態で、開発は困難を極めた。それでも、仁科が研究にまい進したのは、日本の基礎研究のレベルを高め、若い学徒を戦場に送らないためだったと言われる。仁科が指導した理研には、旧習にとらわれがちな帝国大学とは違った自由闊達な雰囲気があり、「科学者の楽園」だったと述懐する科学者もいる。

広島に原爆が投下された際には、軍の要請を受けて現地調査。被害状況などから原爆と断定した。長崎でも現地の様子を調べた。仁科は米国での原爆開発も難しいとの見方を軍に伝えており、原爆が投下された際、部下に宛てた手紙で「腹を切る時がきた」と記している。

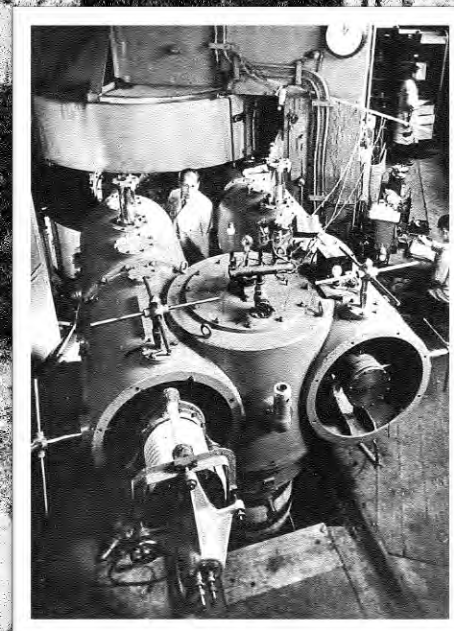
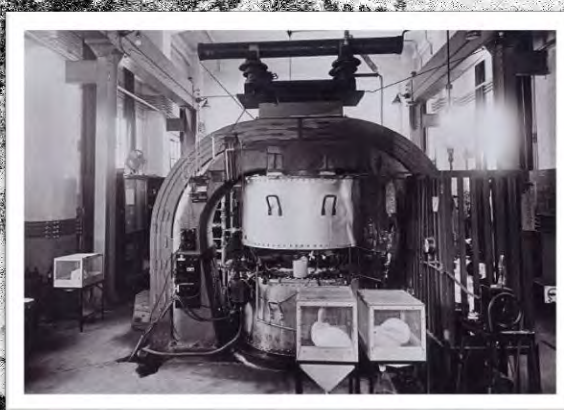
終戦後の混迷の時代に、理研解体を回避するために奔走し、原子力の平和利用を強く思い描き、原子力の国際管理を提唱。さらに、科学者による不戦同盟を結成し、科学者が戦争に巻き込まれ利用されることを防ぐ枠組みをつくることを提案した。

道半ばで51年1月10日に没した。

東京都文京区本駒込
旧理化学研究所（1917年～1958年）

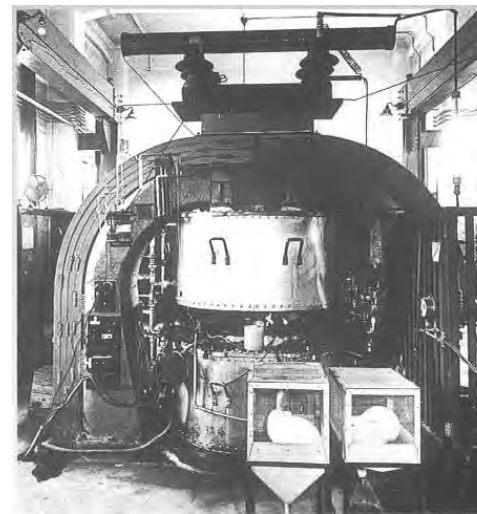
1954年

六義園

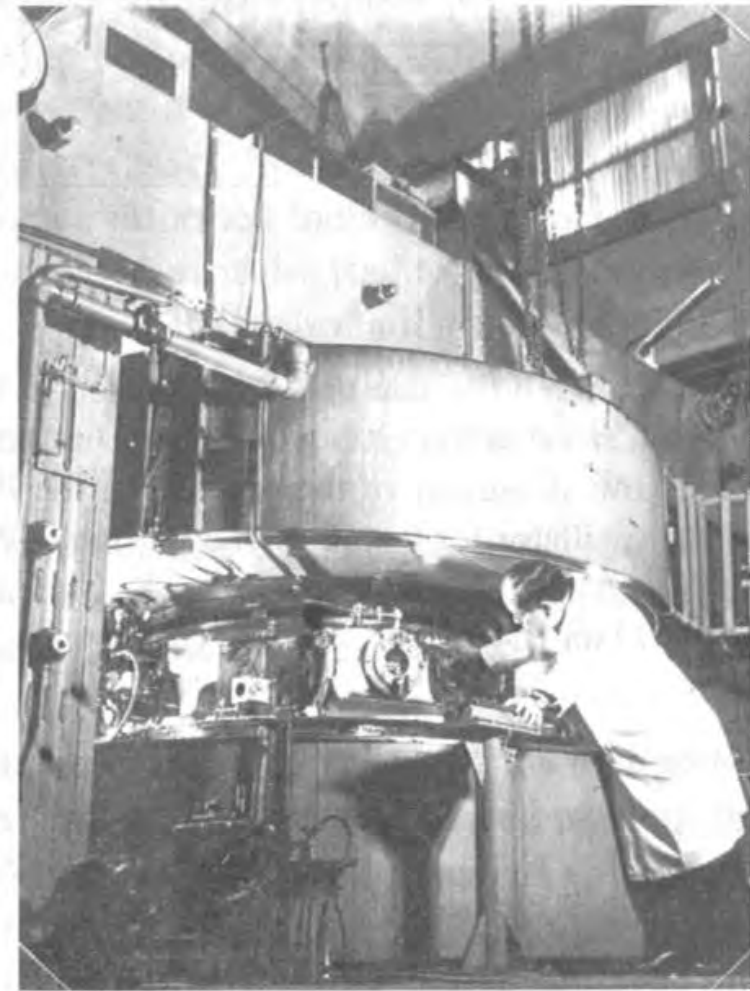




仁科研究室研究紹介パネル



日本初、世界2台目
小サイクロトロン

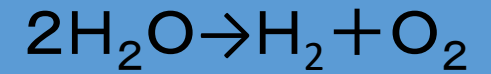


世界最大
大サイクロトロン

中世の錬金術師（水銀や鉛から金をつくりたい）
このころから物質が元素からできていることは知っていた
錬金術師は化学者だった

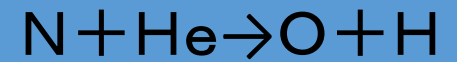


化学反応

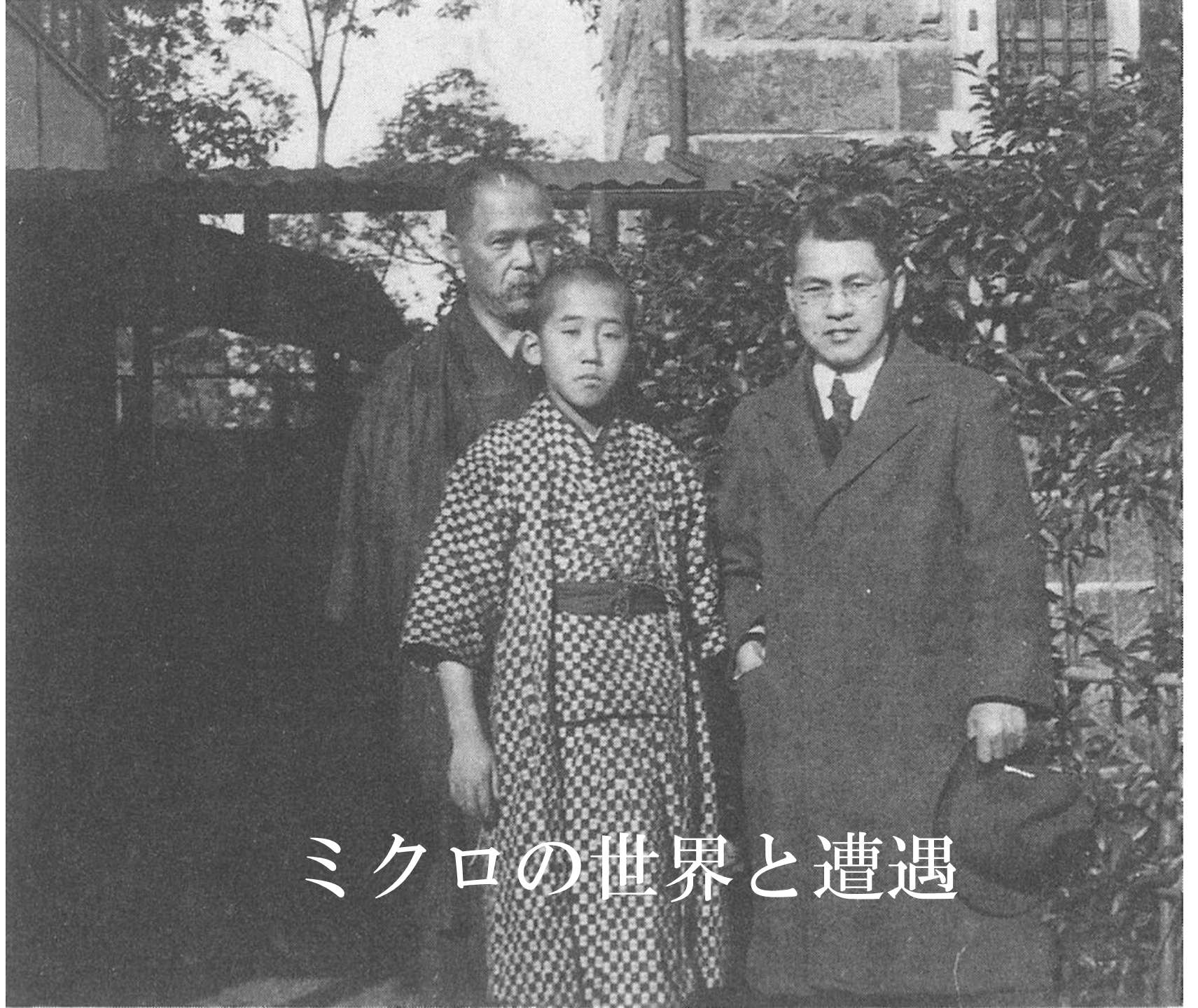


元素の数と種類は同じ

元素変換



人類初の核反応



ミクロの世界と遭遇

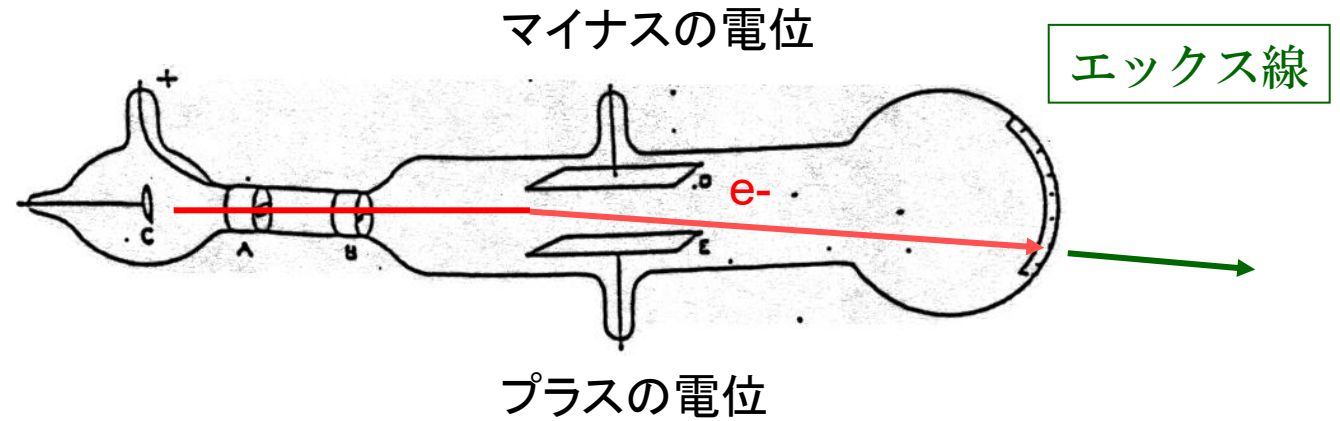
理研からイギリスへ留学前

(1920年 30歳 東京目黒にて)

東大工学部を主席で卒業し、理研に入所

仁科先生は、電気エンジニアだった

電子の発見： ミクロ世界（原子の構造）研究の幕開け



陰極線管（人類初の加速器）
で電場で曲げられるマイナスの電荷の電子の発見

サー・ジョゼフ・ジョン・トムソン（Sir Joseph John Thomson, 1856-1940）
イギリスのケンブリッジ大学キャベンディッシュ研究所2代目所長。
1906年に「電子の発見と気体の電気伝導に関する研究」で
ノーベル物理学賞を受賞。

エックス線を偶然に発見 (原子からの放射線)

陰極線管 (20kV) で実験中発見

- 厚紙でおおう
- 暗い部屋
- シアン化バリウム (蛍光体) が光る
- 後に写真乾板に撮像



レントゲン
(1845-1923)

1901年第1回ノーベル物理学賞

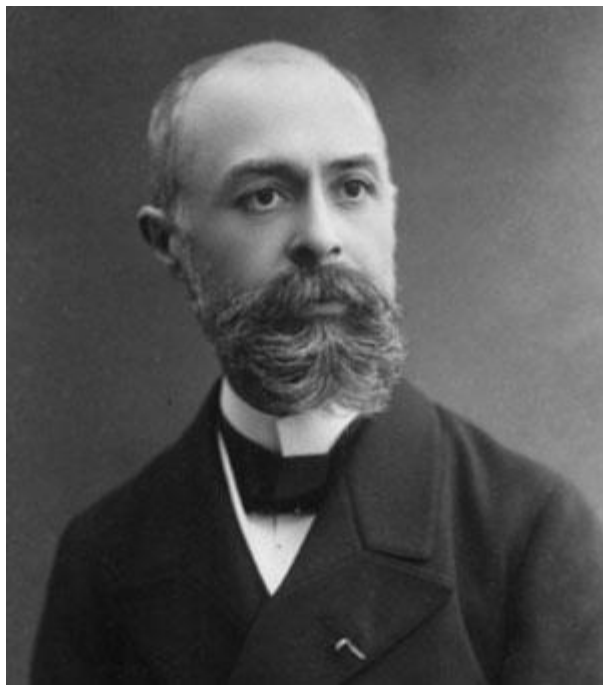
可視光よりはるかに
透過力が強い



放射能を偶然に発見 (ウラン原子核からの放射線)

アントワーヌ・アンリ・ベクレル (Antoine Henri Becquerel 1852-1908)

1903年、「放射能の発見」でノーベル物理学賞を
ピエール・キュリー、マリ・キュリーと共に受賞。



ウランが原子核の存在を
人類に伝えた

ベクレル線: アルファ線、ベータ線、ガンマ線
(ラザフォード)



天然の高エネルギー
粒子線（アルファ線）源の発見

ウランより強い放射能を求めて

ラジウム、ポロニウムの発見

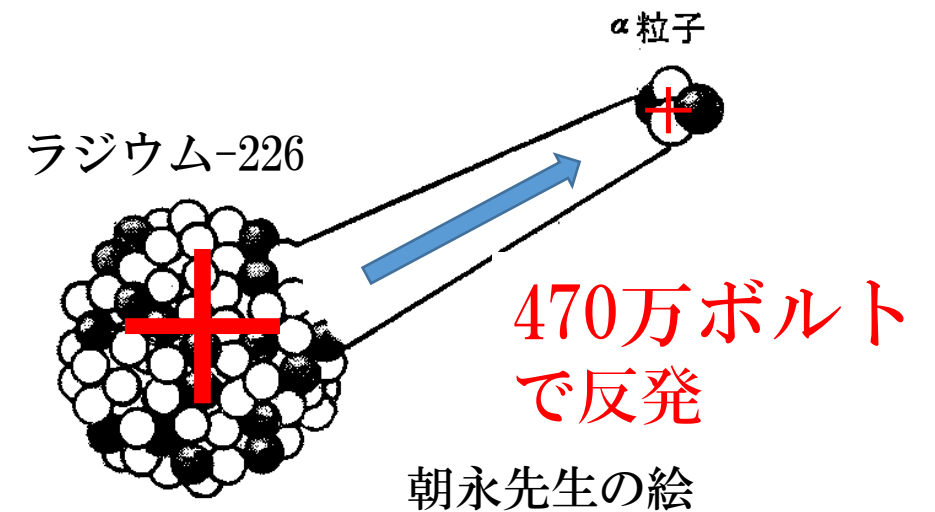
キュリー夫人

1903年「ノーベル物理学賞」

1911年「ノーベル化学賞」

キュリー

1903年「ノーベル物理学賞」



ラザフォードの原子核の発見

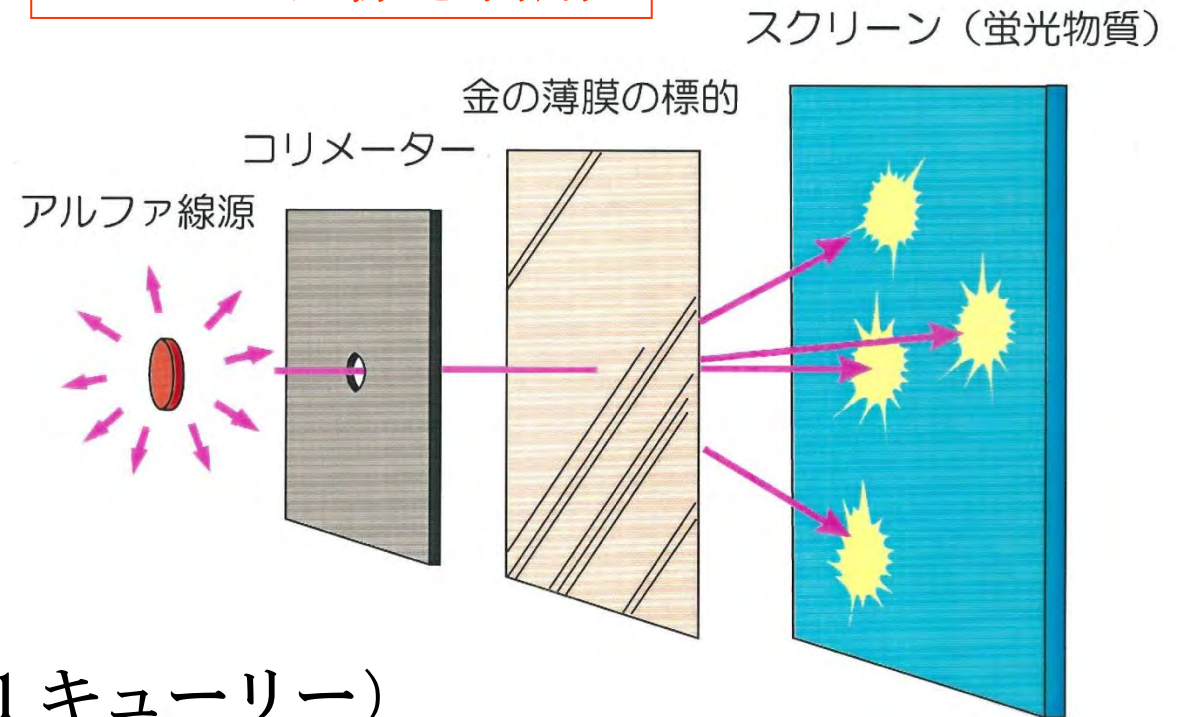


アーネスト・ラザフォード

1908年ノーベル化学賞

「元素の崩壊、放射性物質の化学に関する研究」

キュリーの
天然の高エネルギー
アルファ線を利用



キュリーのアルファ線源

ラジウム-226

ウラン鉱石2.5トンから1グラム

放射能： 3.7×10^{10} 回放射線発生／秒（＝1 キュリー）

実験結果（1911年）

後方に跳ね返る頻度が極めて少ない

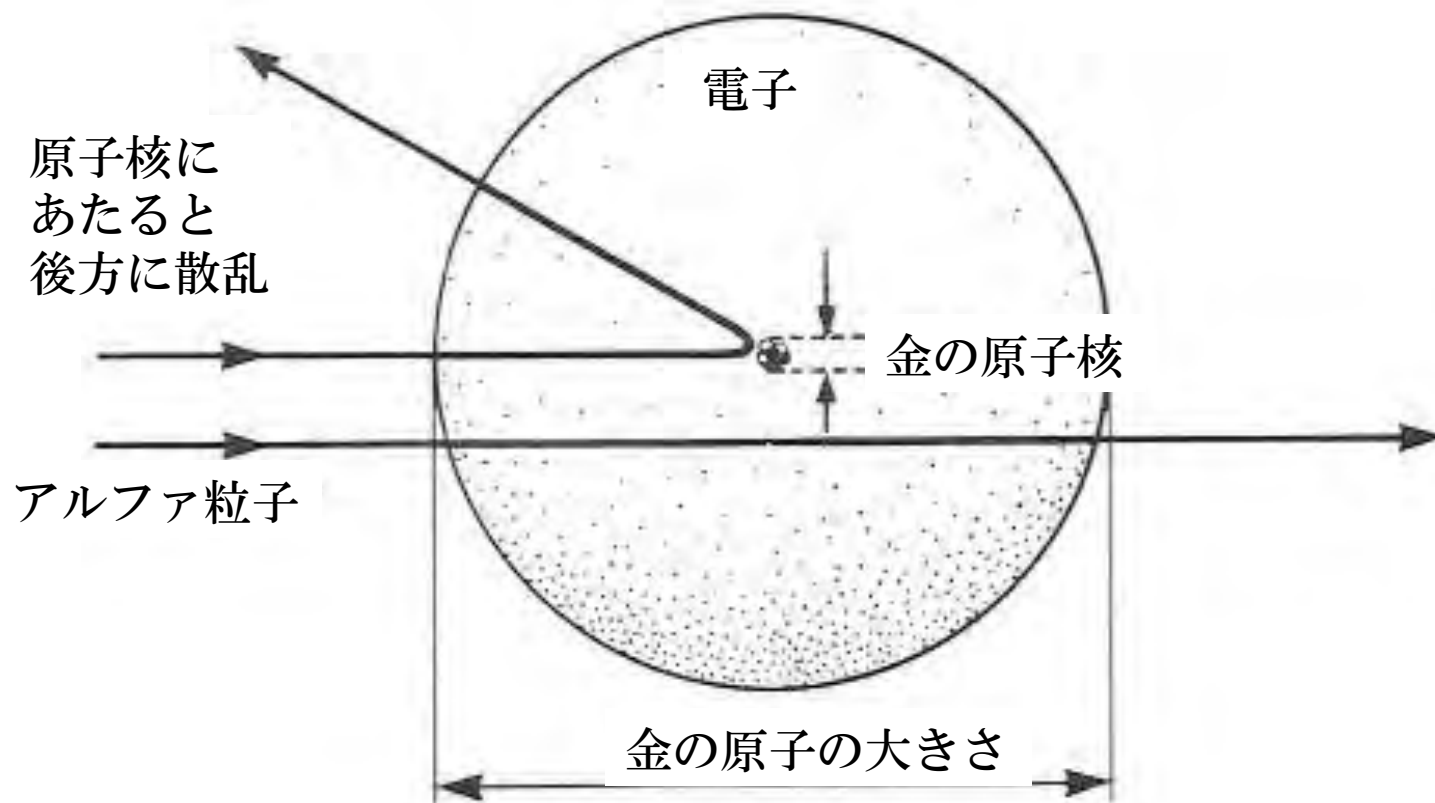
的の大きさが極めて小さい

計算してみると

大きさは、1兆分の1cmくらい

原子の大きさの1万分の1

質量は原子のほとんどすべて



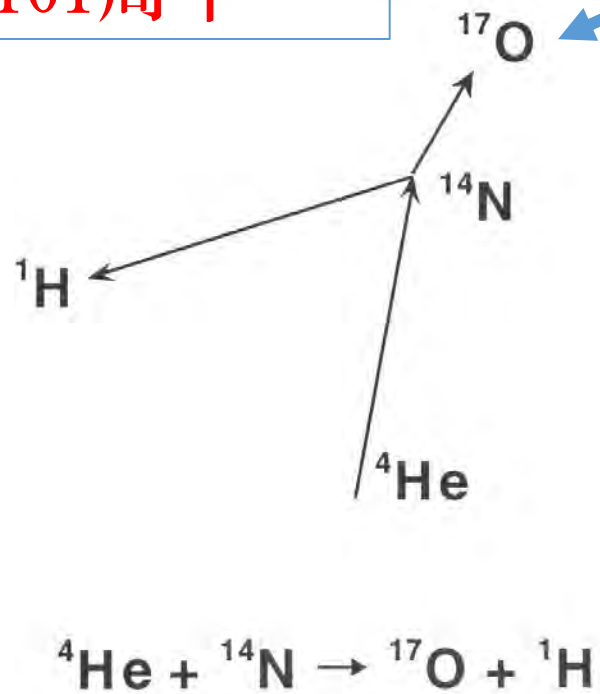
何が分かったか

＋の電荷をもった原子核同士に働く反発力
 $\propto 1 / (\text{距離})^2$ 乗

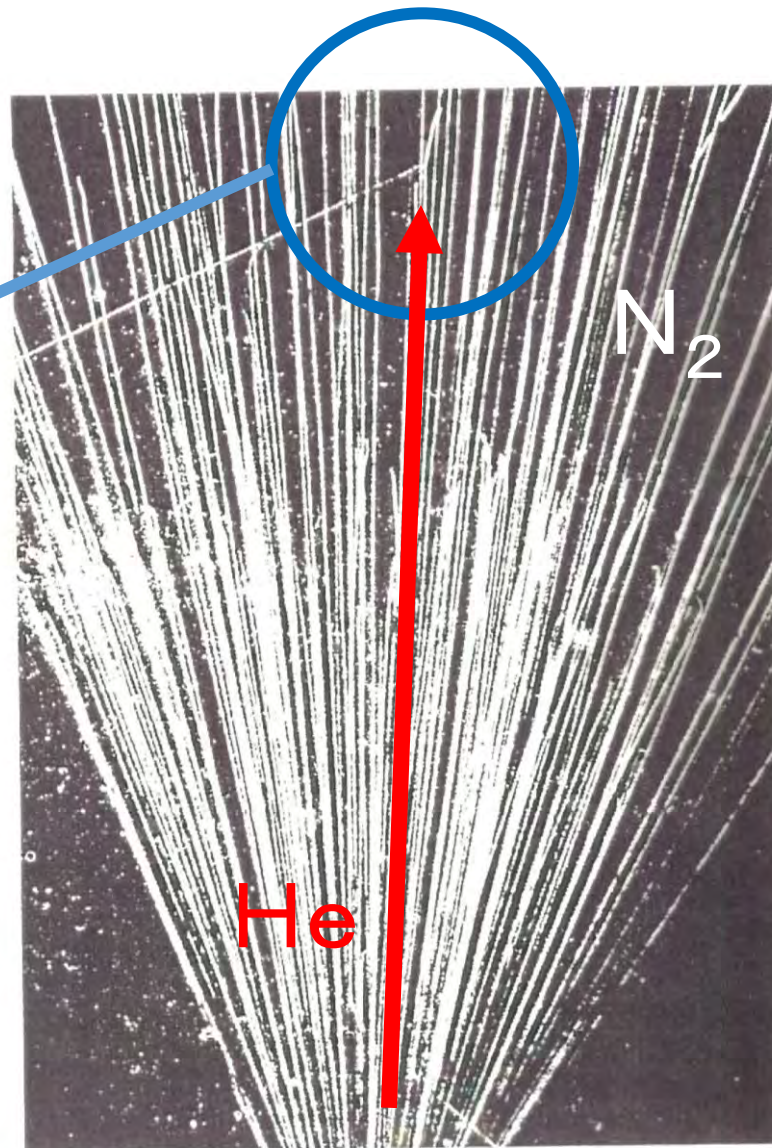
原子核が極めて小さく接触するときの
距離での反発力がめっちゃくちゃ大きい

原子核を接触させるには、**100万ボルト**
以上の電位差で加速する必要がある

ラザフォードの
人類初人工元素変換
(1919年)
今年には101周年



人類初の連金術



ウイルソンの霧箱写真
1897年発明
1927年ノーベル物理学賞

キュリーのアルファ線源
天然の470万ボルト粒子線

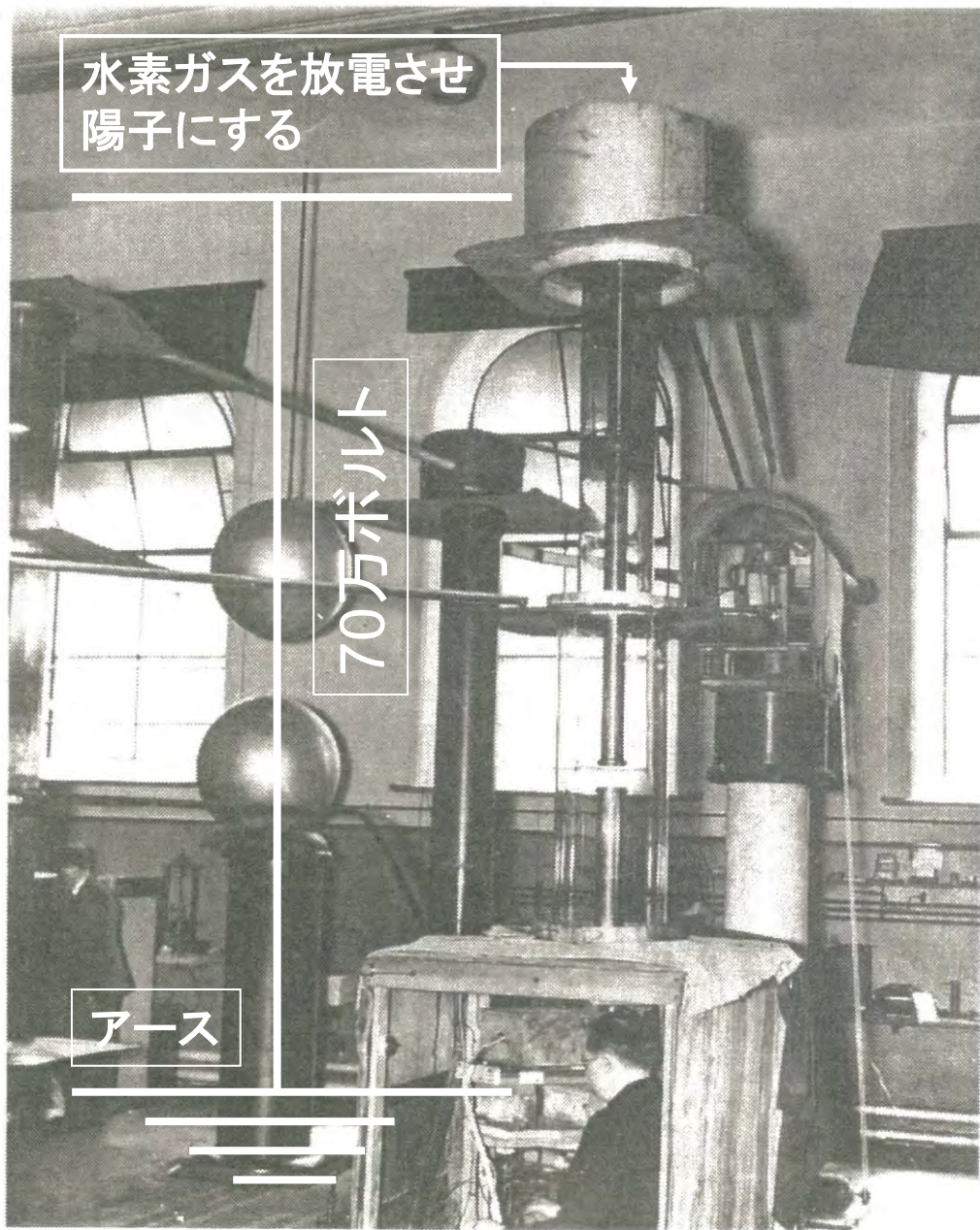
「核反応がおこるエネルギーまで
粒子を人工的に加速する
加速器の実現を」



コッククロフト
1932年原子核の人工変換
1951年ノーベル物理学賞

ラザフォード

ウォルトン
1932年原子核の人工変換
1951年ノーベル物理学賞

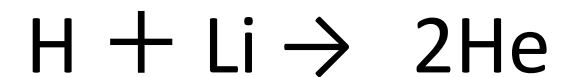


コッククロフト

高電圧加速器の誕生

原子核の人工変換に成功

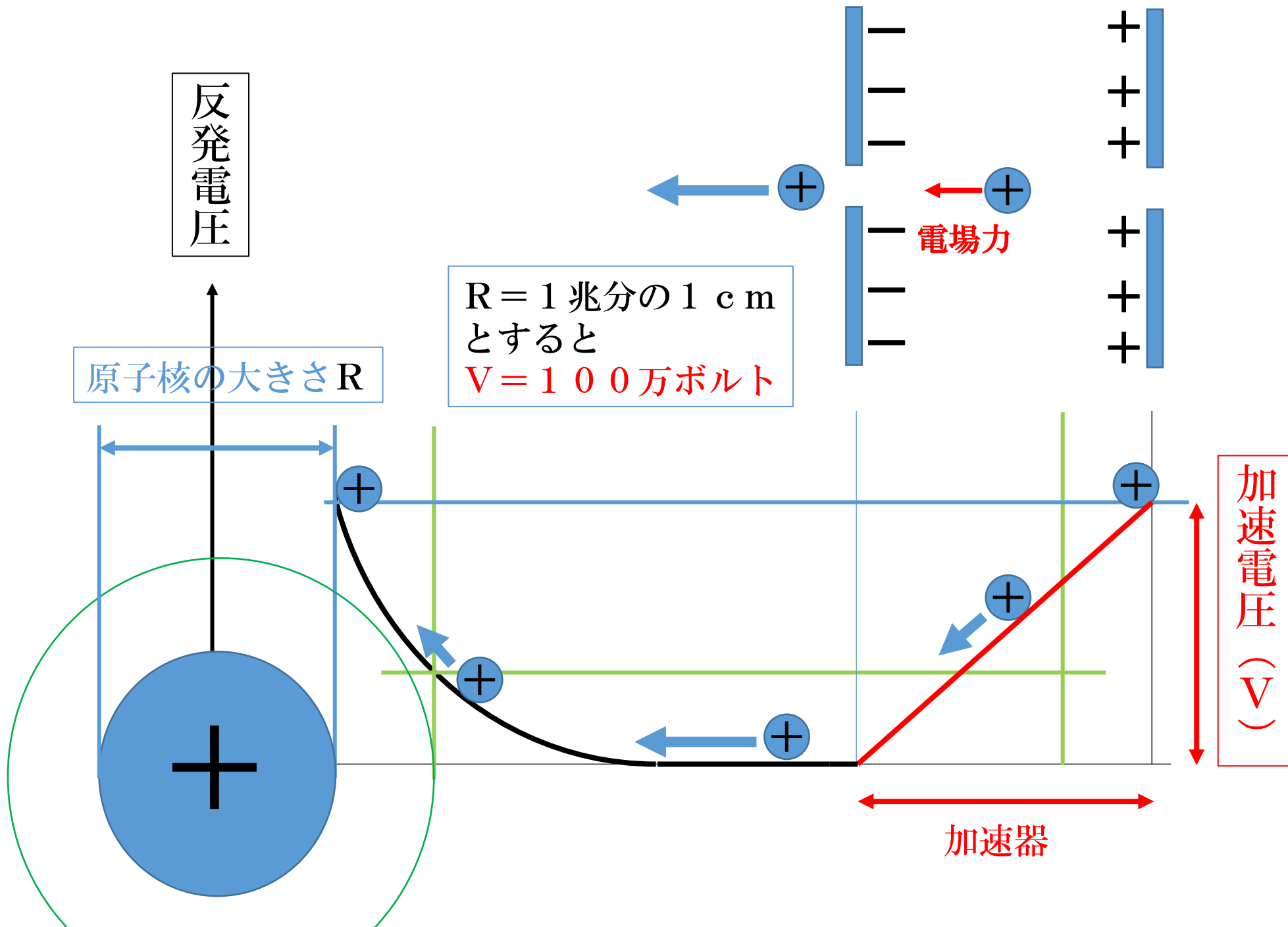
70 万ボルト 陽子Hビーム

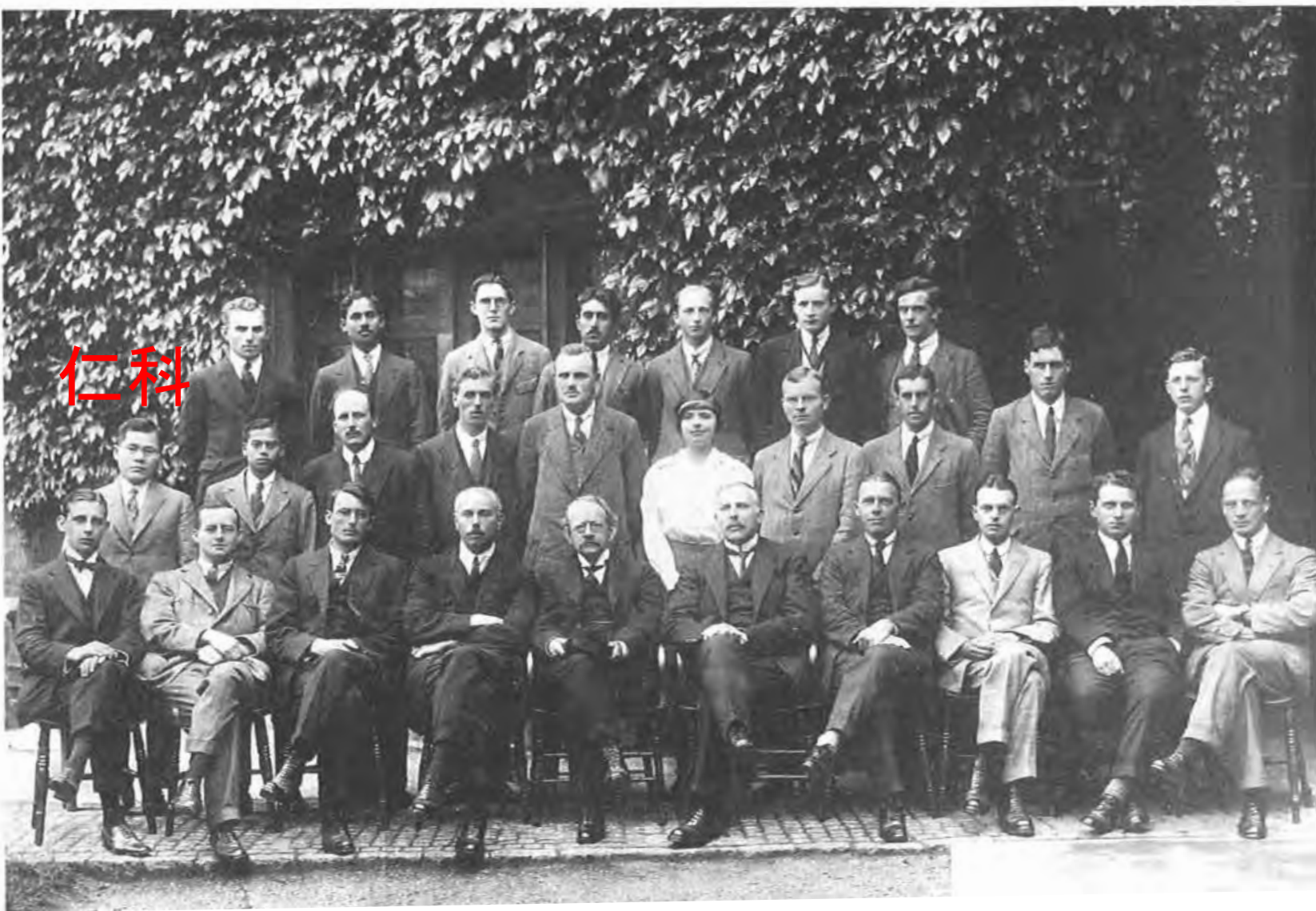


リチウム Li
標的

ヘリウム He 原子核

ヘリウム He 原子核





J.J.トムソン：電子の発見
（→エックス線の発見）
ラザフォード：原子核の発見
元素の人工変換
アストン：質量分析器発明
同位元素を発見
（→原子核は陽子
と中性子からなる）
アップルトン：電離層発見
（短波通信）
カピッア：ヘリウム超流動の発見

財源：大英帝国

キャベンディッシュ研究所

ラザフォード（ボーアの師）のもとでエックス線分光学を学ぶ
（1921-1922）

ニールスボーアと出会い、ボーア原子模型に傾倒

bei Frau Nolde
Schillerstr. 49
Göttingen, Germany
25th Mar. 1923

To
Professor N. Bohr
Theoretical Physics Dept.
University of
Copenhagen, Denmark.

Dear Sir,

You may remember that I was working in the Cavendish Laboratory when you came to Cambridge about a year ago. At that time I was counting β -rays excited by γ -rays by means of Geiger's counter, and had the honour of speaking to you in the laboratory.

I left Cambridge last September and came here for the purpose of learning the German language.

As I spoke to you in Cambridge, I have the great desire of studying in Copenhagen under your guidance, and I should be gratefully obliged to you if you could accept me.

25/3 - 1923

As my Institute in Tokio does not allow me to stay in Europe longer than two more terms, I do not know whether it is wise to set up new work. My chief wish is to study your theory of spectra and atomic constitution in details. But if any one wants assistance in the experiment or the calculation, I should do it with pleasure.

I should esteem it a favour if you would give me the early information in the matter.

I beg to remain

Yours faithfully
Y. Nishina

p. 8.

I belong to the Institute of Physical and Chemical Research in Tokio, to which Dr. Takamine also does as you know.



理論物理学研究所

ボーア（師と仰ぐ）のもとで量子力学を学ぶ（1923～1928）

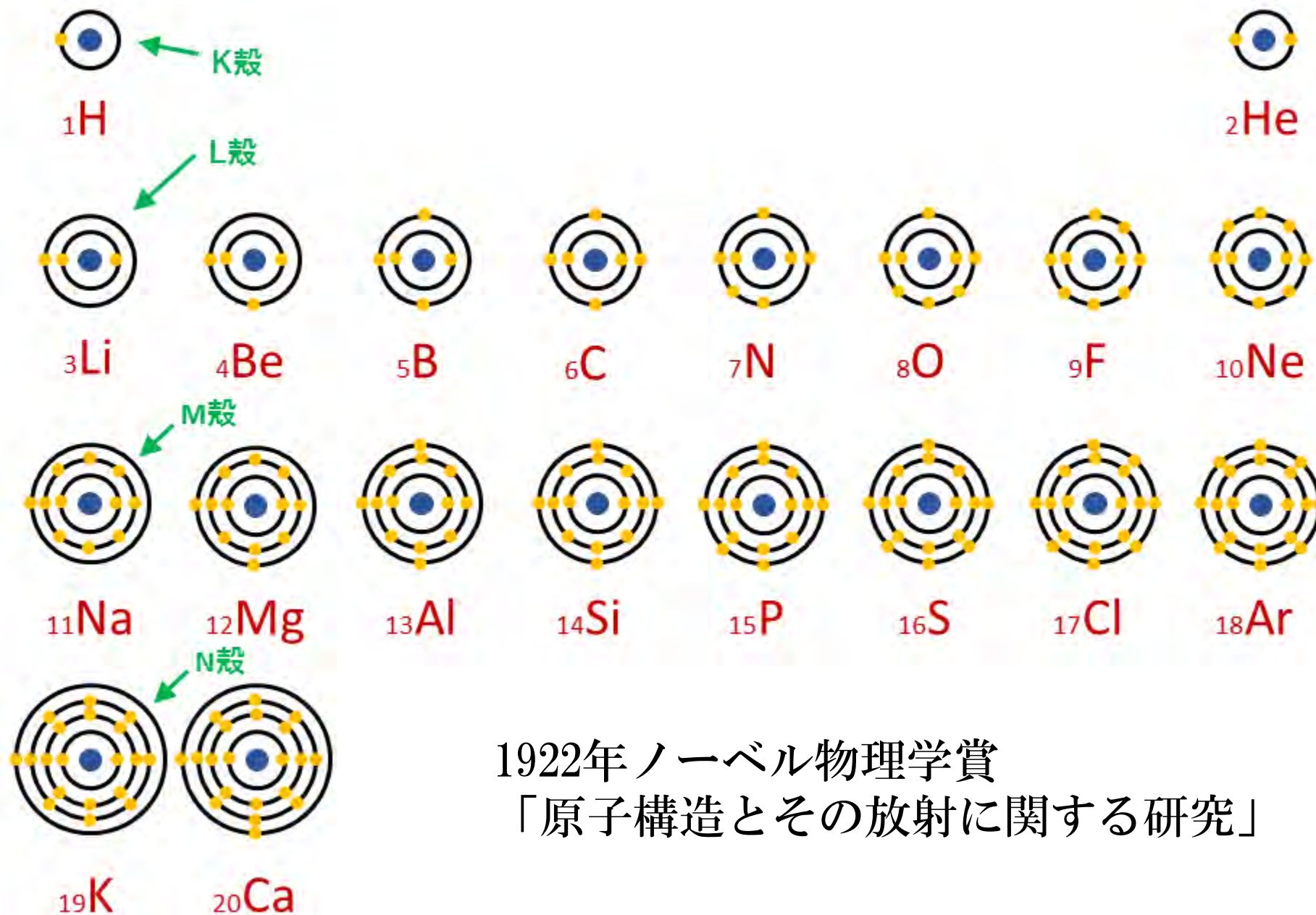
量子論建設者が皆いた 「コペンハーゲン精神」を享受

→原爆開発に従事させられる

財源：カーレスベリー財団、ロックフェラー財団

名目：実験生物学の推進

一番外側の軌道（K殻L殻M殻N殻）の
電子数が元素の性質を決める



1922年ノーベル物理学賞
「原子構造とその放射に関する研究」

元素の周期表

族
／
周期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----

1																							He
2	Li	Be											B	C	N	O	F	Ne					
3	Na	Mg											Al	Si	P	S	Cl	Ar					
4	K	Ca	Sc	Ti	V	Cr	Mn	Fe	Co	Ni	Cu	Zn	Ga	Ge	As	Se	Br	Kr					
5	Rb	Sr	Y	Zr	Nb	Mo	Tc	Ru	Rh	Pd	Ag	Cd	In	Sn	Sb	Te	I	Xe					
6	Cs	Ba	*La-Lu	Hf	Ta	W	Re	Os	Ir	Pt	Au	Hg	Tl	Pb	Bi	Po	At	Rn					
7	Fr	Ra	†Ac-Lr	Rf	Db	Sg	Bh	Hs	Mt	Ds	Rg	Cn	Nh	Fl	Mc	Lv	Ts	Og					

天然元素:宇宙で合成された

人工元素:加速器で合成された

□ 天然元素: 宇宙で合成された

■ 人工元素: 加速器で合成された

*Lantanide

La 57	Ce 58	Pr 59	Nd 60	Pm 61	Sm 62	Eu 63	Gd 64	Tb 65	Dy 66	Ho 67	Er 68	Tm 69	Yb 70	Lu 71
----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------

†Actinide

Ac 89	Th 90	Pa 91	U 92	Np 93	Pu 94	Am 95	Cm 96	Bk 97	Cf 98	Es 99	Fm 100	Md 101	No 102	Lr 103
----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------

可視光 (X線) 分光

白色光 (熱い物体)
X線 (原子)

プリズム (結晶回折)

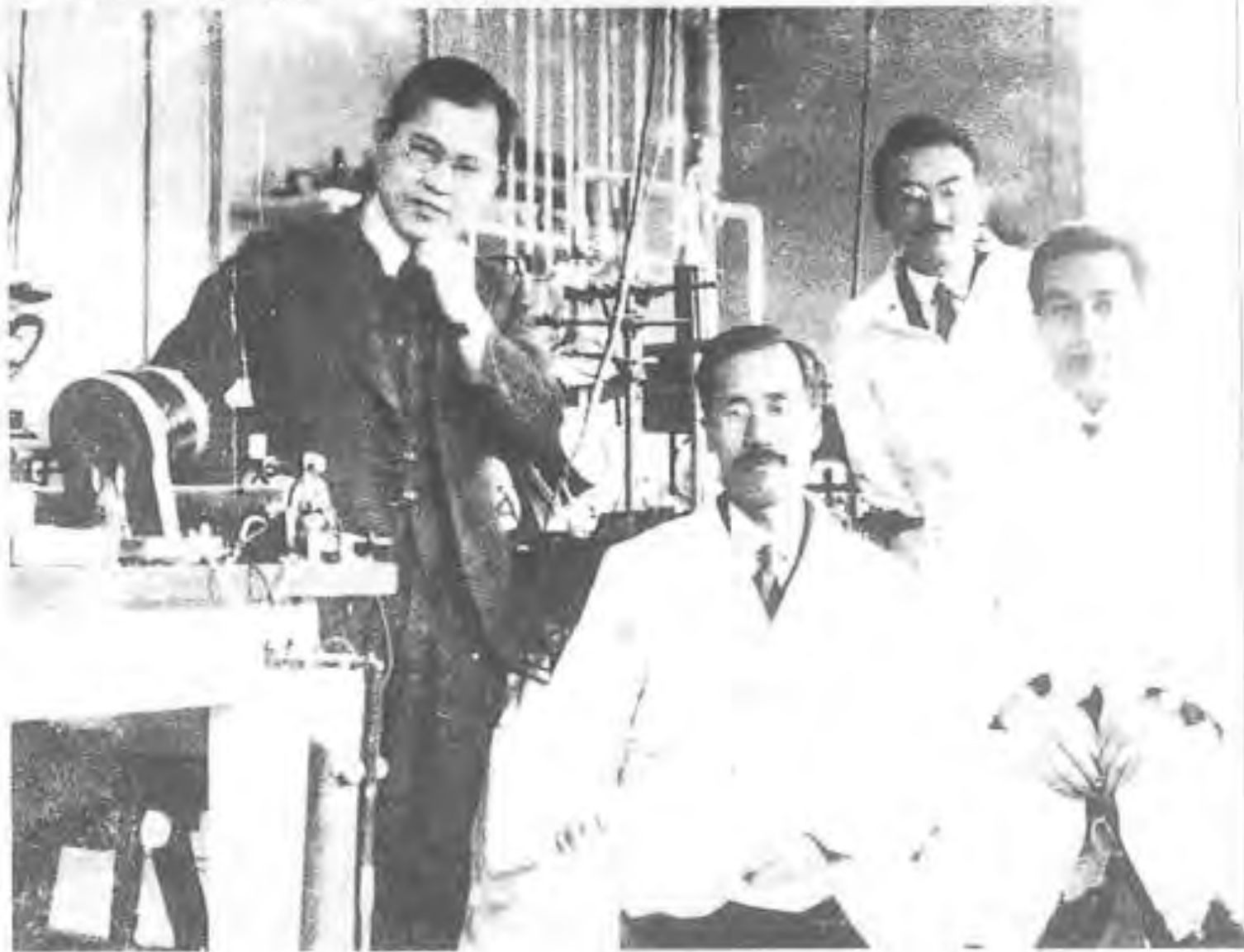
波長によって位置が
分散する (スペクトル)



X線スペクトル (元素の種類が分かる)

X線分光実験技術で頭角を現す

(左から) 仁科芳雄 青山新一 堀健夫 木村健二郎 (1927年)
コペンハーゲンのボーア研究所で



ヘベシー招聘



放射性トレーサー法の発明
1943年ノーベル化学賞



仁科

仁科会館
ハフニウム原子模型

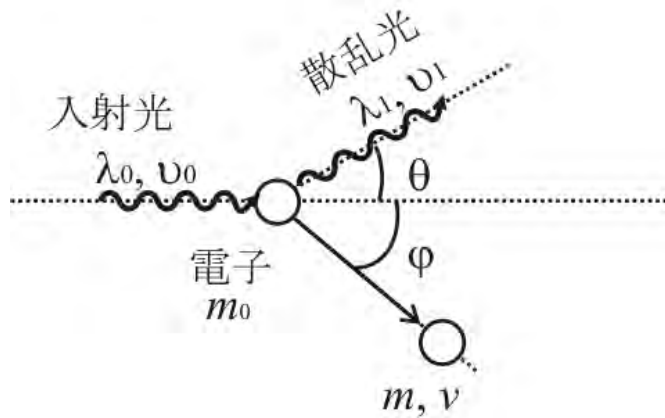


ボーア家族と仁科先生



仁科博士はボーアが予言しヘベシーが発見した
ハフニウムのX線分光に「準拠物質添加法」を発明
実験物理学者として世界的に認められた

理論物理学者に転身し、クラインとともに
 デイラック方程式を解いて
 光と電子の散乱を説明しようと試みる



クライン-仁科の公式

$$\frac{d^2 \sigma}{d\Omega d\nu} = \frac{4\kappa}{\alpha \nu} \left\{ \frac{\nu}{\nu'} + \frac{\nu'}{\nu} \right\} \mathcal{E}^2$$

$$(n'\mathcal{E})^2 \frac{d^2 \sigma}{d\Omega d\nu} = -\frac{8\kappa}{\alpha \nu} (n'\mathcal{E})^2$$

$$I = \frac{e^4}{2m^2 c^4 \hbar^2} \left(\frac{\nu'}{\nu} \right)^3 \left\{ 2 \left(\frac{\nu}{\nu'} + \frac{\nu'}{\nu} \right) \mathcal{E}^2 \right.$$

$$I = \frac{e^4}{m^2 c^4 \hbar^2} \left(\frac{\nu'}{\nu} \right)^3 \cdot \frac{1}{8} \cdot \frac{\alpha \nu}{\kappa} \left[\frac{4\kappa}{\alpha \nu} \left(\frac{\nu}{\nu'} + \frac{\nu'}{\nu} \right) \mathcal{E}^2 - \frac{8\kappa}{\alpha \nu} (n'\mathcal{E})^2 \right]$$

$$= \frac{e^4}{2m^2 c^4 \hbar^2} \left(\frac{\nu'}{\nu} \right)^3 \left[\left(\frac{\nu}{\nu'} + \frac{\nu'}{\nu} \right) \mathcal{E}^2 - \cancel{\frac{2\kappa}{\alpha \nu}} 2 (n'\mathcal{E})^2 \right]$$

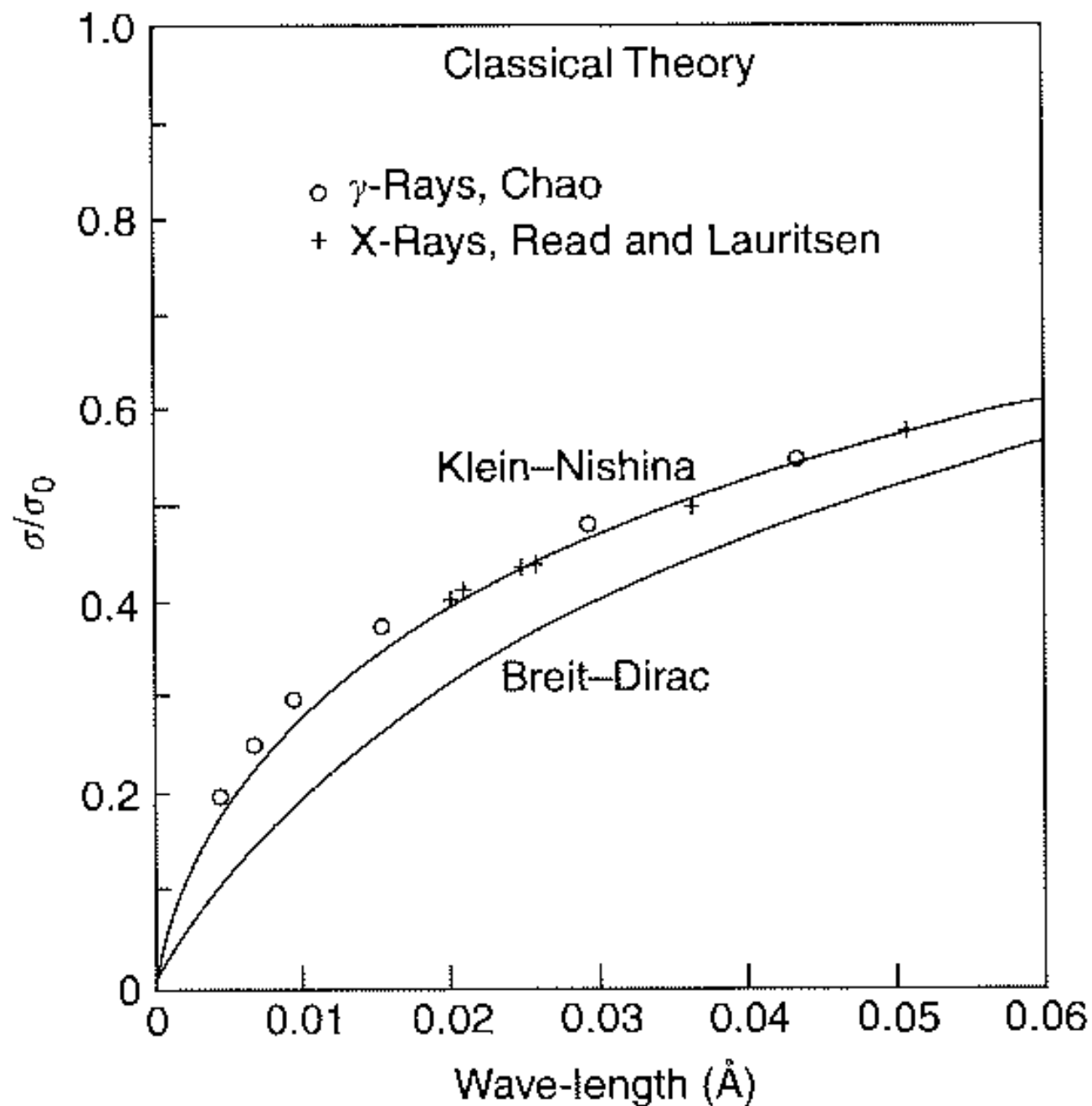
$$\frac{\nu'}{\nu} = \frac{1}{1 + \alpha(1 - \cos \theta)} \quad \frac{\nu}{\nu'} = 1 + \alpha(1 - \cos \theta)$$

$$\therefore \frac{\nu'}{\nu} + \frac{\nu}{\nu'} = \frac{1 + (1 + \alpha(1 - \cos \theta))^2}{1 + \alpha(1 - \cos \theta)}$$

$$\therefore I = \frac{e^4}{2m^2 c^4 \hbar^2} \frac{1}{\left(1 + \alpha(1 - \cos \theta) \right)^3} \left\{ \frac{1 + (1 + \alpha(1 - \cos \theta))^2}{1 + \alpha(1 - \cos \theta)} \mathcal{E}^2 - 2(n'\mathcal{E})^2 \right\}$$

「光は粒子である」という
「コンプトン散乱」実験データを
見事に説明し

世界的な理論物理学者と認められる



帰国後、1931年「仁科研究室」創設
「量子力学」を大学で講義



理化学研究所提供

仁科

京都大学での集中講義の際の記念写真



写真4 ディラック、ハイゼンベルクと理研の屋上にて（1929年、左から仁科芳雄、片山正夫、大河内正敏、ハイゼンベルク、長岡半太郎、ディラック、本多光太郎、杉浦義勝）

囑	囑囑囑囑囑囑囑囑囑
託	託託託託託託託託託
理	理理理理理理理理理
學	學學學學學學學學學
士	士士士士士士士士士
有	田釜久中井岡谷宮尾小
山	地澤世村上山川島崎林
衆	隆捨寛太大安龍正
孝	夫男信郎健介孝興治稔

囑囑囑囑	助助	員	副	研	研	研	主
託託託託	手手	研究	研究	研究	研究	研究	任
理理理理	理理	理	理	理	理	理	理
學學學學	學學	學	學	學	學	學	學
博博博博	博博	士	士	士	士	士	士
渡坂	荒梅全武	玉	湯	朝	仁		
邊	田木源	谷	木	川	永	科	
	昌	平	英	秀	振	芳	
懸一	郎魁	水男	彦	樹	郎	雄	

仁科博士とノーベル賞学者たち

対称性の自発的破れの提唱

第3の力・核力の予言

- 「ボアのもとで」
- クライン・仁科の公式
(光子の理論的証明)
- ハフニウムの精密測定
(ランタノイドの確立)

- 「霧箱」
- ミューオンの発見
- 「小サイクロトロン」
- 高速中性子による
ウラン237の発見
($4n+1$ 系列の発見)
(ネプツニウム237?)
- ウラン235の対称核分裂
の発見
(原爆原理の発見?)
- アイソトープの製造と
利用(代謝、突然変異)
- 「大サイクロトロン」
- 世界最大サイクロトロンの
建造(破壊される)
(湯川粒子の人工発生を
目指して?)

理化学研究所・仁科研究室

仁科芳雄博士

2008年

南部陽一郎

素粒子物理の新たな理論を構築

湯川秀樹

日本人初の受賞。陽子と中性子が中間子を介して力を及ぼすことを予言。素粒子物理の基礎を築いた

宇宙ニュートリノの観測

繰り込み原理の提唱

梶田隆章

ニュートリノに質量があることを発見

朝永振一郎

量子力学とアインシュタインの相対性理論を結びつける新たな理論を構築

6個のクォークの予言

益川敏英

物質の基本粒子クォークに新しい種類があるという理論を共同で発表

小林誠

坂田昌一

名古屋大で素粒子理論を研究

は
師弟関係

は

ニュートリノ質量の発見

2015年

梶田隆章

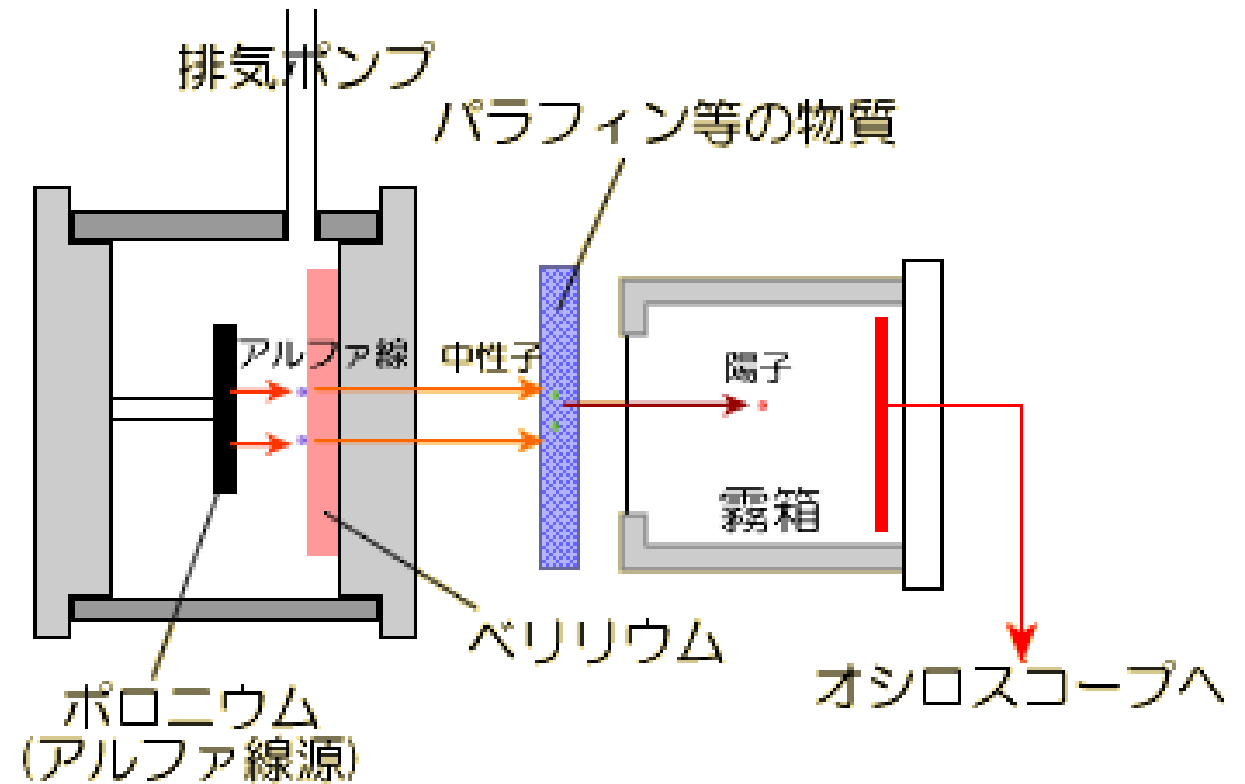
ニュートリノに質量があることを発見

関係図は小野教授監修の下、作成しました(敬称略、西暦は受賞年)

中性子の発見



チャドウィック
(1932年)



天然の高エネルギー
粒子線（アルファ線）源の発見

核分裂の発見

(1938)

1939 ドイツ ポーランド侵攻

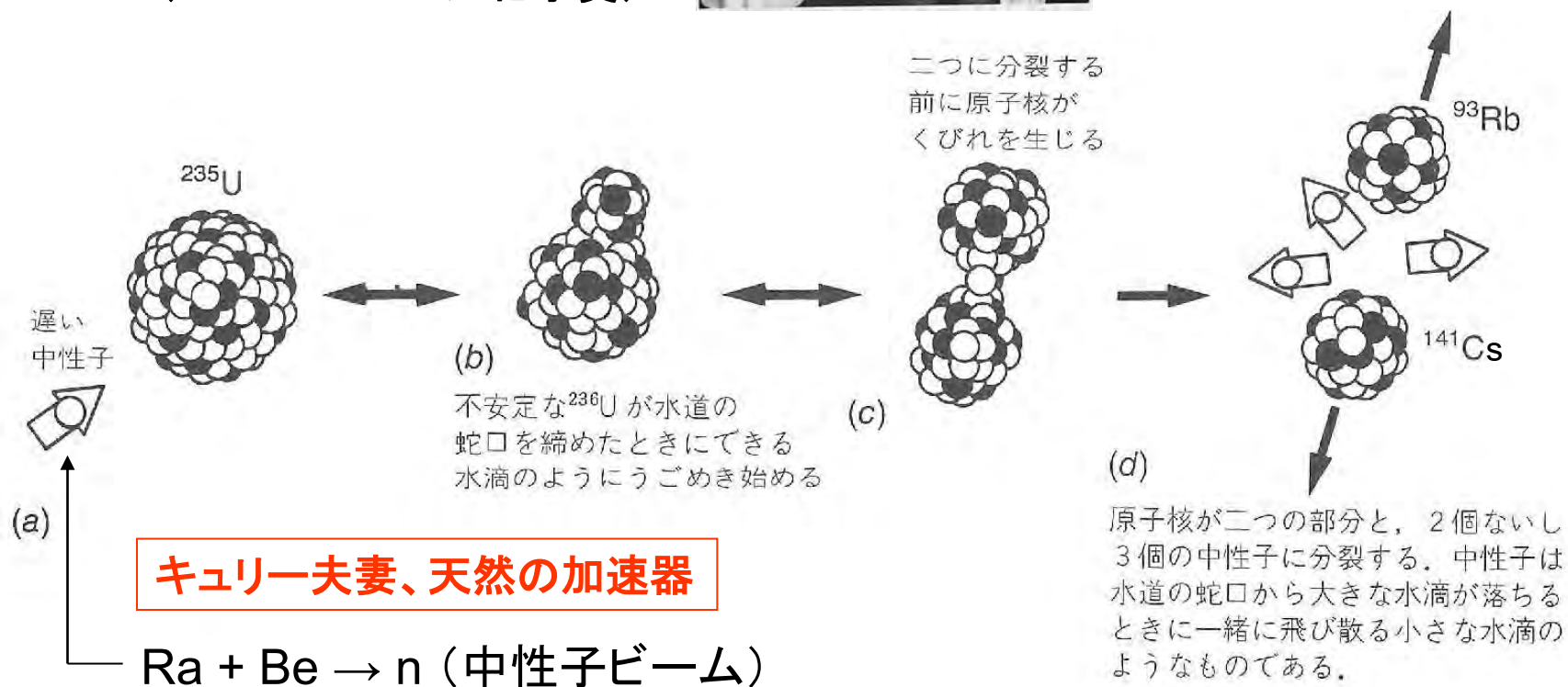
O. ハーン

(1944 ノーベル化学賞)



^{235}U の質量より
核分裂片の質量の
総和の方が軽い

180,000,000 eV
の運動エネルギー
を放出



仁科先生は、日本帝国陸軍を騙してまで、
湯川粒子を追求めたのでは

仁科先生は、マンハッタン計画の科学者に
原爆の製造方法の大ヒントを与えたのでは

仁科先生の置手紙が、昭和天皇にポツダム宣言受諾を
決断させたのでは

仁科先生は、日本帝国陸軍を騙してまで、
湯川粒子を追求めたのでは

仁科先生は、マンハッタン計画の科学者に
原爆の製造方法の大ヒントを与えたのでは

仁科先生の置手紙が、昭和天皇にポツダム宣言受諾を
決断させたのでは

計画の始まりを朝日新聞は次のように紹介している。1955年8月7日 原子雲を越えて／日本も原爆計画」という記事だ。

昭和十五（1940）年も半ばすぎたある

夏の日、新宿から立川に向う通勤列車の二等車で、こんな話がささやかれていた。例

のウラン爆弾のことだが……』と理研の仁科芳雄博士。『ほう！いいいよ出来そうだとしても』と、ヒザを乗り出したのは陸軍航空技術研究所安田武雄中将（現アジア製作所社長）である。『略』まだはつきりとはいえないが、ウラン爆弾はどうにか出来そうに思える。あなたがその気なら、わたしと一緒にウラン爆弾製造のための実験研究をはじめてもよいと思うんだが』

『ツポンの原爆』が、歴史の中に浮上した瞬間である。



月	日	摘要	記入金額	支拂金額	差引残高
		昭和17年度			
8	21	航空技研	64 000 00		64 000 00
5	26	"	112 500 00		176 500 00
2	28	理研工業 31	90 000 00		266 500 00
2	10	技術院 31	90 000 00		356 500 00
		昭和18年度			
5	13	陸軍航空本部	16 000 00		16 000 00
11	20	陸軍航空本部	37 500 00		53 500 00
		昭和19年度			
4	21	服部奉公會	160 00		9 660 0
		陸軍糧秣本部	7 500 00		9 820 0
		海軍航空技術研究所	2 000 00		11 820 0
5	23	服部奉公會	160 00		12 480 0
6	12	航空本部	308 488 48		418 968 48
6	24	服部奉公會	160 00		418 808 48

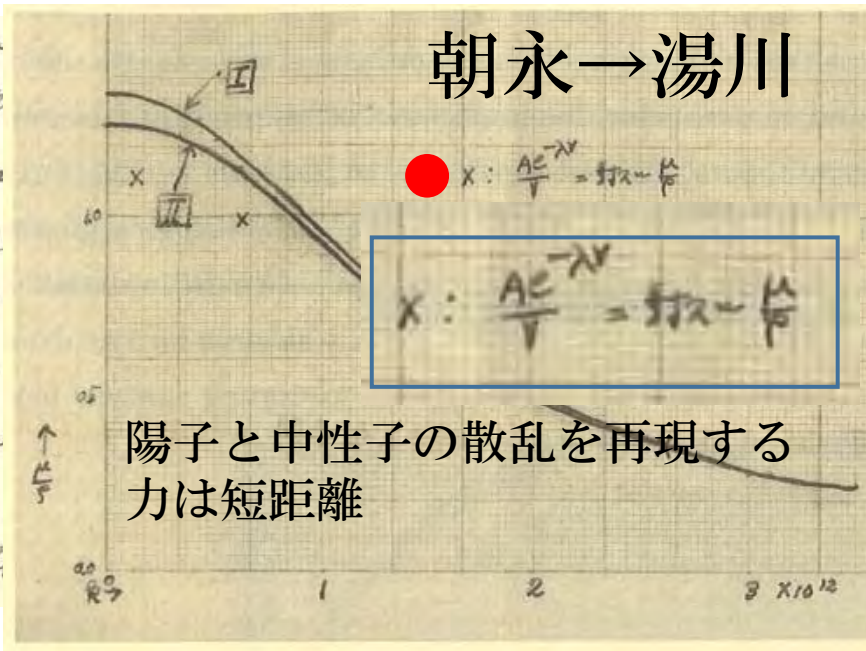
月	日	摘要	記入金額	支拂金額	差引残高
7	20	服部奉公會	160 00		418 648 48
8	22	服部奉公會	80 00		418 728 48
9	20	服部奉公會	80 00		418 808 48
10	11	文部省	12 200 00		431 008 48
	24	服部奉公會	80 00		431 088 48
11	22	服部奉公會	80 00		431 168 48
12	6	陸軍航空本部	1,000 000 00		1,431 168 48
12	21	服部奉公會	80 00		1,431 248 48
12	20	"	80 00		1,431 328 48
2	28	"	80 00		1,431 408 48
4	29	"	80 00		1,431 488 48
4	31	"	100 000 00		1,531 488 48

陸軍から総額150万円(約50億円)

1935年 湯川先生 「中間子論」 提唱

湯川→仁科

朝永→湯川



$\frac{M}{\rho}$
 10
 $H^2 A \times \frac{6.06 \cdot 10^{23}}{22.4 \times 10^3}$


$$\frac{mc}{h} = 3 \times 10^{10}$$
 $e^2 = 0.22 \times 10^{-13}$

$$\lambda = \frac{mc}{E}$$

$$\frac{mc}{h} = 3 \times 10^{10}$$

陽子と中性子の間には
第3の力「核力」が働く

それは、**短距離力**

それを伝える未発見の
粒子の質量は電子の
230倍!!（実際は270倍）

On the Interaction of Elementary Particles. I.

By Hideki YUKAWA.

(Read Nov. 17, 1934)

湯川先生のノーベル賞論文

Now such interaction between the elementary particles can be described by means of a field of force, just as the interaction between the charged particles is described by the electromagnetic field. The above considerations show that the interaction of heavy particles with this field is much larger than that of light particles with it.

昭和十二年八月五日

仁科 芳雄

湯川 秀樹 君

拜啓、其後如何デスカ、理論ノ方デ何カ新シイ
事ハ出マシタカ、

叔デアタノ理論ノ歸結ニツイテ又吾々ノ実験
ト理論トノ関係並ニ論文等ニ就イテオモヒニヨク
洗シ合ツテ出来ルカケ吾國ニ於ケル理論並ニ実験ノ
方ノ收獲又チ多クスルタメニ一度會合シテ討議ヲ行
フテハドウデシヨウカ、

サレ高リ小生ノ方ノ問題トスル處ハ新粒子ノエネルギー
損失ノ問題デス、先日ノ拙書ニモ書イタ通り、

4

其頃在来デアラウ加ハツテ世間ツテモ宜シイ、

以上ニ対スル御意見御知ラセ下サイ、勿論時時ハ
モット晩クテモヨロシイ、然レ九月ニ入ラヌ方カ好イカト

思ヒマス、學校カ休マリマスカラ

要スルニ日本デ提唱サレタ理論ヲナルハ早く日本デ完
成サセ度イト云フノガ動機デス、コンナ集リナラハ更ニ
今後何カモヤツテ好イト思ヒマス、

Shickelberg ニハ返事ヲ出シテ並キマシタ、先般ノ数物ノ
缺ノ別創ヲ送ツテヤツテ下サイ、
右御辱不迄

毎レ

1935年
(日中戦争)

昭和 10 年頃の理研。番号 n をつけた建物が第 n 号館である。1 号館：化学の研究室。2 号館：大河内所長、事務室、寺田寅彦、高嶺俊夫研究室、図書室。3 号館：長岡半太郎、西川正治等の研究室。6 号館は工作棟である。

23 号館は三菱造船の研究所で、後に建物および研究者を一括して理研に統合された。

11 号館と 23 号館の間の空地には 1936 年、三井報恩会の寄付により原子核と放射線研究のため 29 号館（原子核実験室）、31 号館（小サイクロトロン）、33 号館（大サイクロトロン）、35 号館（電力室）等が建てられた。

3 号館と 11 号館の間の空地には霧箱実験棟が、23 号館の南西端、南東側の前には「ニ」号研究の建物が建てられた。不忍通り（現在の名称）から 2 号館に至る大通りへの入口に正門がある。（写真は理化学研究所史料室蔵）

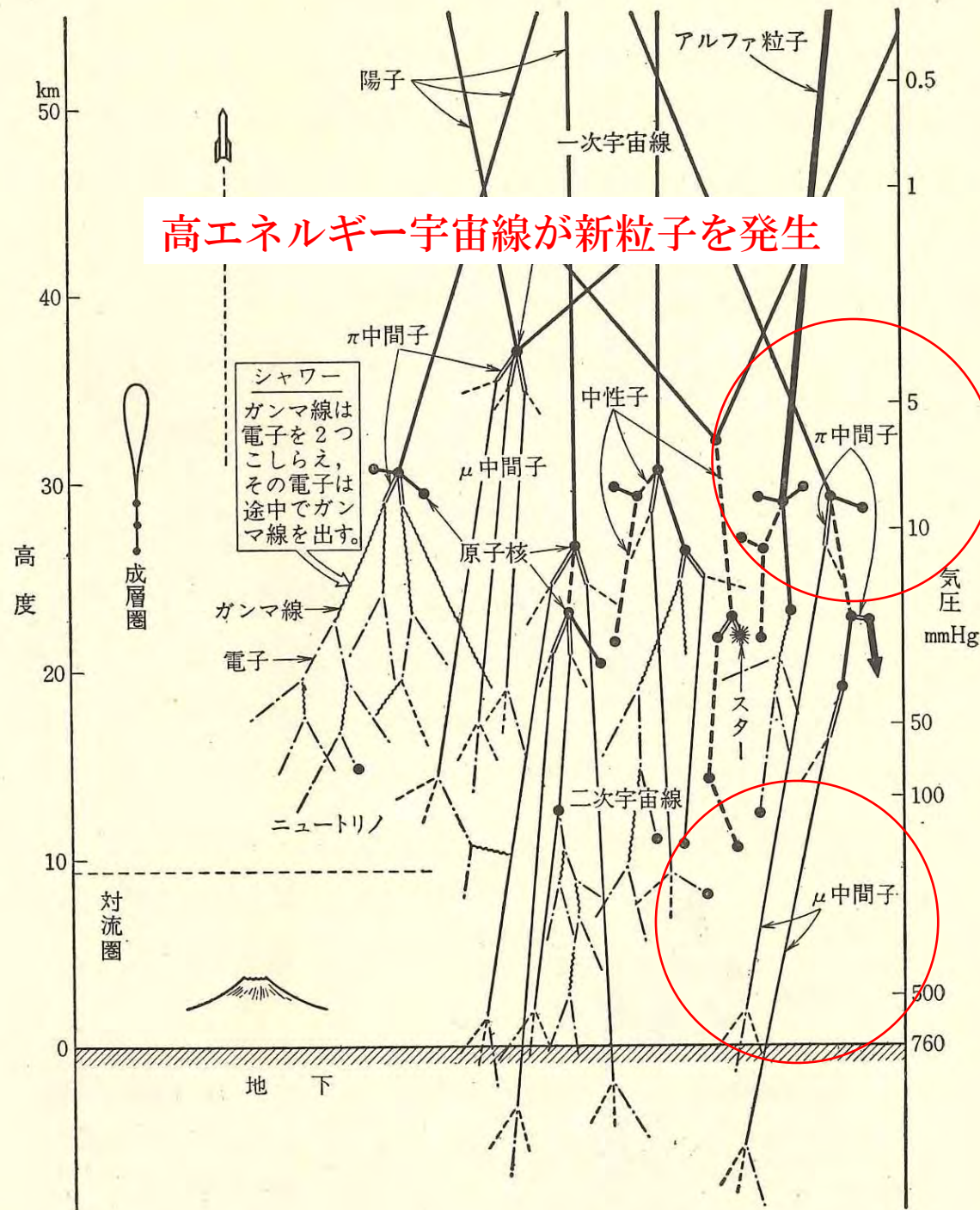
小サイクロトロン
大サイクロトロン

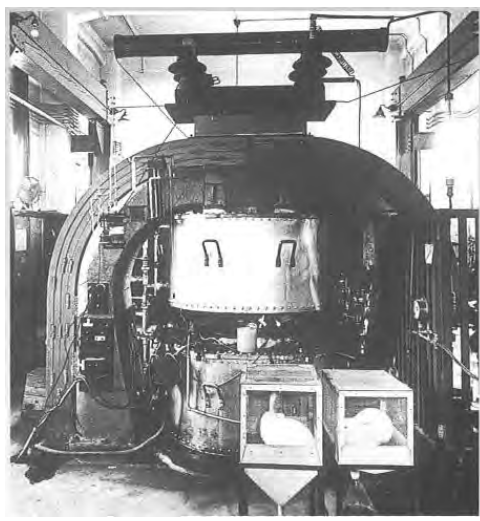
宇宙線測定霧箱

六義園

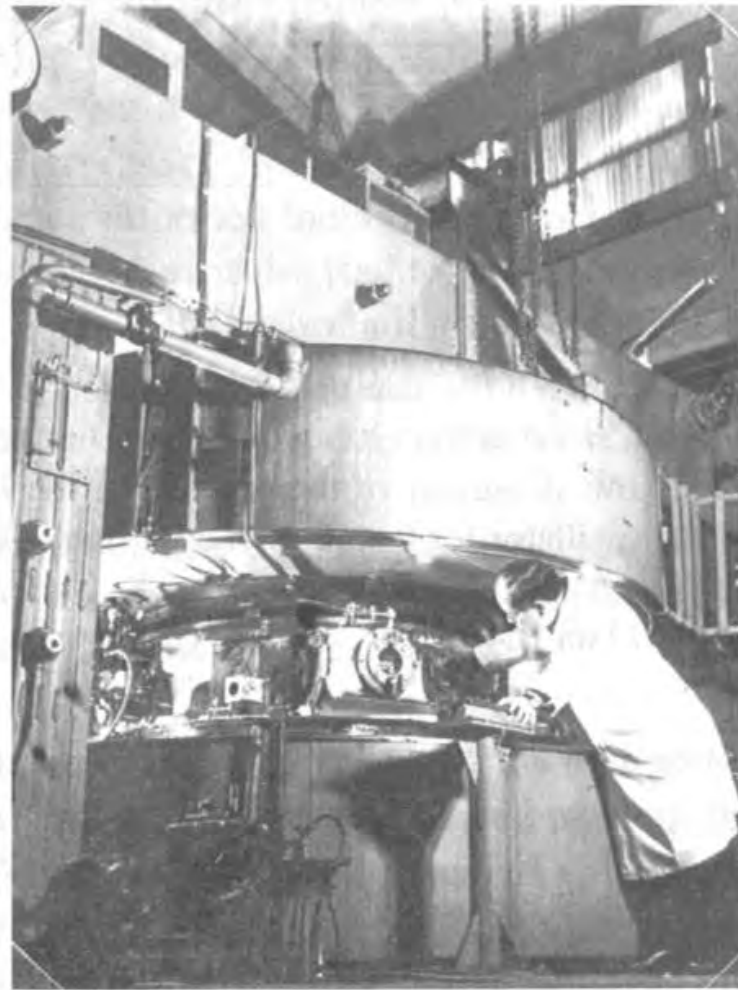


加速器で発生させるのはまだ無理なので
まずは、**宇宙線の中に探す**





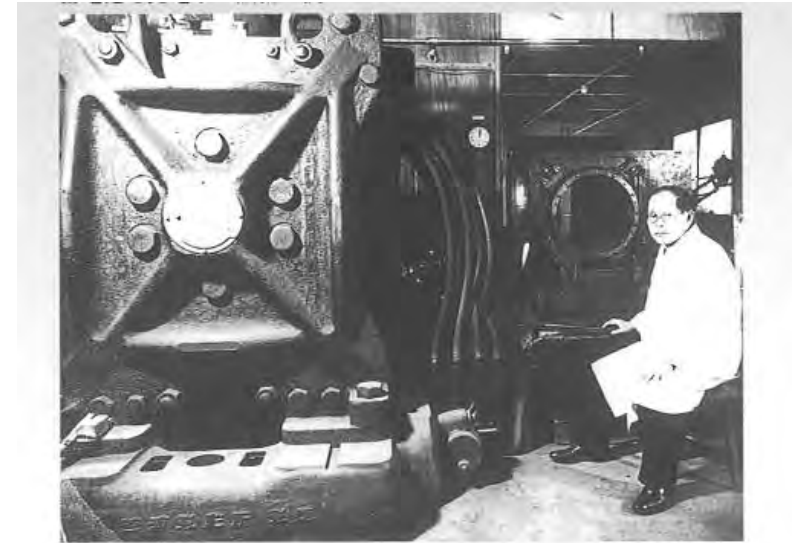
日本初、世界2台目
小サイクロトン



世界最大
大サイクロトン



超伝導サイクロトンへ



世界最大
ウィルソン霧箱

清水トンネルでの
世界最深宇宙線測定

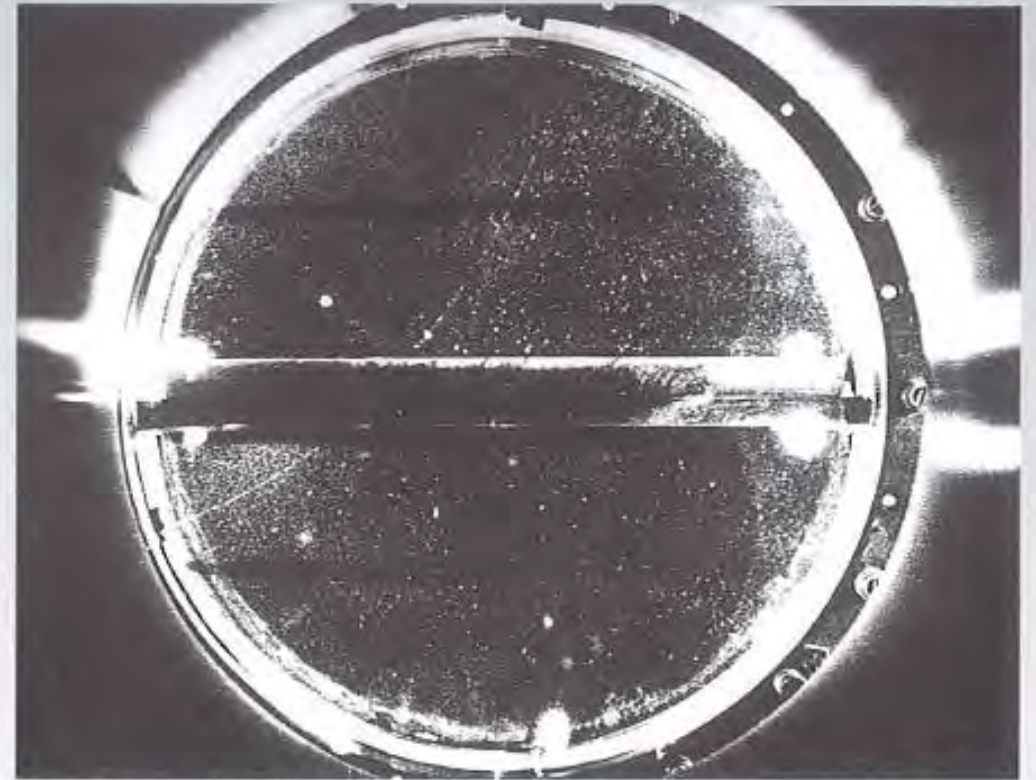
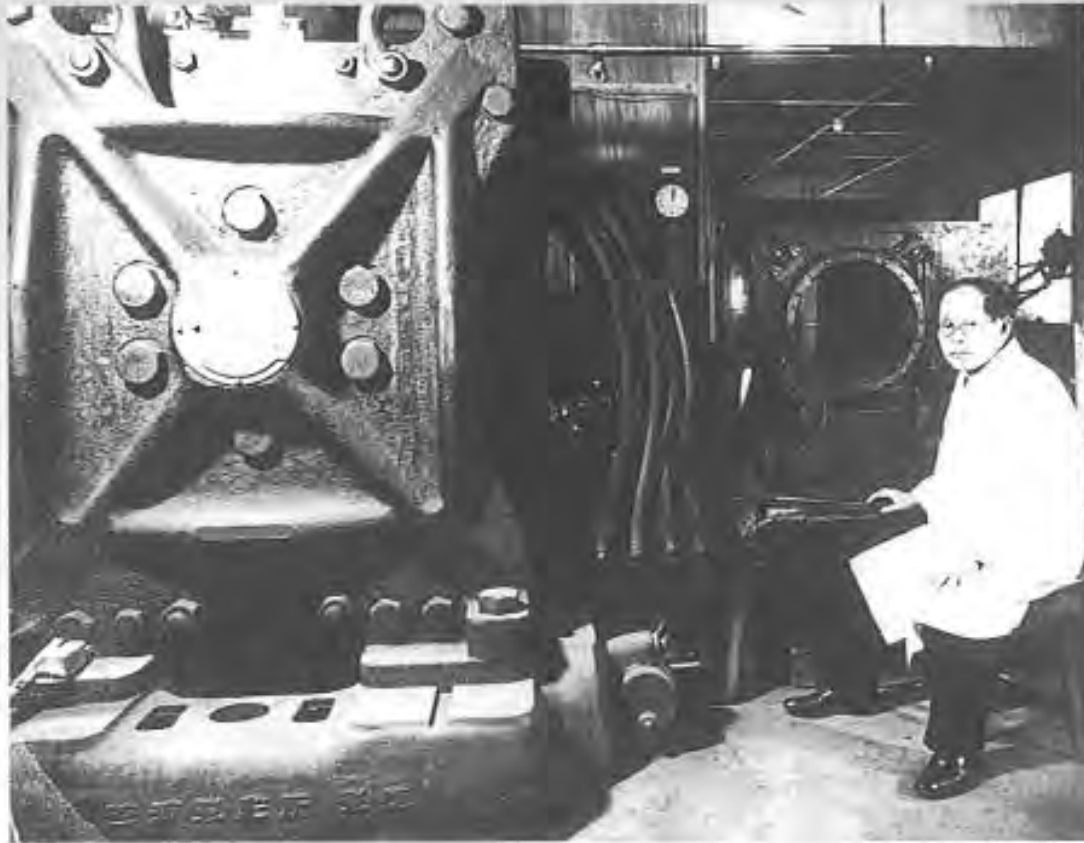


カミオカンデへ



清水トンネル内での宇宙線観測（1940年7月） もっとも深いもの
としては水に換算して3000mの場所で行われた

霧箱とそれに磁場をかける巨大な電磁石
この電磁石を直流の大電流で動かすために横須賀に移して潜水艦の
蓄電池を充電する設備を使わせてもらった



中間子とされた飛跡
宇宙線の硬成分中に陽子の1/10ほどの質量をもつ粒子が存在すること
を1937年アンダーソンとほとんど同時に発見した これは後に湯川
中間子が崩壊してできるミュー粒子の飛跡であったことがわかった

ミューオンを発見（質量は陽子の $1/7 \sim 1/10$ ）
後にパイ中間子が上空で崩壊してできたものとわかる

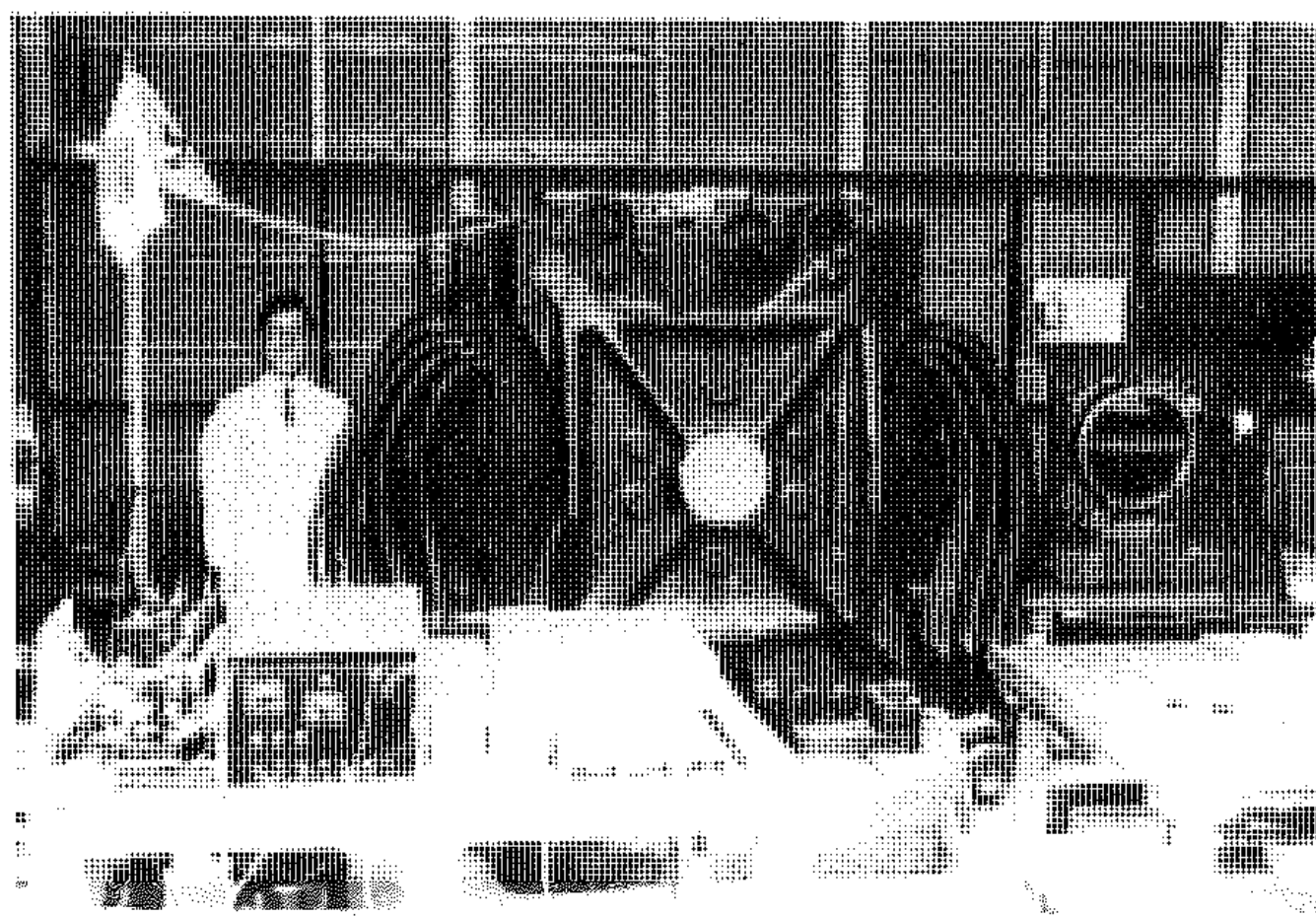


図4 仁科研究室の大型霧箱とマグネット：1936年に完成した。右側が霧箱、左側に立っているのは竹内（柁）さん。中央がマグネット（東芝製）、重量は約15トン。霧箱の直径は40 cm、磁場は17,000 ガウス。約500 kWの大電力を消費するので、駒込の理化学研究所の送受電設備では稼働が難しく、完成後、1936年から1937年の末まで横須賀海軍工廠の潜水艦の充電設備を借りて実験が行われた。1937年の11月4日には、サイクロトロン完成に伴い、理化学研究所の送受電設備が整ったので、駒込地区の理研にもどり実験を継続しが、最終的には昭和20年4月13日の空襲でフィルムとともに焼失した。

表 4 ミューオン発見に拘わる論文の発表時期

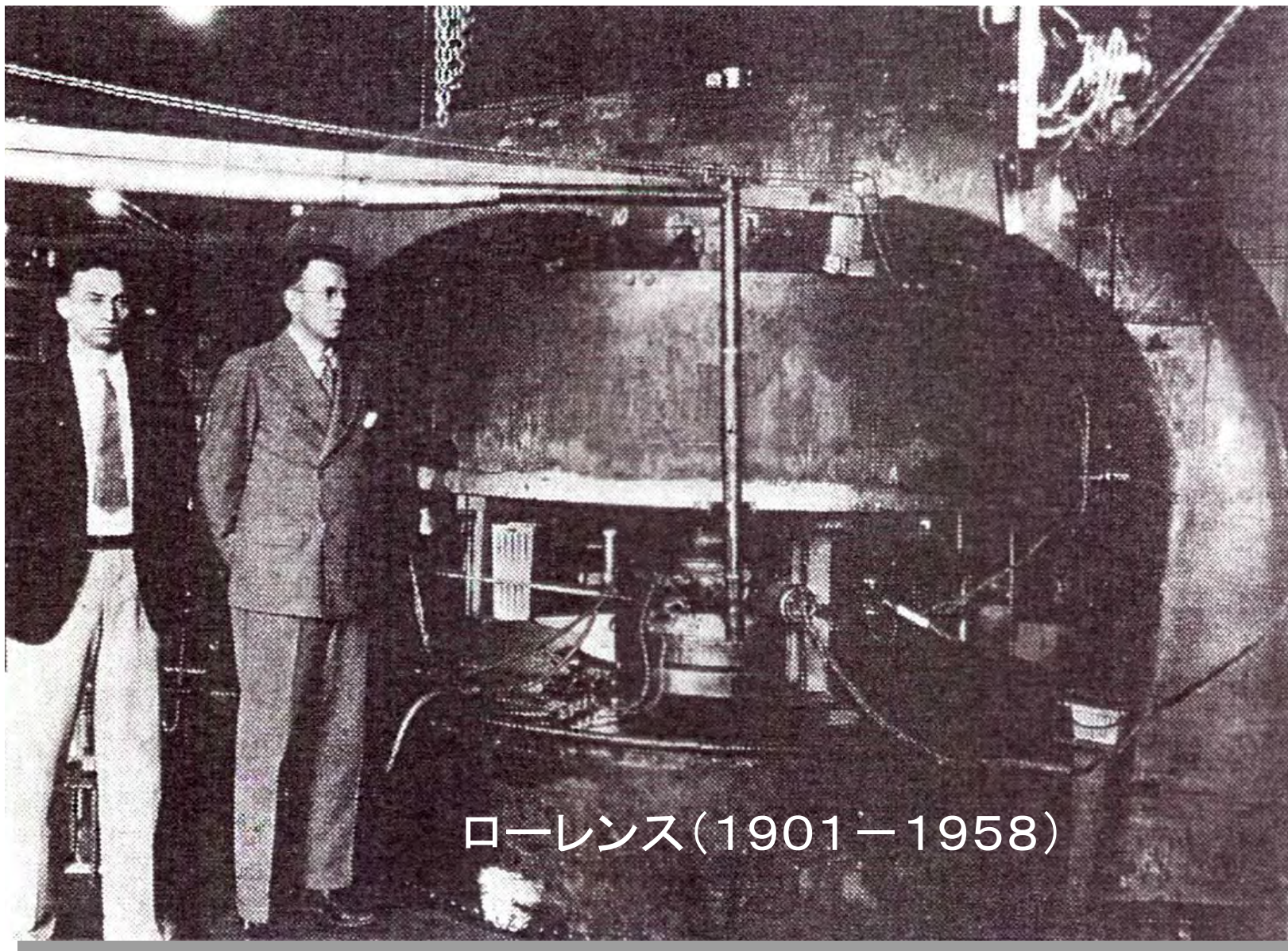
Authors	Accept date	Publication Date
Kunze	Mar.24 (1933)	Z. Physik (1933)
Neddermeyer, Anderson	Mar. 30 (1937)	Phys.Rev.May.15
Street, Stevenson.1	アメリカ物理学会 (April 29, 1937)	Phys.Rev.June.1
Street, Stevenson.2	Oct.6 (1937)	Phys.Rev.L.Nov.1
Nishina, Takeuchi, Ichimiya	Aug.28 (1937)	Phys.Rev.Dec.1



名和 武は、日本の海軍軍人。
海軍技術士官として主に蓄電池の開発に
業績を残した海軍技術中將である。
特D型蓄電池の開発で海軍技術有功章を受章。



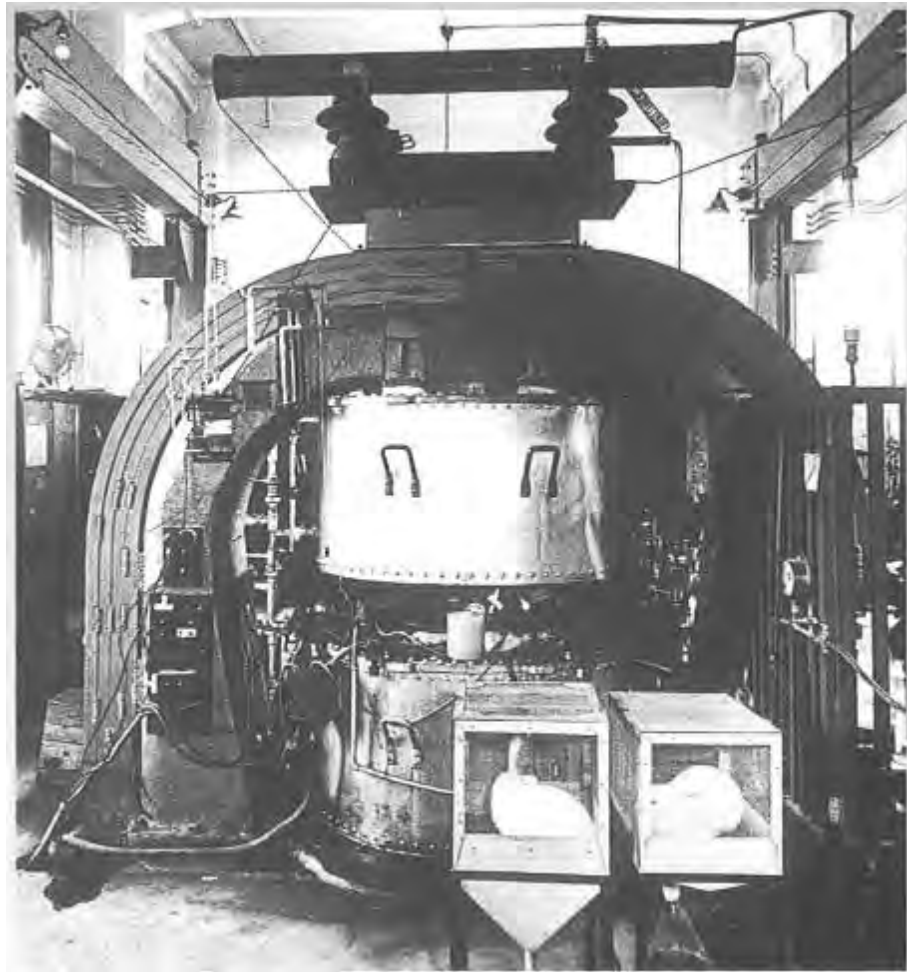
名和 又八郎は、日本の海軍軍人。
最終階級は海軍大將從二位勲一等功四級。



ローレンス(1901-1958)

1930年 サイクロトロンを発明
1939年 ノーベル物理学賞

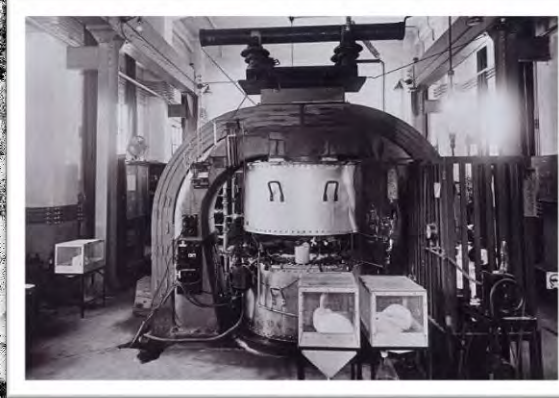
小サイクロトロン（1937～）による元素変換研究



300万ボルト

1954年

六義園



①

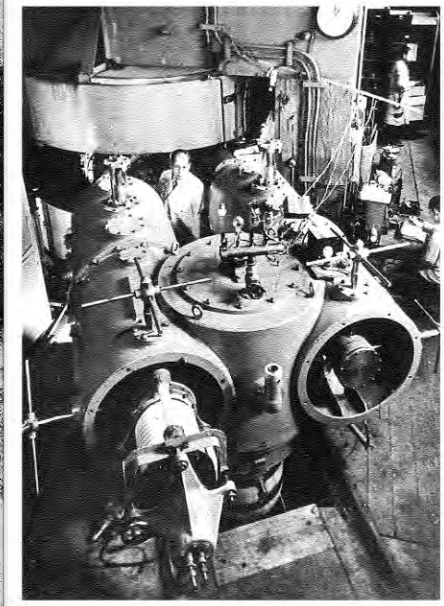


③

②

②③

③⑦



超ウラン元素発見の歴史の始まり (ウランよりも核分裂性の大きい元素を求めて)

Z	sym.	Reaction	Investigators	
93	Np	$^{238}\text{U}(n,\gamma)^{239}\text{U} \rightarrow ^{239}\text{Np}$	MacMillan, Abelson	1939-1940
94	Pu	$^{238}\text{U}(d,2n)^{238}\text{Np} \rightarrow ^{238}\text{Pu}$	Seaborg, MacMillan	1940
95	Am	$^{239}\text{Pu}(2n,\gamma)^{241}\text{Pu} \rightarrow ^{241}\text{Am}$	Seaborg et al.	1944
96	Cm	$^{239}\text{Pu}(\alpha,n)^{242}\text{Cm}$	Seaborg et al.	1944
97	Bk	$^{241}\text{Am}(\alpha,2n)^{243}\text{Bk}$	Seaborg et al.	1949
98	Cf	$^{242}\text{Cm}(\alpha,n)^{245}\text{Cf}$	Seaborg et al.	1950
99	Es	$^{238}\text{U} + 15n \rightarrow ^{253}\text{Es}$	Seaborg et al.	1953 水爆の降下灰
100	Fm	$^{238}\text{U} + 17n \rightarrow ^{255}\text{Fm}$	Seaborg et al.	1953 水爆の降下灰
101	Md	$^{253}\text{Es}(\alpha,n)^{256}\text{Md}$	Seaborg et al.	1955 fission-fusion-fission
102	No	$^{246}\text{Cm}(^{12}\text{C},4n)^{254}\text{No}$	Seaborg et al.	1958
103	Lr	$^{252}\text{Cf}(^{11}\text{B},6n)^{257}\text{Lr}$	Ghiorso et al.	1961

中性子吸収かdアルファ融合反応

軽イオン融合反応

重イオン源の発明

仁科先生と木村先生の93番元素の発見
(理研第1号(小)サイクロトロン)



MacMillan



Seaborg

1951年ノーベル化学賞
ローレンスのサイクロトロンで
超ウラン元素を発見



仁科芳雄



木村健二郎

「U-237の発見」

93番新元素の発見を論文で示唆

Nishina et al., *Phys. Rev.* **57**, 1182 (1940)

“Induced β -Activity of Uranium by Fast Neutrons”

$^{238}\text{U}(n,2n)^{237}\text{U} \rightarrow \beta^- + ^{237}_{93}\text{U}$ (210万年 α 崩壊)

同年、マクミランとエイベルソンが

93番元素の発見を報告し、後にNpと命名

McMillan and Abelson, *Phys. Rev.* **57**, 1185 (1940)

$^{238}\text{U}(n,\gamma)^{239}\text{U} \rightarrow ^{239}\text{Np} \rightarrow$

This activity was induced appreciably only by fast neutrons obtained by bombarding lithium with 3-Mev. deuterons from our cyclotron. The experimental procedure was as follows.

A few grams of uranium oxide, U_3O_8 , carefully purified and freed from its disintegration products were exposed to fast neutrons for more than fifty hours. After the exposure, a uranium fraction (U_3O_8) was separated and purified from all possible elements produced by fission as well as from its own disintegration products. The most care was given to

radioactive family $4n+1$.

The sign of the β -rays was shown to be negative and consequently we suspected the production of a radioactive element of atomic number 93, the chemical properties of which are probably homologous to rhenium. From the decay curve it is clear that its period must be very long,

decay curve it is clear that its period must be very long, if it exists. To search for such an element, the irradiated uranium oxide, which was freed from fission products as well as its own disintegration products as above mentioned, was left for about 7 days, and was then dissolved in nitric acid. The solution, after an addition of perhenic acid, was treated with ammonium sulphide and then acidified with sulphuric acid. The precipitated rhenium sulphide, after the removal of contaminated sulphur by carbon bisulphide, was examined for β - and α -activities. Neither of them could be found within the error of our experiments. We may thus conclude, as in the case of 23-minute uranium,¹ that the 6.5-day uranium decays also into a very long-lived 93 element. The detailed accounts of the experiments will be given elsewhere.

The above investigations were carried out as a part of the work of the Atomic Nucleus Sub-Committee of the Japan Society for the Promotion of Scientific Research. We acknowledge the assistances given by our laboratory colleagues in connection with the irradiation of samples and by Messrs. N. Saito and N. Matuura regarding the chemical separations.

Y. NISHINA
T. YASAKI
H. EZOE

Nuclear Research Laboratory,
Institute of Physical and Chemical Research,

K. KIMURA
M. IKAWA

Chemical Institute,
Faculty of Science,
Imperial University of Tokyo,
Tokyo, Japan,
May 3, 1940.

Induced β -Activity of Uranium by Fast Neutrons

In the course of experiments on the fission of uranium by fast neutrons,¹ besides fission products the uranium fraction showed a β -activity with a period 6.5 days.

¹ Y. Nishina, T. Yasaki, H. Ezoe, K. Kimura and M. Ikawa, *Nature* **144**, 547 (1939); *Nature*, in press (1940).

² Y. Nishina, T. Yasaki, K. Kimura and M. Ikawa, *Nature* **142**, 874 (1938).

³ E. Segrè, *Phys. Rev.* **55**, 1104 (1939).

McMillan and Abelson, Phys. Rev. 57, 1185 (1940) 93番元素発見の論文



「ランタノイドの Cerium とある」

Last year a nonrecoiling 2.3-day period was discovered in uranium activated with neutrons, and an attempt¹ was made to identify it chemically, leading to the conclusion that it is a rare earth. Impressed by the difficulties raised by this identification, the authors independently decided that the subject was worth further investigation. In Berkeley it was found that (1) If a layer of $(\text{NH}_4)_2\text{U}_2\text{O}_7$ with about 0.1 mm air equivalent stopping power, placed in contact with a collodion film of 2 mm air equivalent, is activated by neutrons from the cyclotron, the 2.3-day period appears strongly in the uranium layer, and not at all in the collodion, which shows a decay curve parallel to, and 1/7 as strong as, that of a paper "fission catcher" behind it. One day after bombardment the uranium layer has five times the activity of the fission catcher. This shows that the 2.3-day period has a range of <0.1 mm air and an intensity larger than all the long period fission products together. (2) When a thin layer of uranium is bombarded with and without cadmium around it, the fission product intensity is changed by a large factor, while the 2.3-day period and the 23-minute uranium period are only slightly changed, and their ratio remains constant. Also absorption of resonance neutrons by uranium changes these two periods in the same ratio, suggesting a genetic relation between them, and the consequent identification of the longer period with element 93. In Washington it was found that the 2.3-day period probably does not behave consistently as a rare earth, since attempts to concentrate it chemically with the rare earths from activated uranium failed, although it is known to have an intensity large compared with that of the rare earth fission products.

At this stage of the investigation one of the authors (P.H.A.) came to Berkeley on a visit, and a combined attack was made. With pure 2.3-day substance from thin uranium layers, the chemical properties were investigated, and a very characteristic difference from the rare earths was soon found; namely, the substance does not precipitate with HF in the presence of an oxidizing agent (bromate in strong acid). In the presence of a reducing agent (SO_2) it precipitates quantitatively with HF. Cerium was used as a carrier. This property explains the erratic nature of previous chemical experiments in which the oxidizing power of the solution was not controlled. Further chemical

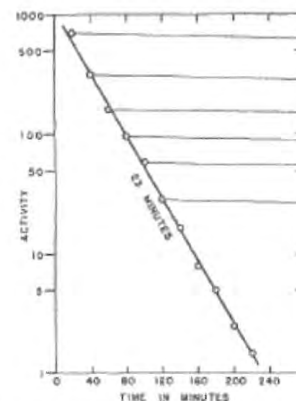


FIG. 1. Growth of 2.3-day 93^m from 23-minute U^{235} . The points indicate the activities of successive fluoride extractions, plotted at the times of extraction. Decay measurements were made a day later on the first six fractions, and the resulting slopes are shown on the plot.

experiments showed that in the reduced state with a thorium carrier it precipitates with iodate, and in the oxidized state with uranium as sodium uranyl acetate. It also precipitates with thorium on the addition of H_2O_2 . It precipitates in basic solution if carbonate is carefully excluded. These properties indicate that the two valence states are very similar to those of uranium (U^{4+} and UO_2^{2+} or $\text{U}_2\text{O}_7^{2-}$), the chief difference from that element being in the value of the oxidation potential between the two valences, such that the lower state is more stable in the new element. It is interesting to note that the new element has little if any resemblance to its homolog rhenium; for it does not precipitate with H_2S in acid solution, is not reduced to the metal by zinc in acid solution, and does not have an oxide volatile at red heat. This fact, together with the apparent similarity to uranium, suggests that there may be a second "rare earth" group of similar elements starting with uranium.

The final proof that the 2.3-day substance is the daughter of the 23-minute uranium is the demonstration of its growth from the latter. For this experiment activated uranium was purified twice by precipitation as sodium uranyl acetate, which was dissolved in HF and saturated with SO_2 . Then equal quantities of cerium were added at twenty-minute intervals and the precipitates filtered out. The first precipitate, made immediately after purification, carried all the fluoride-precipitable contaminations and was discarded; its weakness indicated a very good purification. The activities of the others are plotted in Fig. 1.

A preliminary study of the radiations from 93^m shows that it emits continuous negative beta-particles with an upper limit of 0.47 Mev, and a weak complex spectrum of low energy gamma-rays (<0.3 Mev) and probably x-rays. The question of the behavior of its daughter product 94^m immediately arises. Our first thought was that it should go to actinouranium by emitting an alpha-particle.

We sought for these by preparing a strong sample (11 millicuries) of purified 93 and placing it near a linear amplifier in a magnetic field to deflect the beta-particles. From this experiment we conclude that, if alpha-particles are emitted, their half-life must be of the order of a million years or more; the same experiment showed that if spontaneous fission occurs its half-life must be even greater. We wish to express our gratitude to the Rockefeller Foundation and the Research Corporation, whose financial support made this work possible.

EDWIN McMILLAN

Radiation Laboratory,
Department of Physics,
University of California,
Berkeley, California.

PHILIP HAUGE ABELSON

Department of Terrestrial Magnetism,
Carnegie Institution of Washington,
Washington, D. C.,
May 27, 1940.

¹ E. McMillan, Phys. Rev. 55, 110 (1939).
² E. Segre, Phys. Rev. 55, 1104 (1939).

Masses of Stable Nuclei from Ne^{20} to Fe^{57}

The observation of the proton groups in (dp) and (ap) reactions recently made in this laboratory, together with a knowledge of beta-ray maximum energies makes it possible to give reasonably correct values for isotopic masses as far as Fe^{57} with a few exceptions. These values are given in Table I. The values from Ne^{20} to Ar^{36} are derived entirely from transmutation data, and mass-spectrograph values are given in parentheses for comparison where they are available. Above K^{39} the accuracy is less and reliance has to be placed on mass-spectrograph measurements of Ti^{48} , Fe^{54} , and Cr^{52} .

Such mass values are useful in checking theories of nuclear structure and to facilitate a bird's-eye view of the trend of mass values a quantity called here the "mass deviation" is plotted against the mass number. This is simply the deviation from a whole number plotted on a sloping scale which enables the whole range of elements to be plotted in a small space. Precisely defined it is $M_A - A + 0.001(A-20)$ where M_A is the mass of an element of

TABLE I. Isotopic masses.

Ne^{20} 19.99881 (Bainbridge)	Ar^{36} 35.97504 (Bainbridge)
Ne^{21} 21.00018 (20.99965)	Ca^{40} 39.9745
Ne^{22} 21.99864 (Bainbridge)	K^{40} 40.9739
Na^{23} 22.99680	Ca^{41} 41.0711
Mg^{24} 23.99189	Ca^{42} 42.9723
Mg^{25} 24.99177	Sc^{44}
Mg^{26} 25.99062	Sc^{46} 44.9701
Al^{27} 26.98960	Ti^{48} 47.9578
Si^{28} 27.98630 (27.9866)	Ti^{49}
Si^{29} 28.98685 (28.9866)	Ti^{50} 47.9651 (Dempsie)
Si^{30} 29.98294	Ti^{52} 48.9664
P^{31} 30.98457 (30.9843)	Ti^{54} 49.9632 (Dempsie)*
S^{32} 31.98206 (31.9823)	V^{50} 50.9387
S^{33} 32.98260	Cr^{52} 51.9575 (Astori)
S^{34} 33.97974	Cr^{53} 52.9572
CP^{34} 34.98107	Cr^{54}
Ar^{36} 35.97852	Fe^{54} 53.9601 (Dempsie)*
CP^{37} 36.97829 (36.9779)	Mn^{55} 54.9633
Ar^{38} 37.97544	Fe^{56} 55.9608 (Dempsie)
K^{39} 38.97518	Fe^{57} 56.9609

* Considerably less accurate than the other values given.



セシル・パウエル

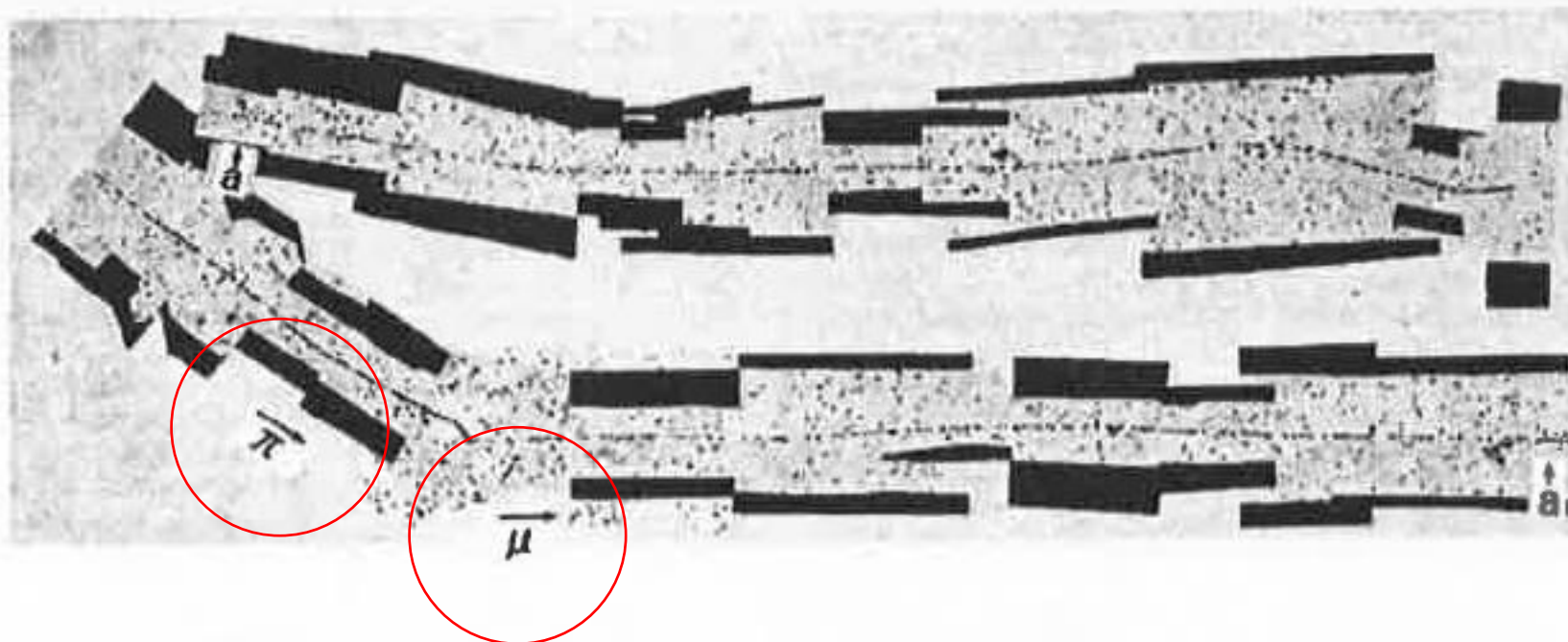


坂田昌一の2中間子論
1942年

正パイ中間子(140 MeV) $\rightarrow$ 正ミューオン(100MeV) + 反ミュートリノ(ほぼ0 MeV) + エネルギー

セシル・パウエルの率いるチームが、**1947年に宇宙線の観測によって電荷を持つパイ中間子を発見した。**この時代にはまだパイ中間子を生成できるほど高エネルギーの加速器が存在していなかった。そのため、チームは代わりに原子核乾板を設置した**観測気球を宇宙線を受ける高度まで上げ、**気球を回収後、顕微鏡による検査で電荷を持つパイ中間子の軌道を発見した。

1949年 湯川先生ノーベル賞受賞

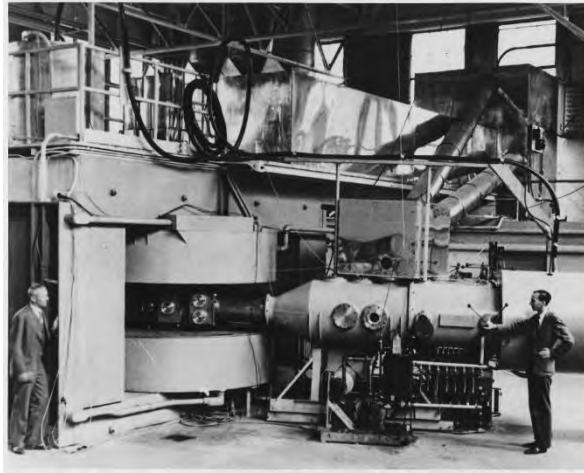


日本に最初のノーベル賞をもたらした一枚の証拠写真。下の左の方からパイ（ π ）中間子が入ってきて崩壊し、ミュー（ μ ）中間子が放出され（写真では水平に走っている）、やがてエネルギーがなくなって静止した。下の図の右端が上の写真の左側につながり、上の写真の右端で静止している。この写真は 5500 m のボリビアのチャカルタヤ山頂で得られた。

ミュー中間子やパイ中間子は、昔は中間子という名前がついていたが、今ではミュー粒子、パイ粒子と呼ばれている。本冊子では、発見当初の頃の話には中間子をつけている。



小サイクロトロン



大サイクロトロン

仁科先生も同じ夢を
描いていたのでは

超大サイクロトロン

184-inch Cyclotron Magnet in Berkeley



Indian Institute of Technology Ropar

Hans-Jürgen Wollersheim - 2017

GSI

1948年 π 中間子をシンクロサイクロトロンで
人工発生に成功



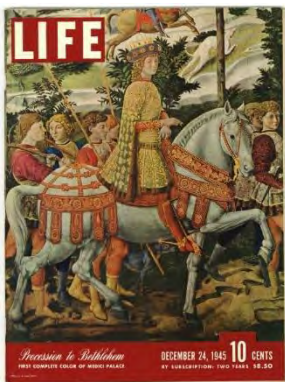
写真7-2 ロックフェラー財団主催の「再審査会」出席のメンバー。左から右へローレンス、A. H. コンプトン、ブッシュ、コナント、K. T. コンプトン、A. L. ルーミス [Courtesy of the Lawrence Berkeley National Laboratory and the American Institute of Physics Emilio Segrè Visual Archives]



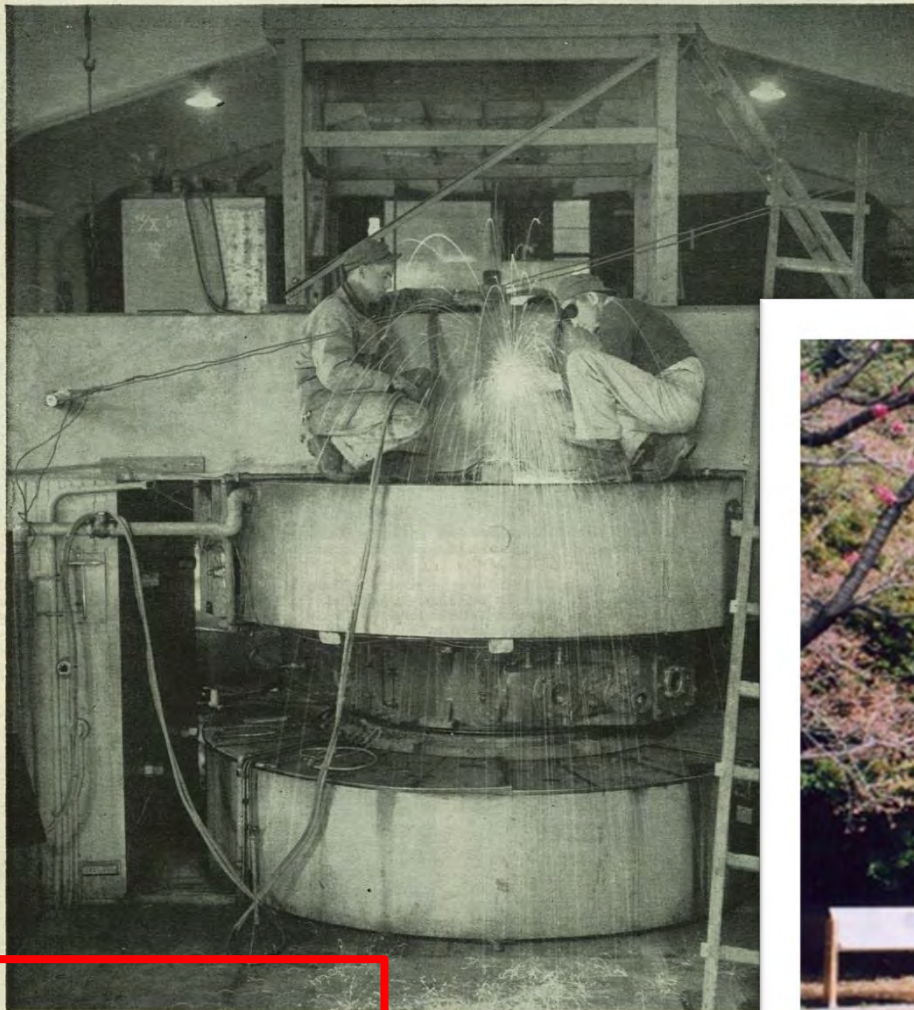
財源は「石油王ロックフェラー財団」 実験生物學研究のため

1947: Cecil Powell, Giuseppe Occhialini, Hugh Muirhead, and César Lattes detect a new meson, labeled π , which decays into the known meson, labeled μ , using Ilford nuclear emulsion plates exposed in the Pyrenees and in the Andes. The event was spotted by assistant Marietta Kurz. → 1949年 湯川秀樹ノーベル賞

1948: Pions are detected in emulsions in experiments run by Eugene Gardner and Lattes at the new Berkeley 184-inch synchrocyclotron



1945年12月24日発行の「LIFE」誌
理研サイクロトン解体東京湾投棄の記事が掲載された

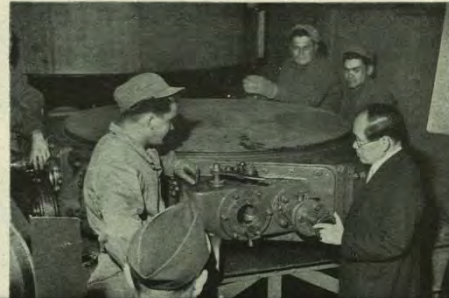


GI ENGINEER USES ACETYLENE TORCH TO DISMANTLE LARGER OF DR. NISHINA'S TWO CYCLOTRONS. MACHINE WAS PARTITIONED TO

CYCLOTRON SMASHING

American soldiers demolish and sink
precious Jap scientific equipment

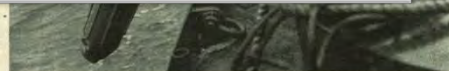
Last month American soldiers, acting on orders from above, hacked a path with bulldozers to the doors of the Nishina Laboratory in Tokyo's Institute of Physical and Chemical Research and dismantled two of Japan's five atom-smashing cyclotrons. Dr. Nishina, whose larger cyclotron (above) was partly U.S.-built, had been working under strict supervision on medical and biological research. His apparatus could not have been used to make an atomic bomb. Despite this, parts of the dismantled 200-ton cyclotron were loaded and dumped in Tokyo Bay. Other GIs described the action as a "crime against mankind." For the original order every one blamed the chain of command, which led ultimately to the Secretary of War who admitted it had come from his office, though not directly from him. It was, he said, a mistake.



理研第4号サイクロトン
(和光)

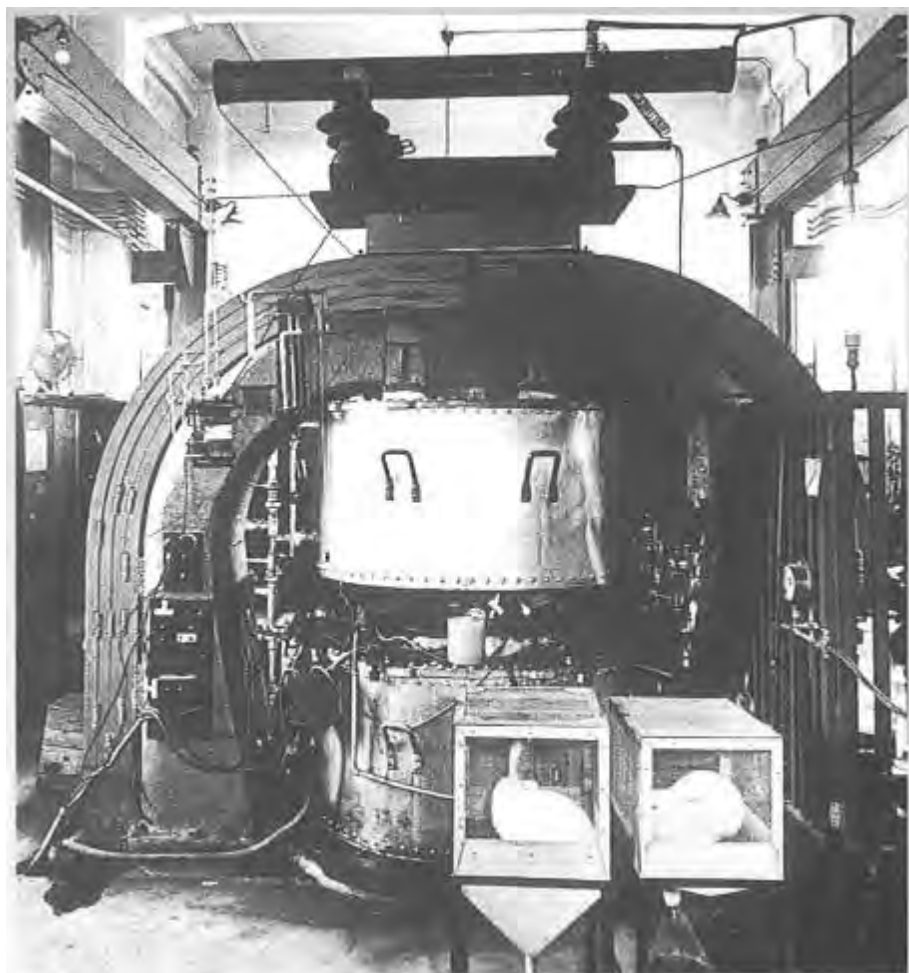


SOLDIERS CART CYCLOTRON PARTS from Dr. Nishina's laboratory through institute's grounds in a huge trailer. Men were from Eighth Army engineer battalion.



IN TOKYO BAY Americans dump section of "gun," one of cyclotron's most essential parts. Pieces were sunk in water 4,000 feet deep so Japs could never retrieve them.

小サイクロトロン（1937～）による放射線生物学・核医学





一六 人工放射能の生物學に對する應用竝に影響

一五 中性子竝に宇宙線の遺傳學的作用

一四 中性子の植物に對する作用

主 研究員 任 理學博士 仁 芳 雄
助 研究員 任 理學博士 中 弘 美
囑 託 託 託 託 託 託 武 見 太 郎
囑 託 託 託 託 託 託 森 信 嵐
囑 託 託 託 託 託 託 桑 藤 庄 一 三
補 手 託 託 託 託 託 託 中 久 保 秀 毅
理學博士 中 久 保 秀 毅

主 研究員 任 理學博士 仁 芳 雄
囑 託 託 託 託 託 託 農學博士 大 山 一 郎
補 手 託 託 託 託 託 託 宇 田 川 清 子

主 研究員 任 理學博士 仁 芳 雄
囑 託 託 託 託 託 託 篠 遠 喜 平 人
囑 託 託 託 託 託 託 和 田 文 吾 德
囑 託 託 託 託 託 託 田 信 德

中泉正徳博士

主婦之友社

石川数男社長

都築正男博士

森 和雄博士 仁科芳雄先生

中原和郎博士

中山弘美博士 (不明)

山下久雄博士

塚本憲甫博士 (ンシヨウ博士)

村地孝一教授 (P. S. Henshaw)

和田文吾博士 (不明)

森脇大五郎

算弘毅博士 ニール博士

(不明) (J. V. Neel)

中性子によるショウジョウバエの突然変異

*Sex-linked Mutations of Drosophila melanogaster
Induced by Neutron Radiations
from a Cyclotron.*

By Yoshio NISHINA and Daigoro MORIWAKI.

(Received August 31, 1939.)

INTRODUCTION.

Only a few experiments with neutrons in the field of genetics have been reported. The first was that of Whiting⁽¹⁾ who produced dominant lethals in *Habrobracon* with the aid of the cyclotron in the University of California. Next, Nagai and Locher⁽²⁾ succeeded in producing mutations in *Drosophila melanogaster* with fast neutrons from beryllium (485 g) irradiated by γ -rays of radium (4 g), and obtained a mutation rate of 1 in 98, or 44 lethals in 4312 F_1 females. On the other hand, Timoféeff-Ressovsky and his co-workers⁽³⁾ have been studying the same problem with neutrons produced by bombarding a lithium target with fast deuterons, and have arrived at the following conclusions:

1. Through neutron irradiation, increase in the mutation frequency is obtained, which is statistically well established.
2. The induced mutation frequency increases proportionally with doses.
3. Action of neutron radiations per unit doses (per pair of ions inside tissues) for producing mutations is weaker than that of X- or γ -rays.

Snell⁽⁴⁾ studied the appearance of sterility and of heredity changes

- (1) P. W. WHITING: *Science*, 84 (1936), 68.
- (2) M. A. NAGAI and G. L. LOCHER: *Nature*, 140 (1937), 111; *Genetics*, 23 (1938), 197.
- (3) N. W. TIMOFÉEFF-RESSOVSKY: *Forschung u. Fortschr.*, 14 (1938), 165; N. W. TIMOFÉEFF-RESSOVSKY und K. G. ZIMMER: *Naturwiss.*, 26 (1938), 326; N. W. TIMOFÉEFF-RESSOVSKY, K. G. ZIMMER, und F. A. HEYN: *Naturwiss.*, 26 (1938), 108; K. G. ZIMMER und N. W. TIMOFÉEFF-RESSOVSKY: *Strahlenther.*, 63 (1938), 528.
- (4) G. D. SNELL: *Proc. Nat. Acad. Sci.*, 25 (1939), 11.

We shall next deal with the dependence of the mutation frequencies on the stages of growth of the treated males. Generally speaking, the mutation rates in cases NI and NIV, both of which are in the same conditions regarding the stage of growth (adults), exceed that either of NII (pupae) or of NIII (larvae), although the dose is not the same for each case. From these results, it may be concluded that male adults are more prominent in manifesting neutron induced mutations than either pupae or larvae, just as was reported by Muller⁽⁶⁾ and Moor⁽⁷⁾ in the case of X-ray treatment. According to Muller, the X-ray treatment is more effective for male adults in inducing mutations than for male larvae, female adults, or female larvae. Later, Moore, on obtaining similar experimental results for male flies, put forward the following explanations. In the first place, most of the mutant cells of larvae are contained in the gonadic tissue of sterile individuals and this prevents the induced mutations from being brought to light. Secondly, in the case of irradiated larvae, mainly non-mutated gonial cells undergo differential

(6) H. J. MULLER: *Amer. Nat.*, 64 (1930), 220.

(7) W. G. MOOR: *Genetics*, 19 (1934), 209.

H. J. Muller 1946年ノーベル医学生賞：
X線照射による突然変異体発生の発見

仁科先生と放射線生物学

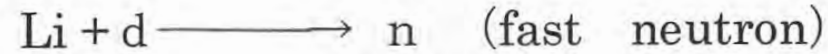
森脇大五郎 〈154 東京都世田谷区下馬 6-12-11〉

●
先ず仁科先生はどういうわけで生物学に関心をお持ちになったのだろうか、このことを理研時代に生物学でずっと先生の相談役をつとめられた村地孝一氏に伺ったことがある。村地氏は昭和10年東北大学生物学科卒業後昭和12年1月に理研の西川研究室に入り、同時に原子核実験室において仁科先生の下で放射線生物学の研究をはじめられた。戦後は立教大学理学部生物物理研究室主任教授としてわが国の放射線生物学の推進力となって盡されたが、惜しくも昭和36年10月13日白血病のため逝去された。この村地氏によると、“仁科先生は1923年から数年間コペンハーゲン大学のニールス・ボーア教授 (N. Bohr, 1885-1962) の下で研究されたことがあるが、ボーアは父上が有名な生理学者でその影響か、よく生命について仁科先生と話し合われたそうだ。またボーア教授のところには有名なヘベシー博士 (G. Hevesy, 1885-1966) が長い間滞在していたが、ヘベシーはアイソトープを生物に利用した最初の人で、その結果を発表した論文 ‘The Absorption and Translocation of Lead by Plants’¹⁾ は有名である。仁科先生はそこでこれを読ま

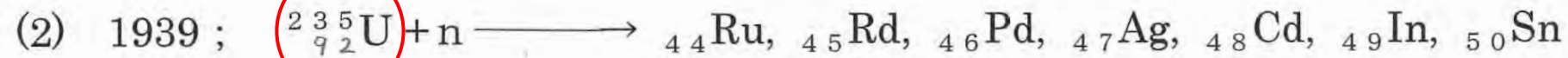
仁科先生御逝去の後の話になるが、戦後数年間 GHQ の生物部門を上述のヘンショウ博士と一緒に担当されていた昆虫学者のプレッチ博士 (D. J. Pletsch) が同じ研究の上でも親しくされていた岡田豊日博士（現都立大名誉教授）宛によこされた手紙に仁科先生のことを次のように書かれている。“仁科先生の逝くなられたことを新聞で知り非常にショックを受けました。たしかに日本は一つの輝かしい光を失った。また非常に能力のある行政者を失った。仁科博士は日本の学者の誰よりも研究業績の応用化とか公共化ということ強く意識された人である。もちろん他の多くの日本の学者もそういうことをしようとは考えていながら、大抵は手を下してそれに着手することを躊躇しているように見える。若し仁科博士が昆虫学者であったならば必要な時には蚊を捕えに穴蔵の中に卒先してもぐられたに違いない。”と。たしかに仁科先生はその高い識見と広い視野に立って積極的に研究を遂行された卓越した指導者であり、まさに日本における近代放射線生物学の先駆者であられた。

速い中性子による人工放射能の研究

仁科芳雄、木村健二郎、矢崎為一、井川正雄、江副博彦



トリウム系列 (4n) の核種 ${}^{232}_{90}\text{Th}$ がアクチニウム系列 (4n+3) の核種 ${}^{231}_{91}\text{Th}$ へ転換した最初の例として知られる



対称核分裂の発見

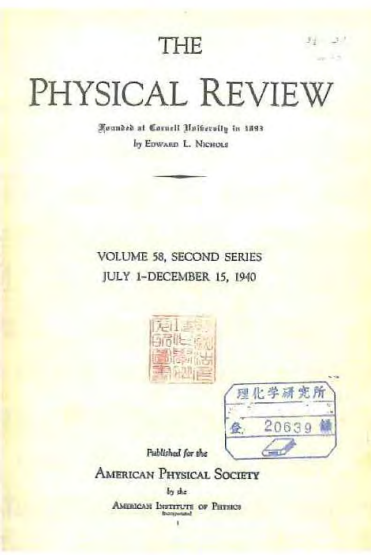


${}^{237}_{92}\text{U}$ は天然に存在しないネプツニウム系列 (4n+1) の、人工的に作られた初めての核種である。 ${}^{237}_{92}\text{U}$ は半減期 6.5 日で β 線を放射して 93 番元素になるが、分離に失敗した。

仁科先生は、日本帝国陸軍を騙してまで、
湯川粒子を追求めたのでは

仁科先生は、マンハッタン計画の科学者に
原爆の製造方法の大ヒントを与えたのでは

仁科先生の置手紙が、昭和天皇にポツダム宣言受諾を
決断させたのでは



that it is a mixture of PbS and PbSO_4 in the case of the lead glass (Fig. 1C). A detailed account will be reported in a Japanese journal.

We wish to express thanks to Dr. K. Fawa, Director of our Research Laboratory, under whose guidance this experiment was carried out and to Professor Y. Shibata, Dr. S. Tanaka, Mr. M. Nagata, and Mr. K. Harai, the members of the committee of the Japan Society for the Promotion of Scientific Research for their valuable suggestions and cordial assistance.

HIROSHI KANOGAWA

Research Laboratory,
Tokyo Denryoku Electric Company,
Miyazaki Division,
Kawasaki, Japan.
August 1, 1940.

* H. Sakai, *Zetsu*, 1, 119 (1940).
* L. E. Meyer and V. M. Moser, *Phys. Rev.* 61, 331 (1935); K. Kanegawa, *ibid.* 66, 91 (1936).
* See *Rev. Phys. Soc. A72*, 230 (1933); Lord Rutherford, 1944, A195, 329 (1934).

Fission Products of Uranium by Fast Neutrons

Under the above title we reported¹ the results of investigations on silver, cadmium and indium isotopes obtained from uranium by bombardment of fast neutrons. In continuing our experiments we found that palladium isotopes are also produced by fission, and one of them is the mother substance of the 3.5-hour silver isotope, Ag^{108} , which was mentioned in the above note. The experimental procedure was as follows.

The palladium fraction, which was separated as dimethylglyoxime salt from an irradiated sample and was carefully freed from the known fission products of uranium such as silver, antimony, tellurium, iodine, molybdenum, barium, lanthanum, cadmium, indium, etc., as well as from uranium itself, was examined for its activity. The decay curve, which was obtained from samples of long exposure, shows two periods, the longer one being 17 hours and the shorter one 26 minutes.

Under the supposition that the 17-hour palladium probably forms the mother substance of the 3.5-hour silver isotope mentioned above, we tried the search for this daughter product in the following manner. After 15 hours from the time of separation, the palladium compound was ignited, the residue was fused with sodium bisulfate and the melt was dissolved in water. From this solution, after adding silver nitrate as carrier, silver was precipitated as silver chloride. From the filtrate, palladium was precipitated with hydrogen sulphide. Both precipitates were then tested for the activity. The decay curve of the silver chloride showed a half-value period of 3.5 hours, which was ascribed to Ag^{108} as mentioned in the above note in *Nature*. A similar method was tried to see if any silver isotope is produced from the 26-min. palladium but the result was negative. It is thus clear that the 3.5-hour silver grows from the 17-hour palladium, which therefore is identified with Pd^{107} . On the other hand, the identification of mass number of the 26-min. palladium is not yet certain.

The results of our investigations on the fission products of uranium so far obtained by fast neutrons are summarized in Table I.

LETTERS TO THE EDITOR

TABLE I. Summary of the identifications of fission products of uranium bombarded by fast neutrons.

ELEMENT	HALF-PERIOD	ISOTOPE	IRRADIATION	MAXIMUM ENERGY (MeV)
Pd	26 min. 17 hr.	112	electrons	
Ag	7.5 day 3.5 hr.	111 112	electrons electrons	0.9 2.0
Cd	56 hr. 3 hr. 50 min.	115 117		
In	4.5 hr. 2 hr.	115* 117	γ -rays conversion electrons electrons	0.31-0.33 0.29 1.5

* Radioactive isomer of stable nucleus.

The above investigations were carried out as a part of the work of the Atomic Nucleus Sub-Committee of the Japan Society for the Promotion of Scientific Research. We acknowledge the assistance given by our laboratory colleagues in connection with the irradiation of samples and by Messrs. N. Saito and N. Matsumura regarding the chemical separations.

Y. NISHINA
T. YAMAKI

Nuclear Research Laboratory,
Institute of Physical and Chemical Research,

K. KIMURA
M. IKAWA

Chemical Institute,
Faculty of Science,
Imperial University of Tokyo,
Tokyo, Japan.
August 10, 1940.

* Y. Nishina, T. Yamaki, H. Rhee, K. Kimura and M. Ikawa, *Nature*, in press (1940).

On the Temperature Assignments of Experimental Thermal Diffusion Coefficients

When one calculates coefficients of thermal diffusion from viscosity data on the basis of a particular molecular model, the isothermal nature of viscosity measurements enables one to evaluate theoretically the coefficients at definite temperatures. The thermal diffusion coefficient can only be directly measured, however, when a temperature gradient exists. Comparison of theory with experiment then becomes rather difficult, because the measured value is essentially the "effective" value of the coefficient over a temperature range that is usually quite large. The problem then arises as to what definite temperature to assign an experimentally determined value.

The fundamental equation of thermal diffusion is

$$\text{grad } c_1 = -(K_T/T) \text{ grad } T, \quad (1)$$

where c_1 is the concentration (mol-fraction) of one of the constituents, T is the absolute temperature, and K_T is a quantity that for isotopes reduces to the form

$$K_T = \frac{105}{118} \frac{M_2 - M_1}{M_2 + M_1} \frac{R T c_1 c_2}{c_1 c_2}, \quad (2)$$

the M 's being the molecular weights and R being the

速い中性子による
 ^{235}U の対称核分裂の大発見！

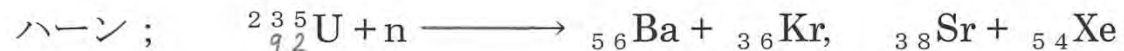
原子爆弾の原理であったが
仁科博士は気付かず

この他に
NATURE 146 24 (1940)

(1) 遅い中性子

反応率高い

+ 200MeV+ 2~3 n (遅い連鎖反応：原子炉)



非対称核分裂

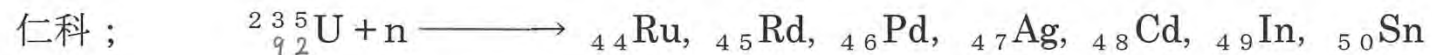


マクミラン・シーボルク 「超ウラン元素の発見」 ノーベル賞

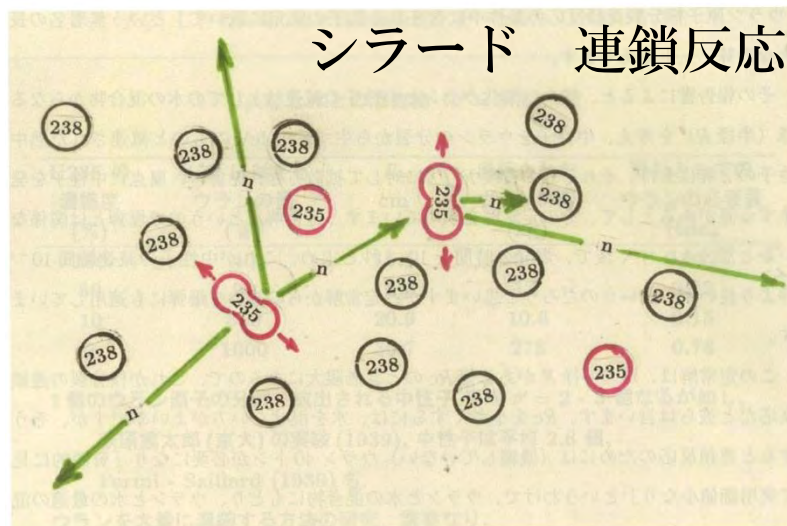
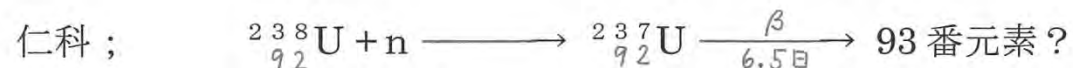
(2) 速い中性子

反応率低い

+ 200MeV+ 2~3 n (速い連鎖反応：原爆)



対称核分裂



中性子は、散乱をくりかえして、さまよい歩く。ときに核分裂、ときに吸収、ときに外へ：拡散

図1 ${}^{235}\text{U}$ の核分裂の連鎖反応

原爆にするには
超高濃縮で速い中性子

原子炉にするには
低濃縮で遅い中性子

「ローレンスが巧く取り扱ってくれましたので、今日すっかり見学でき 8 分通り目的を達して一同喜んでいます。・・・・・・我々の方の図面も見せてローレンス、クックセー、マクミラン、アルバレー等が議論してくれましたが、皆の意見が一致して大改造せねば働かぬだろうと言うのです」

「昨日、晚餐はローレンスの家に招かれました。その後、7 時 45 分からのコロキウムでは私の論文について話せとのことで、15 分間簡単に話しましたが、ローレンス、オッペンハイマー、アルバレー、マクミラン等が褒めてくれ、セグレと化学のシーボルクは別刷りを要求しました。

マクミランは我々が 6 日半と出したウランのアイソトープを 7 日と出し、又エレクトロンのエネルギー 26 万ボルトで我々の 20 万ボルトと同じだと言って喜んでいました。ただ 93 番はセリウム等に来て、

- レニウム等には絶体に行かないよと言っていました。セグレはこちらでもやったがフィッションプロダクトは分析が難しかったので、銀やカドミウムが出なかったが、16 ミリオンでやれば銀が得られるはずだからやってみると言っていました」

矢崎為一 ———→ 仁科芳雄

1940/09/04 (2)

「ローレンスは晚餐を食べながら、今度の問題は始めから政府から総長へ通達が来たので、どうしようもないが、個人的にはてんで問題ないから出来るだけよく見たり、皆と相談してくれと言って、大体クックセイやマクミランに任せ、自分はわざと席をはずして、うまくやっています」

1940/09/07

●
「セグレが盛んに（大サイクロトロンで）16 ミリオンの D をベリリウムに当て 10 グラムのウランを使って我々の結果をチェックしています。3 時間半の Ag が得られ、Pd（17 時間）から得られるのだらうと言っていました。

速い中性子による核分裂の再確認

シーボルクとリビーの要求により化学のセミナーで 20 分か 30 分間話すことになっています」

1941 2 シーボルク Pu 発見



The Somerset
400 Commonwealth Avenue
Boston, Mass.

Boston, Mass.

M.II
の
帰
還
を
お
し
や
う

仁科先生

臺下

矢崎為一

に

1940 10



The Somerset
400 Commonwealth Avenue
Boston, Mass.

Boston, Mass.

揮毫、会議は今日が最終日でした。面白い記録があります。それから其
 を世へ送ります。会費約二百五十名。書体には念撮影をします。
 ラビやエルに会った。晩餐会のスピーチはエルでフィッシュを
 フィッシャとわざと書いた。方々とも交際しました。然し判り易く
 の語をいふ。今迄 *Amygdala* *fragrant* *Symetric fragrant*
 日本の仁科、矢崎が *Symetric fragrant* *Dandiff* *isho* は洗目に似てる。
 又Uは他に 239 にあるが之は *Abelson* と *McMillan* が 93 を提へ。
 もう早い *Neutron* で 237 が来るが、又の本と *Workday* とか。立に笑え
 したと言つたのを、皆が私に眼を注いで取いて (TB) *ask* る。気がすま
 いかし沢山彼等と力で *fiesin* をやるる。 *Harvard* *Purdue* *Columbia*
 昔の人と仲良くするのを楽しんだ。
 プリンストンの *Turner* が同じ *Table* に席を拍平くして一すこれだ。
 M.I.T. の *Cyphalon* を見せて貰ふ。土曜日に *Van de Graff* も見せて貰ふ。四時をすぎ
 あんまり遅くもなりました。 *Kimura* の *Pump* は別強要へない事になりまし
 納期が遅い為め、佐田さん、掛つて帰られぬのが悔です。来方ありません。

ルミに絶賛される

速い中性子による核分裂をフェルミに絶賛される

仁科先生は、日本帝国陸軍を騙してまで、
湯川粒子を追求めたのでは

仁科先生は、マンハッタン計画の科学者に
原爆の製造方法の大ヒントを与えたのでは

仁科先生の置手紙が、昭和天皇にポツダム宣言受諾を
決断させたのでは

1945 8 6 広島に原爆投下

1945年8月7日朝



(秘)

敵性情報

社団法人

同盟通信社内

情報局分室

第一號

二十年八月十日

本資料中には敵国其他外國側の宣傳情報を含み採用せるもの多
く取扱に特に注意ありなし

◎「原子爆弾」を發表

桑港戰情六日發

白亞龍當局は六日史上最初の原子爆弾に關する大統領トルーマンの聲明を發表した、至又次の通り

今から十六時間前美國の一航空機は日本の重要軍事基地廣島に一個の爆弾を投下したこの爆弾は TNT 二萬噸よりもさらに強力であり、戦史上最大の爆弾たる英國の「グランド・スラム」の二千倍以上の爆破力を有する、それは原子爆弾である、これは宇宙の根本的な力を驅使したもので、今や太陽の力の源泉となる勢力が徹底に戦争を齎した者共に對して放出されたのである、日本は眞珠灣において空中から戦争を開始した（一行不明）この爆弾によつて今やわれわれのが武裝兵力の増大し行く力に加へ一つの新しく且つ革命的な破壊力の増大を加へた

August 6, 1945: Statement by the President Announcing the Use of the A-Bomb at Hiroshima

Transcript

Sixteen hours ago an American airplane dropped one bomb on Hiroshima, an important Japanese Army base. That bomb had more power than 20,000 tons of T.N.T. It had more than two thousand times the blast power of the British "Grand Slam" which is the largest bomb ever yet used in the history of warfare.

The Japanese began the war from the air at Pearl Harbor. They have been repaid many fold. And the end is not yet. With this bomb we have now added a new and revolutionary increase in destruction to supplement the growing power of our armed forces. In their present form these bombs are now in production and even more powerful forms are in development.

It is an atomic bomb. It is a harnessing of the basic power of the universe. The force from which the sun draws its power has been loosed against those who brought war to the Far East.

Before 1939, it was the accepted belief of scientists that it was theoretically possible to release atomic energy. But no one knew any practical method of doing it. By 1942, however, we knew that the Germans were working feverishly to find a way to add atomic energy to the other engines of war with which they hoped to enslave the world. But they failed. We may be grateful to Providence that the Germans got the V-1's and V-2's late and in limited quantities and even more grateful that they did not get the atomic bomb at all.

The battle of the laboratories held fateful risks for us as well as the battles of the air, land and sea, and we have now won the battle of the laboratories as we have won the other battles.

Beginning in 1940, before Pearl Harbor, scientific knowledge useful in war was pooled between the United States and Great Britain, and many priceless helps to our victories have come from that arrangement. Under that general policy the research on the atomic bomb was begun. With American and British scientists working together we entered the race of discovery against the Germans.

飛行機の故障で途中から引き返して来た。早く引き返してよかった。山の中へ着陸したら余の機も貴客がうちも知れあい。明日は飛行機の都合で午後出ます。
 トルーマン聲明は^タおのの原子爆弾が「火薬一万吨」又は「一〇トン爆弾の二千倍」の威力があると述べている。これは君の報告の数字とよく合致している。



玉木 英彦

玉木英彦 君

仁 科 芳 雄

財団法人 物理化学研究所
 東京市本郷區駒之上富士清町三番地
 電話 大塚 (四) 三二七四 三二七五 三二七六 三二七七

昭和廿年 八月七日 夜

昭和廿年八月七日夜

東京市本郷區駒込上富士前町卅一番地
財団法人 理化學研究所

仁 科 芳 雄

五木 君

トルーマン聲明
現在原子爆弾の製造に六
万五千の
工員が従事
してゐると云ふ
一昨は十二万
五千人であ
つたものと云ふ
廣島の八割
が二の一彈
でやられ死
傷十一万を
出したといふ
ことを、その真
似は島人ばかり

今度のトルーマン聲明が事実とすれば吾々「二」号研究の関
係者は文字通り腹を切る時が来たと云ふ、その時期につ
ては廣島が歸を待つからそれ近東系で待機して
居る是れは、トルーマン聲明は従来の大
統領聲明の数字が事實であつた様に、英米である
男、それは廣島へ着いて見れば、英米は一目瞭然
であらう、そして参考本部へ到着した今迄の報
告はトルーマン聲明を裏書きする様である、
残念なり此問題に關しては、小生の第六感の教

へた所が、いじつたらしい、要するにこれが事實とすれば
トルーマンの聲明する通り、米英の研究者は日本の研
究者より理研の四十九号館の研究者に對して大勝
利を得たのである、これは結局に於て米英の研究者の
人格が四十九号館の研究者の人格を凌駕し、
よふことをたき。

萬事は廣島から歸を待つ、それ迄に理
論上の次の問題を検討し、置いて居る、

普通の水の代りに重水を使ふと、ウランの濃縮度
はどの位で済むか、又そのウランの量は、如何、

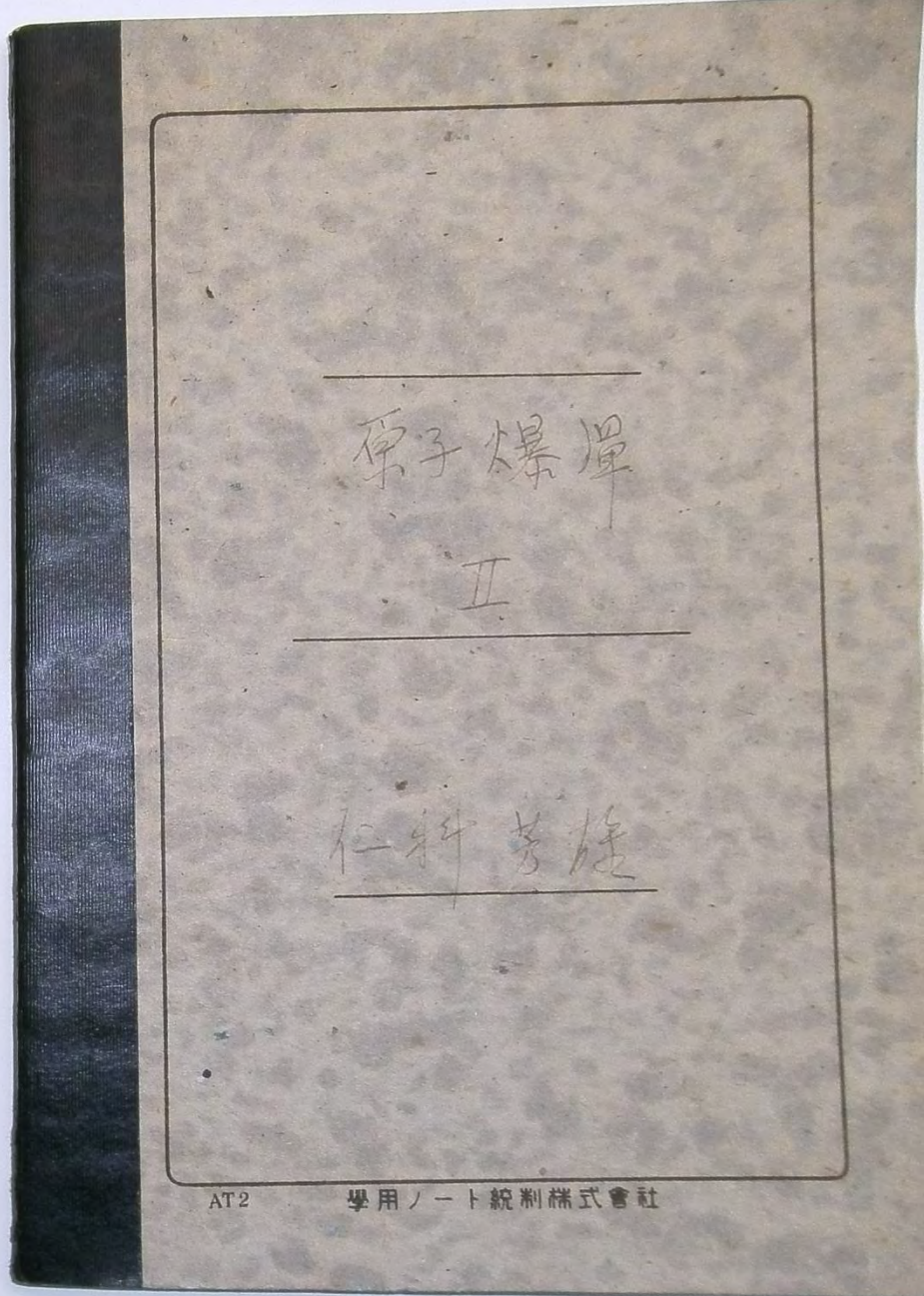
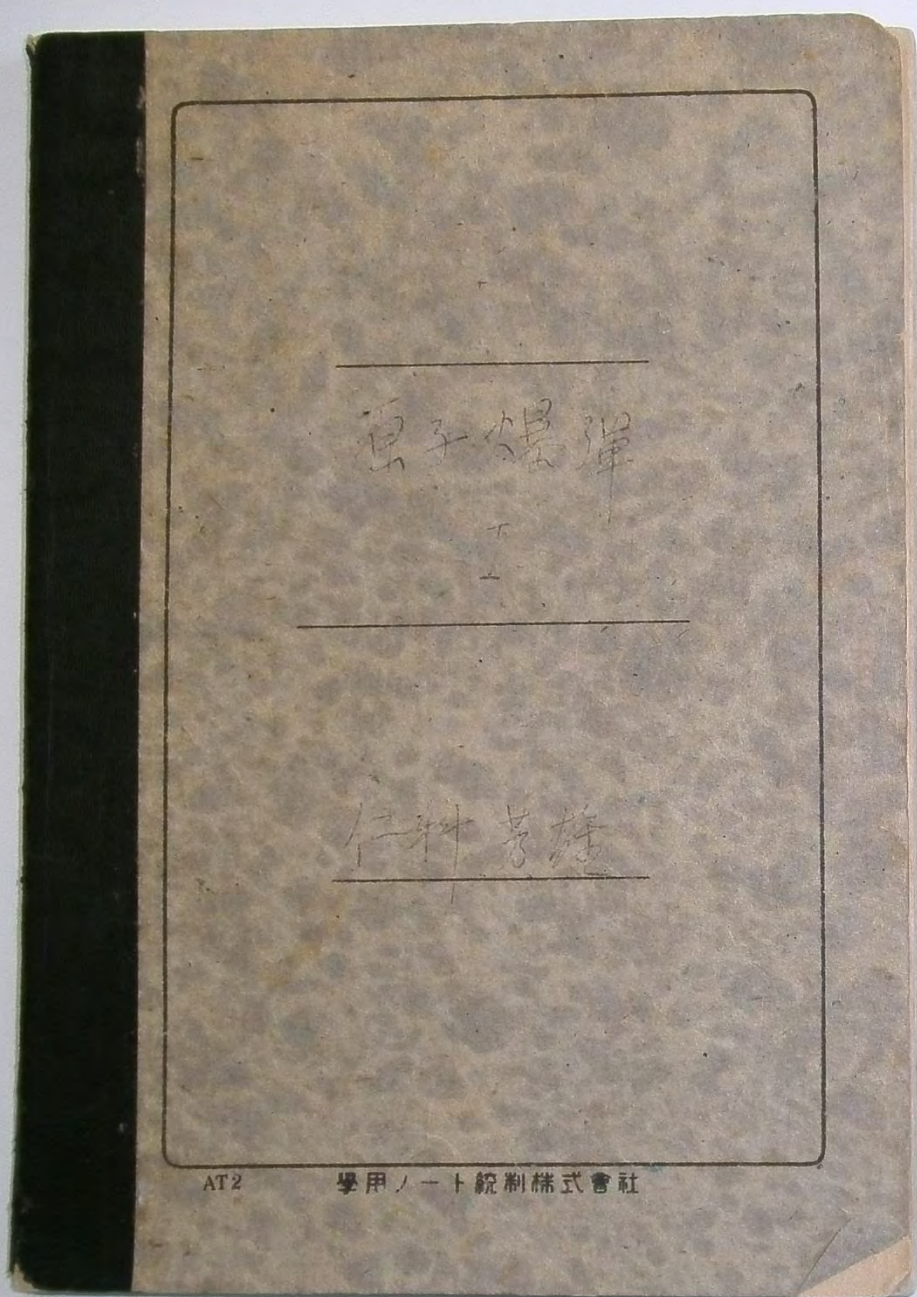
小生は来る十一月か十二月には、ある豫定で居るが、形勢
の都合や敵機来襲の状況で、又は調査事項の多寡
によつて、旅程を変更するものと思つて居る、今

No. 2

昭和 年 月 日

仁科先生が「命懸け」で「原爆かどうか」判定するために
携行したノート

先生は「放射線の人体へ影響」を最もよく知っていた。
最も放射能の強いときに広島、長崎の最も強い場所を
調査した。



その根拠の一つは？

● 「原子弾又は同程度ノモノ」

● 「判決」

飛来不足、白色ノモノヲ有シ。
伏也。耳ヲ防ガ。ニシ1km
中心地ニテ防空壕ニテ必カニ一歩アリ。
硝子ノ瓶ハ又ニニニニニ。
白ペンキヲ又ニ。白幕ヲ又ニ。
閃光アリ。熱源ニニニ。爆風モ又ニ。
微粉子ニニニ不明。
員傷者多キハ未ケイケンノタメ
奥ノ背中カ白クナリタ。

休憩
13時再開。 ● 判決

I. 爆薬ニ付テ
1000~2000 トンノ火薬ニ付タリ。
爆薬ヲハ熱タシ。焼夷剤モ又ニ
焼夷剤ヲマキ コレニ火ヲツケル。
本爆 ● 原子弾又ハ 19 砲台ノモノ

爆薬高火、地矣。
獲玉即社 300m 南、高火 550m

爆圧
施設本部

硝子 0.2 kg/cm². (硝子)
已受 0.6 kg/cm² (家半壊)

∴ 中心 6 kg/cm² 地上。

火傷ノ原因

3km ヤケ

ツル先ハ ハジハナリ。

熱源 アニニ XRAY, β-線ヲ、疑ハ
アリ。

持続時間 (1~2 sec.) (エ/1)
溶解ニハ付カニニニ。
光ノ持続時間ハ

火災ノ原因 (引火) 燃焼ニ付キ、(老弱ニニニ)
光ニニニ 可燃性物質、着火ニ付
ニニニ、場合モアリ。

投弾方法 (單機又ハ少数機ニニニ) 投
此種投弾ハ必ズシモ 落下傘ヲ伴
ハス。高火ニ付タリ

II. 国民指導

1. 警戒警報中トモニ 敵機ノ近

終戦の真相

鈴木終戦内閣書記官長

参議院議員

迫水久常

「正論」平成15年9月号

そういうわけで米国が原子爆弾を実際に使用したということとは、ほんとうに驚天動地の脅威でありました。

当時の常識では今度の戦争に於いて原子爆弾が実現したならば、戦争は終りである、原子爆弾を有する方の勝利に於いて戦争は終りであると信ぜられて居りました。

従ってこのトルーマン大統領の発表は日本に一大衝撃を与え、特に著しい事は、あれほど戦争継続に熱中していた軍の中にさえ「斯くなる上は日本の軍隊は負けないが、日本の科学は負けたことが明かになった以上、戦争は一日も速かに終了すべきである」と議論が生じたことであります。

八月七日朝閣議を開いてこの対策を議しました。大勢はかくなる上は速かにボツダム宣言を受諾する方式によって、戦争を終結すべしというのでありましたけれども、実は原子爆弾出現ということが全く意外でありましたので、或は米国の詐術ではないかと疑うものもあり、ともかく一応実地調査してからという話になり、仁科博士等の専門家を現地に急派遣しました。

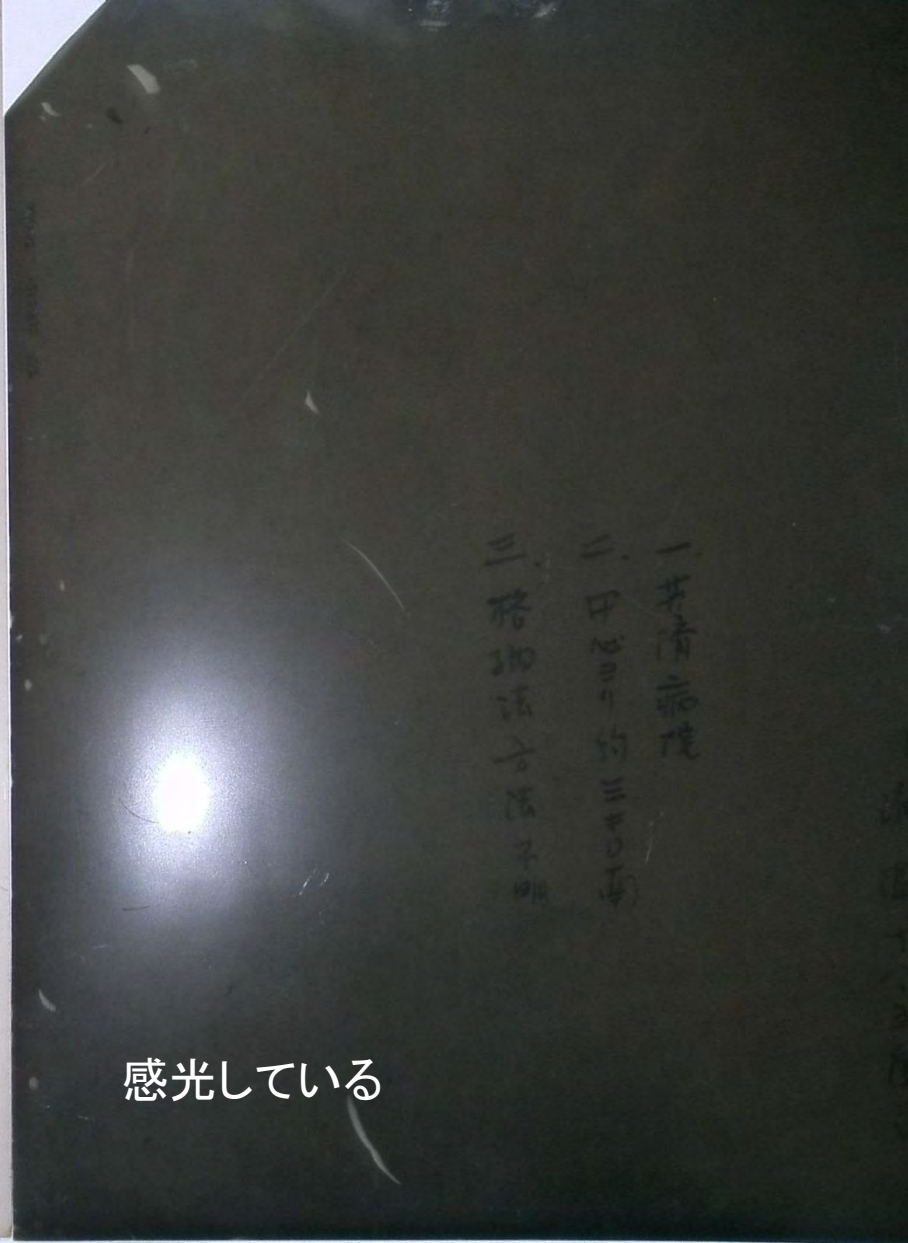
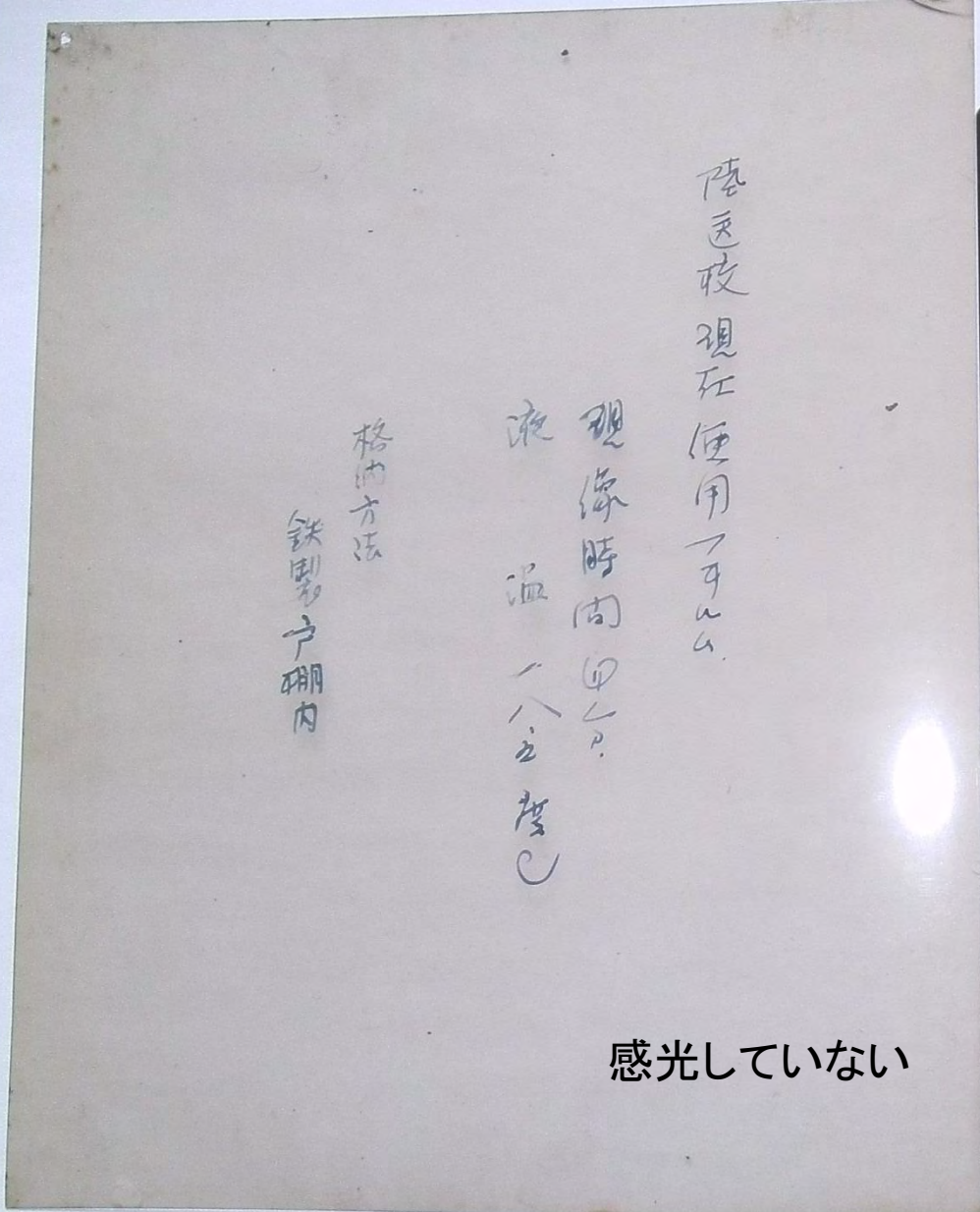
その報告は翌八月八日夕刻到着、仁科博士は私に対し「残念乍ら原子爆弾に間違いありません」と涙を流して報告されました。

鈴木総理大臣はこの報告を得て私に対し、明日朝閣議を開き自分から終戦に関する意思を表明するからその用意をするようにとの御下命がありました。

2005年に「仁科記念室」見つかった

(右) 爆心に近い日赤病院のレントゲンフィルム

(左) 爆心から遠い呉医学校のレントゲンフィルム



「広島原爆」断定の証拠

放射線で真っ黒に感光 大判のレントゲン



中根先生

原爆に感光し、真っ黒になったレントゲンフィルム(右側)と感光しなかったフィルム(左側)を示す中根さん＝東京都文京区で

約60年ぶり発見

原爆投下による放射線で感光し、真っ黒になった広島赤十字病院の大判レントゲンフィルムが、旧理化学研究所(東京都文京区)の仁科芳雄博士の研究室から見つかった。大本営の現地調査に同行した仁科博士の指示で現像され、爆弾を原爆と断定する決め手となったが、約60年間、行方不明となっていた。原爆投下直後の状況を物語る貴重な資料として注目される。【中村牧生】

研究室は「仁科記念財団」が保存していたが、昨年8月に建物の耐震工事を実施。仁科研0Bで理研元副理事長の中根良平さん(84)が資料を整理したところ、古新聞にくるまれビニール袋に入っていたレントゲンフィルム7枚と撮影用の撮り枠を見つけたという。

一緒に出てきたリストから、7枚は広島赤十字病院(爆心から1・5キロ)で見つかったフィルムが5枚、陸軍三滝分院(同2・5キロ)が1枚、共済病院(同3・5キロ)が1枚。広島赤十字病院2階のレントゲン撮影室の保管庫にあった大判の1枚(約35センチ、横が約27・5センチ)だけが真っ黒に感光し、残り6枚はほとんど感光していなかった。

仁科博士は原爆投下から2日後の1945年8月8日、大本営調査団と

仁科先生が「命懸け」で調査した結果が

日本の終戦を促したのではないかと？

先生は広島のと、長崎も調査

大変な被ばく量だったと思われる

日本映画社による原子爆弾記録映画の制作

日本映画社は、戦時ニュースや戦意高揚を図るための映画作品を製作するために設立された国策会社でした。

原爆投下直後から、社内では、原爆の被災のようすを記録する映画製作の企画が持ち上がっていました。

日本映画社の関係者や理化学研究所の仁科芳雄氏らの働きかけで、「原子爆弾災害調査研究特別委員会」の調査活動の一環として映画製作することが認められ、専門家の指導を受けながら9月下旬からスタッフが広島に入り撮影を開始しました。映画製作に当たっては当初から被爆の実態を客観的に科学的に記録しようとする姿勢が貫かれていました。

関係者の懸命な努力で映画製作が進められていきましたが、長崎の撮影現場で突然、GHQ憲兵に撮影中止を命ぜられます。

アメリカ側と交渉の結果、空襲の効果を調べる目的で来日し調査活動を行う(USSBS)の委嘱を受ける形で製作が継続できることとなり、この監督の下で1951(昭和26)年4月、英語版の「EFFECTS OF THE ATOMIC BOMB ON 広島・長崎における原子爆弾の影響」という作品が完成し、アメリカ側に納品の提出を命ぜられ、写真・フィルムなどことごとくアメリカに持ち帰られます。しかし、一部の関係者が密かにフィルムの複製の一部を保存していました。は、製作から21年も経った1967(昭和42)年のことでした。



ネーヤ電位計で調査する坂田 中根(右) 両氏
1945年12月 長崎

EFFECTS
OF
THE ATOMIC BOMB

ON HIROSHIMA AND NAGASAKI

仁科記念財団編纂
原子爆弾
広島・長崎の写真と記録

朝永先生監修

仁科先生
「まさに、
生き地獄
だった」



143 熱傷 似島検疫所 撮影 尾藤政美 8月7日
患者の兵士の腰のところに所属、姓名などを記した紙片が見えて
いるが、記録は残っていない。上体は裸体、着帽、半ズボン姿での
被爆で、顔、胸、両手など、前面から照射を受けた。すでに応急処
置をうけている。(当日午後撮影したものと思われ、撮影者の行動と
も一致する)

144 熱傷 大村海軍病院 撮影 塩月正雄 8月10日
第4度熱傷。ここに頭部がひど
い。死亡。工員、21才。女、12病
舎。の記録が残っている。この女
性の場合の救護列車に乗るまでの
経過は明確でないが、重傷者のう
ちには仲間に助けられて乗せても
らった者が多い。

熱傷・創傷
長崎での被爆後10時間、大村海軍病院に収容された
受患者も塩月正雄医師はつぎのように記している。
「そのときの患者たちの状態は正に凄惨そのものであ
った。大部分のものは頭髪は焼けちぢれ、髪物はボロ
ボロに破れ、血にまみれていた。露出部はほとんど焼
けたたれ、創面はいちじるしく汚染し、多くの者は露
面又は臀部等に無数のガラス片又は木片等が突きさ
り、とても人間の姿とは思われぬ悲惨な有様であっ
た……」。被爆後10時間経たれた状態ではあるが、広島、
長崎をみて、収容後2時間余に約800名の初療を終え
ることのできた病院は大村以外にはみあたらないので
ある。



146 熱傷 大村海軍病院 撮影 塩月正雄 8月10日
49才。女。農家。8病舎。傷ば
かりでなく、全身が腫れあがっ
ている。頭髪は焼けてなくなっ
ており、胸、腹部を除き熱傷。

145 熱傷 大村海軍病院 撮影 塩月正雄 8月10日
19才。男。人夫、12病舎。被爆
地点は明かでないが、三原・長崎
兵器製作所大工工場付近の被爆
であろう。前方から受けた熱傷と破
片創があり、受傷後に黒い血を流
している。写真は製作の悪いなか
での撮影のため受傷状態が明確で
はないが、病状を看せることの
できない重傷例。



刊行のことば

朝永振一郎

仁科記念財団は故仁科先生の指導と援助によって完成されたいわゆる「原爆映画」がアメリカに持ち去られ、原爆災害に関する貴重な資料が日の目をみないでいることをかねがね残念に思っていた。そこで財団は、一方では故仁科先生と親交のあったアメリカの科学者たちに対して、この映画が一日も早く日本に引き渡されるようアメリカの有力者に働きかけることを依頼すると共に、他方日本国内においては、原爆災害の調査に従事された科学者、報道関係者、映画撮影者のかたがたに協力を求めて、一つのまとまった解説つきの記録を編纂することにし、その構成等について案をねりつつあった。

ところが原爆映画はアメリカ当局から日本側に引き渡されることになり、それとともに、記録編纂の計画は急速に具体化し、ここに内容見本をひろく提示できるようになった。

この記録が、原水爆戦争のもたらす恐るべき様相を正確に世人に伝え、そのことによつて、核兵器は二度と再び使われてはならぬという世論の形成にそれが役立つことは、編纂者の切なる願いである。

日本医師会々長 武 見 太 郎

原爆の記録は人類史の一コマとして、学問的にも、社会的にも正しく残されなければならない。本書は当時の最高の指導者であった仁科芳雄博士が自ら指導されたもので、先生の学者として、又人道主義者としての面が画面に滲み出ている筈である。

原爆投下の頃先生の下で勉強していた私は、先生の許しを得て、元内大臣だった牧野伸顕元伯爵を通じて、翌日は天皇にその真実を伝えることが出来、平和回復の端緒となった。

原爆災害の真実を知ることが日本人の権利だと思うし、世界平和への日本人の脊髄としたいものである。

武見先生からお聞きした話をもう一つ。昭和20年8月6日、広島に原爆が落とされたとき、仁科先生は陸軍の要請で直ちに軍用機に乗って広島に飛ばれた。（中根先生の回顧録より）

惨状を見、それから赤十字病院にあったX線乾板が感光しているのを見て、原爆が投下されたと察せられた先生は、人骨を東京の武見先生に送って放射能の検出を命ぜられた。

人骨から強い放射能が放出されていることを確認された武見先生は、直ちに奥さんの祖父に当たる牧野伸顕伯爵に報告された。

牧野伯はすぐさま宮中に参入し天皇陛下に奏上され、陛下は即座に日本は降伏するとの聖断を下されたそうである。8月8日であった。

古野伊之助同盟社主がフライングして海外に
ポツダム宣言受諾を報じた。

JAPAN ACCEPTS POTSDAM DECREE!

Radio Asks Emperor Be Retained

Sakhalin Isle, Korea Invaded By Red Armies

Warned 1,200 Planes

By Truman Of War Targets

Other "Surrender"

THE HARTFORD COURANT

JAPAN IS QUITTING

Domei Says Tokyo Will Take Potsdam Terms

Surrender Offer Still Unconfirmed At White House

Emperor Hirohito Asks That He Be Allowed To Retain Prerogatives

TAUNTON DAILY GAZETTE

JAPS READY TO QUIT

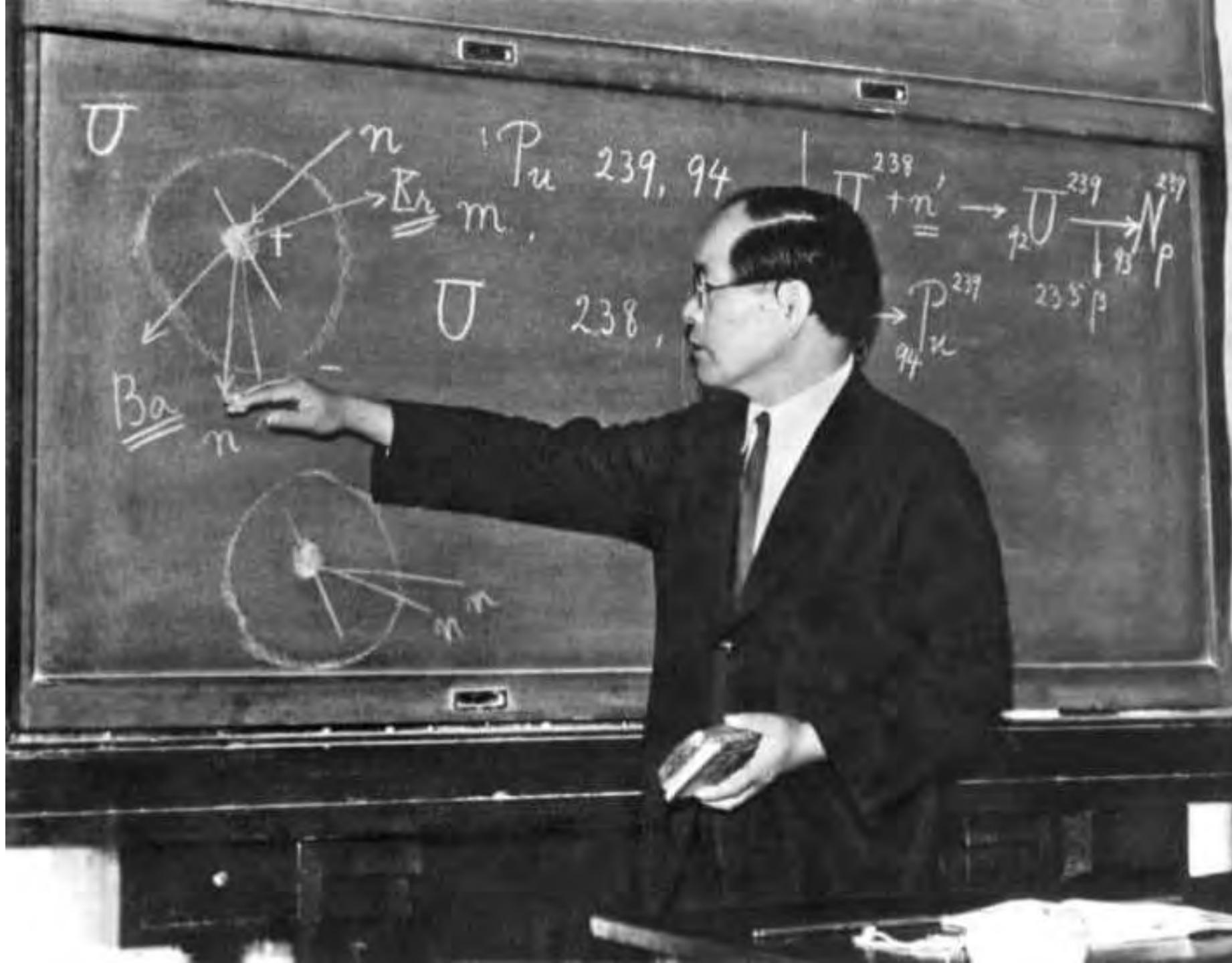
Domei Agency Broadcast Says Japan is Ready to Accept Potsdam Terms

London Celebrates Without Awaiting Official Word

U. S. Officials Wait for Further Developments

同盟のスクープ電を報じる 1945 年 8 月 10 日付米各紙

原子爆弾綜合研究會々場



1945年9月 原子爆弾の原理」を説明する
仁科博士



- ケリー博士の支援を得て、1948年3月1日株式会社「科学研究所」創立
- 選ばれて社長に就任
- アンチトラスト法で理研コンツェルン完全解体の危機を免れる



ペニシリンの培養タンクの前に立つ仁科社長



アメリカから放射性同位体が到着した日の仁科博士とSb-125
(日本アイソトープ協会30年史所載・朝日新聞社撮影)

■社長として財政立て直しに専心 800人の給料のために金策に奔走
ペニシリン（左）で少し立て直す 社長業に専念とボーアに手紙

■ケリーと吉田茂の支援を得て、GHQを説得、1950年、オークリッジ
の原子炉製ラジオアイソトープが輸入される（右）→日本アイソトープ
協会（茅誠司初代会長）の設立へ

日本医師会

東洋文庫

科研製薬株式会社
1948年創業：仁科

日本アイソトープ協会
（旧理研23号館）
1951年創業：仁科→茅

財団理研、科学研究所の敷地
1946年：大河内→仁科所長
1948年-51年：仁科社長

仁科記念財団
（旧理研37号館）
1955年創立：渋沢敬三

村田女子中高

文京グリーンコート

日本の科学界の代表となる



兼重寛九郎

我妻栄副会長

亀山直人会長

ケリー

仁科先生

1949年 日本学術会議設立
初代副会長に選任



ケリーは、日本美術の発展に大きな影響を与えた。彼の作品は、日本の美術界に大きな衝撃を与え、多くの画家が彼のスタイルを模倣した。ケリーの作品は、日本の美術界に大きな影響を与えた。彼の作品は、日本の美術界に大きな衝撃を与え、多くの画家が彼のスタイルを模倣した。

工院、学術研究会、中
 会の旧学術研究会、中
 当時の体制は、農学
 関係の、(「国語」
 を生んで、また南
 間で人事交流を

が特に力を注いだの
 の古い学術研究の剛
 の結果が「科学
 」と言われた日本
 設立(四九年)だ



研

日本学術会議設立

に、民主的芸術組織を
べく動きながら、前
はなからつて、手回

学界

な発想をあげ、研の
わけてい。ケリは
陣番を打撃、ようし
英国のロイヤル・ソ
や金米科学アカミ

究設

と利基機械士の墓石の間に分置されたハリー

研究所などを調べるに当たっては、サイロロトは北大に在りては、
「迎えるべき人物」に
取、関係者や、ゆめ
い、と懇話を求め、
「分書」があり、
主に設備は、
に著されてい、
が、だれも、
存在を言い出さ
学問の整理を
ケリーの調査
匠的であら、
横切つてくれ
取さなければ
取、と目標を
る。双方に、

友日永

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

GHQ顧問ケリー

立つ。

「ケリ」はマサチ
科大で、物理理
取得。戦中はし
動員された。ま
な。GODでは
技術開発をして
の科学技術全般に
的な責任を負った
「金木」はアカ
合いが父と離れ
人の友人になく
ない父にこえて
天へきれたこと
科学、技術政策
推進する閣僚
閣政理局（GST
る物理学の発展
はける姿。

「私がきいたな
いるのはその影
類の華達として
校制を根づかせ
を欲した。その
めんどうで、
な環境が、また
合理的に設計さ
格のためか、研

「ユー・セツツン」の博士号を
「ダー研究だ
科学者だ
科学局料
戦後の日
かかわる疾
マミーの知
ん。日本に
日本語も知
この報道は
大統領に
の通判科学
に勤務
（ヘンリー）
仕事に就い
ては私には
ら、ケリー
も、筋の通
そうしたた
ば、研究に
設備を捻取

[illegible]

院の方
つた。
学院教授()は科学リは科学リに専門に値した。彼にわすかに残る全部破壊をうと敵しくったてみネットワー年たとい信頼の太い理研のためなる素因()は生涯の方は、妻アイ男ヘンリー学も始めた文二部()は「ケ」()はリンは『と笑って

[illegible]

著者、
の北研
博士の
リクス
を研究
ていて
る。い
で、こ
ういふ
人々が
いると
いうこ
ろは、
ハリー・ケリー博士とその家族。博士が抱
いているのが長男ヘンリー（仁科浩二郎氏提供）

[illegible][illegible][illegible]

Harry C. Kelly
1908.9.3(明治41)～ 1976.
昭和期の物理学者、GHQ
部長

マッカーサーの科学顧問
体制を刷新、日本学術会
など科学技術の復興に努

‘50年4月には仁科芳雄、
オ・アイソトープの輸入
科学界が最もつらかった
苦楽を共にした。

仁科生牛

■仁科充生

吉田茂が信頼していた。
アメリカの物理学者に尊

日本の科学者の代表であ
日本を代表する理化学研

2.2(昭和51)

を務めた。日本の旧議の創設に尽力するめる。

を助け、米国からラジ
を実現した。日本の
時期に、仁科芳雄と

散されていた。

研究所の代表であった。

滿
伏
一
發

44	總
案	公
12	四

言
明

日本多岐な法と二重二重に支えられ、
 原子爆弾の被害と目撃したわれわれ科学者は、国際情勢の現状にがんがみ、原子力に
 対する負荷が、国際管理の確立を要請する。

仁科
 芳雄
 提案
 荳勝文策

~~The~~^{the} scientists who observed the damage done by atomic bombs
in view of the present ^{international} situation
As scientists who observed the damage ~~done~~^{done by} atomic
bombs, we (denounce the use of atomic energy as a means
of mass destruction and) request that an effective method for the
~~its~~ international control, be established.

原子爆弾の被害を目撃した科学者として吾々は、国際情勢の現状、
原子力を大量破壊の手段に使用することを否定し、
国際管理の確立を要する。
有効な
講

「日本学術会議声明」 1949年 （仁科先生起草）

日本学術会議は、平和を熱愛する。

原子爆弾の被害を目撃したわれわれ科学者は、

情勢の現状に鑑み、

原子力に対する有効なる国際管理の確立を要請する。

- 1950年3月 学術会議代表としてアメリカへ 初めてローレンスと顔を合わせる ローレンスのシンクロサイクロトロンを見る
- 1950年11月22日 武見太郎病院を訪ねる 武見「肝臓がん」と診断 川島病院に入院 ケリーからも最新の薬が空輸される

1951年1月10日午後4時15分 巨星墜つ



ハリー・ケリーのお墓
(1976年没享年76歳)
揮毫：茅誠司



仁科芳雄先生のお墓
揮毫：吉田茂

朝永振一郎先生のお墓



揮毫：武見太郎
「師とともに眠る」

仁科先生の傍らには
愛弟子、朝永先生と
日本の科学界復興の同志、ケリーが
静かに眠っている